

長	野	県		
埋	蔵	文	化	財
セ	ン	タ	ー	
年	報		40	

2023年度

一般財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター年報 40
～2023年度～

一般財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター



①長野市 長沼城跡遠景 (北西から)



②長野市 長沼城跡 焼土層から出土した中国銭 (中世)



③長野市 川田桑里遺跡遠景 (13世紀歴敷地 北から)



④松本市 南栗遺跡遠景 (東から)



⑤松本市 南栗道跡 火葬施設跡（中世以降）



⑥松本市 真光寺遺跡 中世以降の石列



⑦飯田市 五郎田遺跡 流路跡の遺物出土状況（弥生時代）



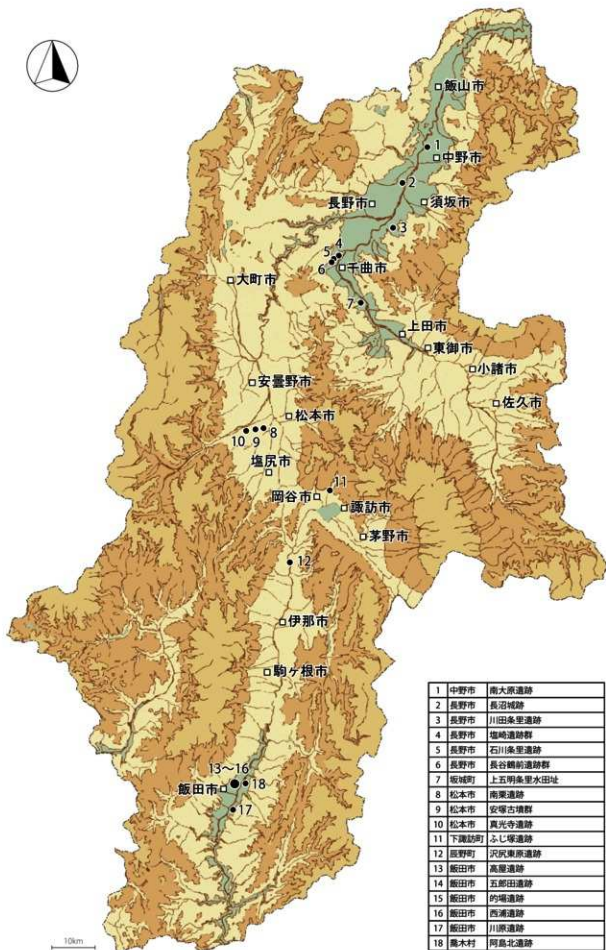
⑤飯田市 川原遺跡 縄文時代後期の敷石住居跡（南から 後方中央風越山）

目 次

口絵写真

- ①長野市 長沼城跡遠景
- ②長野市 長沼城跡 焼土層から出土した中国銭
- ③長野市 川田条里遺跡遠景
- ④松本市 南栗遺跡遠景
- ⑤松本市 南栗遺跡 火葬施設跡
- ⑥松本市 真光寺遺跡 中世以降の石列
- ⑦飯田市 五郎田遺跡 流路跡の遺物出土状況
- ⑧飯田市 川原遺跡 縄文時代後期の敷石住居跡

I	2023年度の事業概要	1	VII	学校・関係機関への協力等	55
II	発掘作業の概要	2	(1)	職員派遣・技術支援等	55
(1)	南大原遺跡	3	(2)	学校等への協力	57
(2)	長沼城跡	5	(3)	調査資料の利用	58
(3)	川田条里遺跡	9	(4)	インターンシップ等	59
(4)	上五明条里水田址	11	(5)	県有施設利用の応急的保存処理	61
(5)	南栗遺跡	13	(6)	派遣等の受入	61
(6)	真光寺遺跡	17	VIII	組織・事業の概要	62
(7)	安塚古墳群	21	(1)	組織	62
(8)	西浦遺跡	23	(2)	職員	62
(9)	五郎田遺跡	25	(3)	事業	63
(10)	的場遺跡・阿島北遺跡	28	IX	調査研究ノート	64
(11)	五郎田遺跡・高屋遺跡	29	(1)	信濃国更級郡六ヶ郷用水の開削について	
(12)	川原遺跡	33	一坂城町上五明条里水田址の		
III	整理作業の概要	37	発掘調査成果から一	65	
(1)	塩崎遺跡群・石川条里遺跡・		(2)	松本市真光寺遺跡で検出した石列の	
長谷鶴前遺跡群	38	検討		69	
(2)	ふじ塚遺跡	40	(3)	接合した礫石経が語ること（予察）	
(3)	沢尻東原遺跡	42	一下諏訪町ふじ塚遺跡の整理作業から一		
IV	普及公開活動の概要	44		73	
(1)	施設公開	45	(4)	長野市長沼城跡にみる	
(2)	現地説明会等	46	中世館内での鍛冶活動	77	
(3)	速報展・講演会等	47	(5)	近年の長野県埋蔵文化財センターの	
(4)	展示室・県庁ロビー展示等	50	応急的保存処理の現状と課題	81	
(5)	講座・出前授業・職場体験	51	(6)	長野県埋蔵文化財センター調査の	
(6)	出版物	52	新技術導入について	85	
V	指導者招へい	53	(7)	長野県内遺跡出土動物骨集成について	
VI	会議・研修会への参加	54		91	
(1)	会議・委員会等	54			
(2)	研修会等	54			



1	中野市	南大原遺跡
2	長野市	長沼城跡
3	長野市	川田糸室遺跡
4	長野市	塩崎遺跡群
5	長野市	石川糸室遺跡
6	長野市	長谷崎前遺跡群
7	板城町	上五明糸室水田址
8	松本市	南栗遺跡
9	松本市	安塚古墳群
10	松本市	真光寺遺跡
11	下諏訪町	志七塚遺跡
12	飯野町	沢尻東原遺跡
13	飯田市	高麗遺跡
14	飯田市	五郎田遺跡
15	飯田市	的場遺跡
16	飯田市	西浦遺跡
17	飯田市	川原遺跡
18	萬木村	阿島北遺跡

図1 R5(2023)年度 調査・整理対象遺跡

I 2023年度の事業概要

本年度は、発掘調査事業は、国6件（一部市・ネクスコを含む）、県2件、市町3件（うち1件は技術支援）、民間事業1件の計13件となった。このほかに県教育委員会からの研修等受託事業及び普及啓発や地域協力などの自主事業も行った。

1 発掘調査事業

国関連7億1,950万円、中央新幹線3億6,757万円、長野県1億6,396万円、その他5,960万円の計13億1,062万円（2024年3月7日現在の見込）の受託費により、13箇所の発掘作業と6箇所の整理作業を行った（大学からの整理委託は1箇所とした）。

（1）発掘作業

中野市南大原遺跡：本年度は集落域、近世水田域、築堤部分の3箇所の発掘調査を行った。とくに水田域では、地層採取法等の調査を実施し、安全かつ短期間で地形形成の分析を行えた。

長野市長沼城跡：本年度は、土塁跡、堀跡、門跡を含む二の丸や三の丸およびその周辺の城郭の平面形態が解明されてきた。

長野市川田条里遺跡：昨年度の地層採取調査に基づき、発掘し、弥生時代から平安時代の水田跡、鎌倉時代の屋敷地などが検出できた。

坂城町上五明条里水田址：本年度は、ほぼ古代水田域の東端に当たる地点を調査した。平安時代洪水砂層及びそれ以前の水田跡や洪水後の平安時代集落跡が検出された。

松本市南栗遺跡：長い調査歴がある松本盆地最大の集落跡である。本年度も奈良・平安時代の集落跡を中心に、中世以降の火葬施設跡が確認された。

松本市真光寺遺跡：中世の火葬施設跡や土葬墓が検出されただけでなく、これらを区画するかのような石列と溝跡も確認された。

松本市安塚古墳群：7世紀後半以降の古墳群があることは知られていたが、昨年度に地中レー

ダー調査を行ったところ数箇所の「礫・構造物」の存在が認められた。実際、本年度の1,000mの確認調査範囲内から3基の古墳（石室）が確認された。

飯田市西浦遺跡：古墳時代から奈良時代にかけての集落跡及び弥生時代から古墳時代の方形周溝墓が確認されている。

飯田市五郎田遺跡ほか：中央新幹線地点では、クランク状の弥生時代の溝（流路）跡から土器が集中出土した。3段階で廃棄（あるいは設置）されたとの所見が得られた。また、鉄剣とガラス玉を副葬した弥生時代後期から古墳時代前期の土坑墓も検出された。国道153号地点の五郎田遺跡や高屋遺跡では、弥生時代から古代の集落跡や流路跡が確認された。

飯田市川原遺跡・下川原遺跡：縄文時代後期の弧状になった石列遺構や北東北系の埋設土器も確認された。また、古墳時代中期の竅穴建物跡からは朝鮮半島南部からの搬入品と思われる百濟土器が出土している。

（2）整理等作業

長野市石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡：弥生～中世にかけての集落・水田域の変遷がうかがえる報告書が刊行された。

下諏訪町ふじ塚遺跡：約6万点のうち2万7千点の判読可能礫石経の抽出ができた。

辰野町沢尻東原遺跡：縄文時代中期集落跡の報告書刊行に至った。

2 普及公開、研修事業

施設公開、現地説明会、職場体験、講演会、地域展、地域連携歴史講座も実施した。インターシップは過去最高の延べ42名を受入れただけでなく、県内外でフォローアップやプロモーションも行った。また、専門研修ほか、職員自身の企画による自己研鑽研修（北海道、九州、韓国など）も実施できた。（川崎 保）

Ⅱ 発掘作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	面積㎡	調査期間	時代・内容	主な遺物
南大原遺跡	中野市	上今井 遊水池 整備事業	119,450	2023.8.7～ 2023.12.12	弥生：堅穴建物跡 奈良：掘立柱建物跡、土坑、焼 土跡 平安：堅穴建物跡 近世～近現代：溝跡	縄文：土器、石器 弥生：土器 古代：土器 近世：陶磁器
長沼城跡	長野市	長沼地区 河川防災ステーション 整備事業	10,426	2023.4.12～ 2023.12.25	中世～近世：土塁、堀跡、溝跡、 土坑、井戸、建物跡、礎石列、 柱穴列、石列、炭・焼土範囲、 埋集中・敷石遺構、遺物集中、 不明遺構	古代～近代：土器・陶磁器（碗、皿、内耳 鍋、カワラケ、すり鉢など） 中世～近世：土製品（輪郭口など）、石器、 石製品（硯、砥石、臼、五輪塔）、金属製 品（銭貨、鉄砲玉、匙など）、木製品（木 杭など）、その他（被熱赤化した埴材、鉄 滓、動物骨）
川田桑里 遺跡	長野市	（仮称） 若穂スマート IC 整備事業	7,734	2023.4.1～ 2023.7.28	弥生～平安：水田跡、 芯材を伴う畦畔 鎌倉：掘立柱建物跡、 欄列跡、土坑、溝跡	古墳：土器 弥生～平安：木製品（榎、飯蓋し、造出柱） 中世：土器・陶磁器、その他（鉄滓、種実）
上五明桑里 水田址	坂城町	一般国道18号 坂城東地バイパス （坂城町区間） 改築工事	1,600	2023.9.1～ 2023.12.15	古代：水田跡、溝跡、土坑、集 石遺構 中世：土坑	古代：土器（土師器、須恵器） 中世～近世：陶磁器、金属製品（釘）
南栗遺跡		松本 JCT 建設事業	5,200	2023.4.10～ 2023.12.8	古代：堅穴建物跡、掘立柱建物 跡、墓坑、土坑 古代以降：溝跡 中世以降：火葬施設	古代：土器（土師器、須恵器、灰輪陶器、 緑輪陶器） 平安以降：土器（山茶碗）、土製品（羽口）、 石器（砥石）、金属製品（釘、帯金具、刀 子、李引鉄、銭貨、鉄滓）、その他（人骨・ 動物骨）
真光寺遺跡	松本市	一般国道158号 （松本波田道路） 改築工事	2,600	2023.4.18～ 2023.12.8	中世：火葬施設跡 中世以降：溝跡、土坑、石列	縄文：石器（打製石斧） 中世～近世：土器（内耳、陶磁器） 中世以降：石器（石臼）、金属製品（銭貨）
安塚古墳群			1,000	2023.6.12～ 2023.9.25	古墳～奈良：古墳（石室） 中世以降：自然成跡 時期不明：土坑、溝跡、集石	縄文：土器、石器 古墳：土器 古代：土器 中世：土器、陶磁器
西浦遺跡		中央新幹線 建設工事	2,205	2023.4.17～ 2023.11.9	縄文：土坑 弥生～古墳：方形周溝墓、土坑 古墳：堅穴建物跡 古墳～奈良：掘立柱建物跡 古代～中近世：土坑 不明：溝跡	縄文：土器、黒曜石割片 弥生：土器、石器 古墳：土器、石器 古代：土器 中世：土器、陶磁器 不明：金属製品
五郎田遺跡	飯田市		2,625	2023.5.15～ 2024.1.25	弥生：堅穴建物跡、土坑、溝跡、 土坑墓 古墳：堅穴建物跡、掘立柱建物 跡、土坑、土坑墓 古代：堅穴建物跡、掘立柱建物 跡、土坑、溝跡 不明：土坑、溝跡、欄列	縄文：土器 弥生：土器、石器 古墳：土器、石器（磨製石鏃、打製石斧、 有肩扇状形石器） 弥生～古墳：金属製品（剣又は刀）、ガラ ス製品（玉） 古墳～古代：鉄製品 古代：土器
的場遺跡			確認調査 950	2024.2.19～ 2024.2.22	遺構なし	古代：土器（須恵器）
阿島北遺跡	喬木村		確認調査 5,100	2024.2.26～ 2024.3.9	遺構なし	古代：土器、石器
五郎田遺跡		国道153号 飯田北改良	1,400	2023.4.27～ 2023.8.31	古墳：溝跡、流路跡 古墳～古代：堅穴建物跡、土坑	縄文：土器 弥生：土器、石器（打製石鏃、磨製石鏃、 打製石斧、有肩扇状形石器） 古墳：土器 古代：土器 古墳～近世：金属製品（鉄製品、銭貨）
高屋遺跡	飯田市		2,100	2023.8.2～ 2023.12.15	弥生～古代：溝跡、流路跡 古墳：遺物集中 古墳～古代：堅穴建物跡、土坑 古代：掘立柱建物跡	弥生：土器、石器（石鏃、打製石斧） 古墳：土器（土師器、須恵器） 古代：土器（土師器、須恵器、灰輪陶器）
川原遺跡		防災・安全交付金 （道路）事業・国 権ダム建設（治水 ダム）事業（合併）	3,500	2023.4.18～ 2024.1.31	縄文：堅穴建物跡、土坑、配 石、集石遺構 縄文～中世：溝跡 弥生～古墳：方形周溝墓 古墳：堅穴建物跡、掘立柱建物 跡 中世以降：配石、集石遺構 時期不明：土坑	縄文：土器、ミニチュア土器、土銅、垂 飾、石器（石鏃、石鏃、石匙、打製石斧、 磨製石斧、磨石、石皿、石鏃、石棒、石刀） 弥生：土器、石器（磨製石鏃未成品） 古墳：土器（土師器）、石製品（白玉） 中世以降：陶磁器 近世：金属製品（銭貨）

(1) 南大原遺跡

上今井遊水地整備事業

所在地及び交通案内：中野市大字上今井字南大原1089ほか

上信越自動車道信州中野インターチェンジから北西に2.3km

遺跡の立地環境：千曲川は1870～1872（明治3～5）年に現在の位置に瀬替えされているが、遺跡形成時には旧千曲川左岸の曲流部に発達した自然堤防及び後背湿地上に立地する。

発掘期間等

調査期間	調査対象面積	調査担当者
2023.8.7～2023.12.12	119,450㎡	上田典男 寺澤政俊

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	3	弥生中期後半、平安時代
掘立柱建物跡	1	奈良時代
焼土跡	2	奈良時代
土坑	44	奈良時代
溝跡	8	近世、近現代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文、弥生、古代、近世
石器	縄文

発掘調査の概要（図3）

中野市教育委員会は、上今井遊水地整備事業に先立つ試掘調査で南大原遺跡の旧包蔵地範囲外で平安時代の遺物散布地や近世水田跡を確認したため、南大原遺跡の範囲を拡大した。本年度は、現地形の読み取り及び取得用地・支障物件の状況から、旧包蔵地範囲の北限部（A区）、旧千曲川の滑走斜面部（B区）、築堤箇所（C区）の3カ所を選定・調査する計画でいたが、諸般の事情でB区の調査は次年度以降に見送ることとした。また、近世水田跡が分布するとされた箇所では、地



図2 遺跡の位置（1：50,000 中野）



図3 調査区全体図

層抜取り調査（ジオスライサー調査）及びボーリング調査を実施した。

旧包蔵地範囲内の調査

A区は、旧千曲川に向かって南東側を下る緩斜面で、その傾斜に平行して8本のトレンチを設定・調査した。その結果、重複する平安時代の竪穴建物跡や、時期は特定できていないが、掘立柱建物跡や溝跡が検出された。これにより、県道三水中野線改良工事に伴う調査地点からA区に至るまでの範囲（約8万㎡）については、面調査が必要と判断した。なお、旧千曲川を挟んだ対岸は、志賀中野有料道路建設に伴って発掘調査された栗林遺跡A区にあたり、当該地区も弥生時代中期～平安時代の集落跡が確認されている。

近世水田跡の調査（図4）

C区は、近世水田跡が分布する低地部で、計19本のトレンチを設定・調査した。用地図上に「水路」と表記のある部分を境に北側のみに近世水田

跡が形成されている状況が把握でき、南側のトレンチでは水田層が確認されなかった。「水路」が古地図の水田の境界と一致するという中野市教育委員会の指摘があり、「水路」下の状況を確認するため、一部、トレンチの延長掘削を実施した。その結果、「水路」下には近現代の水路跡と近世水田に伴う水路跡が重複し、調査区北東側でそれらが分岐することが明らかとなった。

水田層は砂層の被覆状況や畦畔の位置が継承されていないことから2段階に大別できる。1段階目は、グライ化した灰白色の土層に鉄分の集積層を数枚挟み込んで15cm程度の厚さを持ち（Ⅱc層）、畦畔を伴う。長きに渡って水田耕作が営まれていた状況を示している。上層（Ⅱb層）との層界は明瞭で、凹凸が顕著に観察された。Ⅱb層は砂粒が主体であり、1段階目の水田を被覆した洪水砂と考えられ、畦畔をも削り、被覆している。また、グライ化した土層や鉄分の集積層を含むため、2段階目の水田を構成する土層の一部となる。2段階目の水田層は、後世の耕作・掘削により破壊されていることは否めないが、5cm前後と薄く、水田耕作の営まれた期間は1段階目に比して短いと考える。Ⅱb層が砂粒を主体とした洪水砂層を基調とすること、Ⅱc層土面の凹凸は夏の草取り作業の痕跡と考えられることから、1段階目の水田は、1742（寛保2）年8月洪水（戊の満水）で被覆され、その後、新たに畦畔を作り直して2段階目の水田が形成されたと想定できるのではなかろうか。

地層抜き取り調査及びボーリング調査は、近世

水田が分布するとされる範囲を「古千曲川」の流路方向（「字逆川」の範囲）に直行する方向で330mにわたる測線を設定し、26本の地層抜き取り調査及び同一測線上で2箇所でのボーリング調査を実施した。その結果、深さ6.2～6.9mで河床礫に達し、現千曲川の方向に緩やかに傾斜していることが明らかとなった。近世水田も棚田状に標高を減じていた。また、2023年度の引き渡し範囲から外した部分では、県道三水中野線に伴う発掘調査で得られた土層堆積と同様の堆積状況が確認され、C区との違いが明らかとなった。さらに同一地形面に湧水箇所があることを聞き取り調査で得られたため、一帯の確認調査が必要と判断した。

奈良時代の掘立柱建物跡を確認（図5）

拡張した2トレンチは、2間×2間で、北・東面に庇を持つ掘立柱建物跡を中心に、北・西側に柱穴状の土坑、南側と建物跡プラン内に焼土跡、土坑群を挟んでさらに西側に溝跡が検出された。掘立柱建物跡の柱穴からは須恵器高台付坏の破片が出土したほか、各遺構埋土の基調となるⅣ層からは、土師器甕や底部回転ヘラケズリの須恵器坏などが出土しており、8世紀代に限定された遺構群・文化層と考える。なお、Ⅳ層は調査区南西側周辺のトレンチのみでしか確認されなかった。

本年度調査の結果、A区は次年度以降調査を実施する必要があること、C区及びジオスライサー調査の結果、111,400m²の範囲を調査終了とし、事業者へ引き渡すこととなった。次年度以降も確認調査を実施して、面調査の必要な箇所を特定していく必要がある。（上田典男）

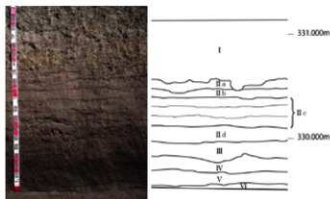


図4 近世水田層の土層断面



図5 掘立柱建物跡を中心とした遺構群（左が北）

(2) ながぬまじょうあと 長沼城跡

長沼地区河川防災ステーション整備事業

所在地及び交通案内：長野市大字徳保1036番2ほか 国道18号長野バイパス（アップルライン）大町交差点から北北東に約1km。

遺跡の立地環境：千曲川左岸の自然堤防上に立地する。遺跡西方の集落内を通る北国街道脇街道（松代道）沿いには、往時の街並みが残っている。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2023.4.12～2023.12.25	10,426㎡	伊藤 愛 広田良成 中野亮一 熊本奈美 小出晟生

検出遺構

遺構の種類	数	時期
土塁	1	中世～近世
堀跡	2 (3)	中世～近世
溝跡	4 (13)	中世～近世
土坑	31 (127)	中世～近代
井戸	3 (4)	中世～近世
建物跡（竪穴・礎石・掘立柱・門）	4 (13)	中世～近世
礎石列・柱穴列	2 (4)	中世～近世
石列	3 (3)	中世～近世
炭・焼土範囲	13 (20)	中世～近代
埋集中・散石遺構	6 (23)	中世～近世
不明遺構	1 (2)	中世
遺物集中	(7)	中世～近世

() R3～R5の合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	古代～近代（碗・皿・内耳鍋・カワラケ・すり鉢など）
土製品	中世～近世（輪羽口など）
石器・石製品	中世～近世（硯・砥石・臼・五輪塔など）
金属製品	中世～近世（銭貨・鉄砲玉・匙など）
木製品	中世～近世（木杭など）
その他	中世～近世（被熱赤化した燼材、鉄滓、動物骨）

調査の概要

長沼城跡は戦国時代から江戸時代にかけての平城で、戦国大名の武田信玄がその築城に関わった



図6 遺跡の位置（1：50,000 中野）

とされている。松代の海津城と並ぶ武田氏の重要拠点であったが、江戸時代に廃城になると徐々に地中に埋もれていき、のちに果樹園として利用される際に上層が改変され、その姿をうかがい知ることはできなくなっていた。地元の歴史研究会が古文書や絵図などをもとに長沼城跡の縄張り推定図を作成しているが、発掘調査例もなく、長い間実態は不明とされてきた（図7）。

2019年、台風19号により長沼地区が大規模な浸水被害を受けると、河川防災ステーションの建設が計画され、長沼城跡を含む34,500㎡が発掘調査の対象地となった。長野市教育委員会のトレンチ調査を経て2021年より本調査を開始し、3年間で合計27,271㎡の調査を完了した。うち本年度の調査面積は10,426㎡である。本年度は各調査区で土塁跡や堀跡のラインを検出し、城の構造把握に努めた。

内堀・中堀推定地

堀跡は城全体を囲む中堀と、本丸を取り巻く内堀がある。2022年度の調査では、中堀の内周立ち上がりで石列を検出している（年報39では「石積み」として報告）。本年度も同様の石列を検出し、さらに石列の下には一定間隔で木杭が打ち込まれていることが明らかとなった（図8）。

木杭は長いものでは約1mを測り、部分的に前後2列となる。自然堆積層に打ち込んでおり、造成段階で石列を配置する。断面観察によると石列の上を造成土で被覆しており、本来は露出していなかったようである。堀の際に施していることから、水による浸食・崩落を防ぐための護岸工事の

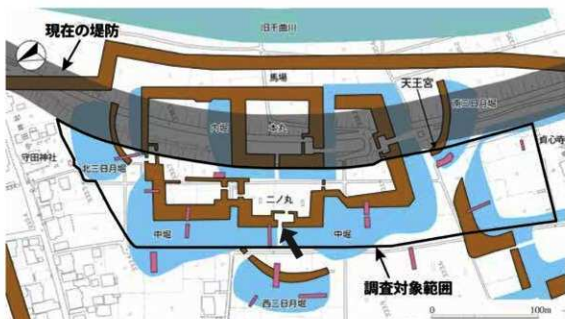


図7 縄張り想定図（長野市埋蔵文化財センター所報32掲載図に加筆）

一環であったと想定している。

中堀外周の立ち上がりは一部で確認できたが、石列や木杭がみられず、こうした護岸工事は堀の内側だけに施したものであったと考えられる。中堀の深さは平均4mほどで、深いところでは現地表面から約6mとなる。さらに堀の内周側には土塁が巡るため、防御性はかなり高かったことがうかがえる。なお、中堀の底に近い層からは、中世～近世の瓦質土器が出土している。

内堀は2021年度に一部を確認し、本年度はそれに続く部分の調査であった。内堀の内周は現堤防下にあたり調査区外であるが、外周は確認でき、石列や木杭を検出した。中堀では内周のみにみられた石列や木杭による護岸工事が、内堀では外周にも施されていたことが特徴的である。



図8 中堀に伴う石列と木杭

門の発見と二の丸推定地

西門と想定される地点で、礎石4基からなる西側の門と、礎石3基が残存する東側の門を検出した（図7の矢印部分）。2つの門は直線的には並ばず、ややずれている。さらにこれらの礎石を含めて方形に土塁がめぐる様子を平面精査によって確認し、本城の西門は枳形虎口であることが判明した（図9）。門の正面には土橋が設けられ、その両側の堀際も中堀内周と同様石列や木杭によって護岸されていた。

門から入って最初の平場にあたる二の丸推定地は、礎石建物跡や井戸跡、石列を伴う区画溝跡や敷石遺構など、調査対象地内の平場の中では最も遺構が多い。礎石建物跡は南北2間×東西4間で、礎石には五輪塔の地輪の転用もある（図10）。井戸跡は二の丸推定地内で3基を確認した。1基は石組み井戸で、ここでも五輪塔（地輪）の転用がある（図11）。残る2基は素掘りの井戸で、埋土上層には人頭大の礫に混じって五輪塔や石臼などの石製品が投げ込まれていた。

石組み井戸の周囲では、石列を伴うL字状の溝跡を検出した。石列は溝の内側に面を揃えるように配置しており、屋敷跡などの空間を区画する目的があったと想定している。これと様相が似ている石列が北に向かって断片的に続いているが、一

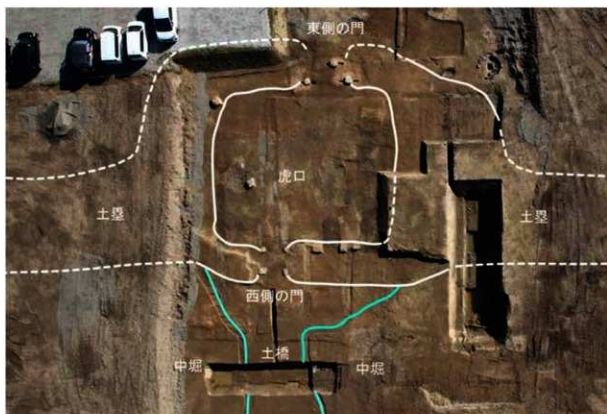


図9 検出した桁形虎口と土橋 (写真右が北)



図10 礎石建物跡の調査状況



図11 石組み井戸

連のものかは検討が必要である。なお、L字状の溝跡付近には、直径5～10cm程度の川原石が面的に広がる敷石遺構を確認した。長径1～2mの範囲に収まるものが多く、重量物を乗せるための土台や、手水場といった水に関する施設の可能性がある。このほか鍛冶業に関連する遺構も確認している。

二の丸推定地の出土遺物は戦国時代～江戸時代初頭を主体とする。カワラケヤや内耳鍋など地元産の土器のほか、瀬戸美濃焼や唐津焼などの陶磁器、匙(図12)・鉄砲玉・銭などの金属製品、五輪塔の部材・石臼・硯といった石製品がある。

二の丸北推定地

二の丸の北側にあたるこの平場の名前は、近世の絵図には記されていない。2022年度の調査では、炭や焼土が広範囲に広がる様子を確認した。壁材が被熱したものとみられる粘土塊や、米・麦や粟などの雑穀類を多量に含む炭化物がみつきり、蔵の存在を想定している。

本年度はその調査区の隣接地を調査し、焼土範囲や土坑、竪穴建物跡を検出した。出土遺物は土



図12 匙の出土状況

器や陶磁器を主体とするほか、明銭や北宋銭などの中国銭が15枚まとまって出土した（口絵②）。掘り込みなどはみられず、用途は判明していない。

三の丸推定地

この調査区の大部分は中堀と土塁である。遺構は希薄で、その上層には後世の畑作に伴う畝が残り、開墾により削平された可能性がある。遺物としては土器や陶磁器、銭などが出土している。中堀の内周には石列や木杭が伴い、他の調査区と同様の様相であるが、断面観察をしたところ、堀を埋めて平場を西に拡張した痕跡がみられた。他の調査区ではこうした痕跡はなく、この周辺のみで改修をおこなったと考えている。

天王宮

南三日月堀に伴う土塁との伝承が残り、現堤防



図13 天王宮写真撮影

から張り出す形で残存していた。2022年度末より調査を実施し、土塁の一部であることを確認した。盛土の堆積状況は大きく2段階に分けられる。最初の盛土後、焼土や炭を多量に混ぜた土で版築状に造成し、その上にさらに盛土を施している。これらが時期差なのか構築過程を示すのかは明らかではない。なお、基盤層に近い位置から出土した16世紀初頭の染付皿が、土塁構築時期の目安になると考えている。

調査成果から復元できる長沼城跡の縄張り

2021年度以降実施してきた調査成果を反映させた縄張り想定図を作図した（図14）。図7と比較すると、おおむね一致していることがわかる。次年度は南の武家屋敷推定地を調査予定であり、新たな成果を期待したい。（伊藤 愛）



現段階で想定される城郭構造名を記している

図14 調査成果から復元した縄張り想定図

(3) かわたじょうりいせき 川田条里遺跡

(仮称) 若穂スマート IC 整備事業

所在地及び交通案内：長野市若穂川田字塚本北1287-2ほか 上信越自動車道若穂バス停北西の側道沿い

遺跡の立地環境：長野盆地の東部に位置し、千曲川右岸の後背湿地に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2023.4.1～2023.7.28	7,734㎡	上田典男 寺澤政俊

検出遺構

遺構の種類	数	時期
掘立柱建物跡	2	鎌倉時代
横列跡	1	鎌倉時代
土坑	100	鎌倉時代
溝跡	7	鎌倉時代
水田跡	8	弥生時代～平安時代
芯材を伴う畦畔	4	弥生時代～平安時代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	古墳時代、中世
木製品	弥生時代～平安時代（榎、甍返し、造出柱など）
その他	鉄滓・種実（中世）

発掘調査の概要

2022年度の地層採取調査の成果に基づき、面調査及びトレンチ調査を実施した。面調査は、安全対策として隣接する耕作地や道路から10m離れた位置に調査区を市道51090線の東西に3カ所ずつ、計6カ所（T1～T6）設定し、調査を進めた。トレンチ調査は水田遺構に対して行い、各調査区の壁に沿ってL字を基本として深掘りトレンチを入れ、堆積土層の観察をし、畦畔が確認された部分について一部面調査を実施した。

また、調査地はスマートインターチェンジの調整池に相当する部分で、地表下2mまで掘削を伴



図15 遺跡の位置（1：50,000長野）

う地形改変などの影響が及ぶため、その深さまでが記録保存調査の対象となった。

鎌倉時代の屋敷地を発見（図16）

出水が予想された市道51090線の西側から着手し、2022年度調査で把握された水田層の上層で複数の柱穴状の土坑や溝跡を確認したため、この遺構検出面を調査面として調査を実施した。その結果、2棟の掘立柱建物跡及び柵列をL字に取り囲む溝跡を確認した。調査地が、上信越自動車道と認定こども園川田（室町期の川田氏館跡を検出）の中間に位置するため、当初は「川田氏館跡」に関連する遺構群と考えていたものの、出土土器・陶磁器の示す年代は13世紀（鎌倉時代）であり、「川田氏館跡」の遺構群より1段階古い時期の屋敷地であることが明らかとなった。当該地の土地利用を遡る新たな発見となった。

掘立柱建物跡の柱穴配置は2棟とも特異で、基本的な柱穴配置は1間×3間で、東西及び南北に庇が付くとみられるかどうか、検討を要する。なお、これらの遺構群は市道51090線より東側では一切確認されていない。

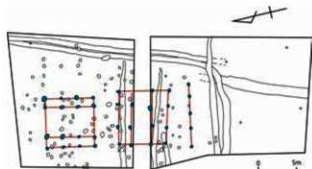


図16 T4・5区 遺構分布図

水田跡の調査 (図17~20)

2022年度の地層採取調査で得られた上部の泥炭層(8層)を基準に各調査区のトレンチ壁面の土層断面で層準を定めた。また、T2・T3・T5区で畦畔芯材を確認し、T3・T5区では一部の調査を実施した。

T3区の畦畔芯材は、泥炭層直下で確認され、扉口材(蹴返し・楣)が十字に重なった状態で確認された。なお、T2区で確認された芯材は、T3区と同一層準であり、畦畔の方向が読み取れる。T5区では、泥炭層以下の4枚の水田層から畦畔芯材が確認された。その内、泥炭層直下の畦畔芯材は、高床建物の建築部材(造出柱)を再利用したもので、横木等の木組みを用いて沈み込み防止のための措置が取られていたと考えられる。

調査に並行して、各地区の堆積土層や畦畔芯材を対象にプラント・オパール分析や放射性炭素年代測定などの科学分析を実施した。それらの分析結果も合わせると、市道51090線の東側(T1~T3区)では、2枚の泥炭層が確認され、泥炭層より上に2枚の水田層、泥炭層に挟まれて2枚の水田層と計4枚の水田層が確認された。放射性炭

素年代測定分析では、上の泥炭層の年代が7世紀半ば~8世紀後半、下の泥炭層が3世紀半ば~5世紀前半という測定値が得られた。これをもとにすると、上位2枚の水田層は、上信越自動車道調査地点B区の第1・2水田に、泥炭層に挟まれる2枚の水田層は、B区第3・4・5水田のいずれかに相当すると考えられる。なお、下の泥炭層以下は地表下2mを超えるため調査対象外である。

一方、市道51090線の西側(T4~T6区)では、2枚の泥炭層が確認され、泥炭層より上に2枚の水田層、泥炭層に挟まれて1枚の水田層、下の泥炭層より下位に5枚の水田層と計8枚の水田層を確認した。放射性炭素年代測定分析では、上の泥炭層の年代が6世紀後半~8世紀後半という測定値が得られた。これをもとにすると、上位2枚の水田層は、T1~T3区と同様に上信越自動車道調査地点B区第1・2水田、泥炭層に挟まれる水田層はB区第3水田、泥炭層以下5枚の水田層はB区第4~8水田に相当すると考えられる。このことは、各層から出土した畦畔芯材から得られた放射性年代測定値とも大きく矛盾しない。

(上田典男)



図17 T3区 畦畔芯材出土状況



図19 T5区 畦畔芯材出土状況



図18 T3区「楣・蹴返し」出土状況



図20 T5区「造出柱」出土状況

(4) 上五明条里水田址

一般国道18号坂城更埴バイパス
(坂城町区間) 改築工事

所在地及び交通案内：坂城町上五明552ほか
JR 坂城駅から南西約1.5km

遺跡の立地環境：千曲川左岸の氾濫原上に立地
発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2023.9.1～12.15	1,600㎡	市川隆之・小出誠生

検出遺構

遺構の種類	数	時期
溝跡	7 (24)	古代
土坑	5 (63)	平安時代・中世
水田跡	3 (3)	古代
集石遺構ほか	1 (2)	奈良時代

() 内は2021～2023年の合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・土製品	奈良～平安時代(土師器、須恵器) 中近世(陶磁器)
金属製品	中近世(釘)

調査の概要 (図22)

国道18号バイパス改築工事に伴う上五明条里水田址の発掘調査は2021年度から開始し、本年度で3年目となった。本年度は2021年度調査区の南側地点を対象に9月1日から着手し、10月に2021年度調査区東側地点も追加調査することとなった。調査対象地内の現農道部分は大部分が深く掘乱され、遺構面は僅かに残存するのみであった。

当初、隣接する2021年度調査地区の成果から平安時代の集落跡と下層水田面の2面調査を想定したが、平安時代の集落跡下層の確認トレンチで河道跡の窪地内に洪水土に被覆された水田面を3面確認した。そこで平安時代の集落跡検出面を1面、河道跡内の水田面を2～4面として調査を進めた。

調査地点の旧地形と変遷

2021・2022年度の調査では、千曲川が離水する



図21 遺跡の位置 (1:50,000 坂城)



図22 調査区遠景 (北西上空から)

以前に形成された砂礫層上面の河道跡(窪地地形)内を奈良時代に水田とし、河道跡が埋積されて平坦化した平安時代中期には集落域が広がり、中近世には遺跡南西方の沢から供給された堆積土で南西から北東方向へ傾斜する地形へ変化して、再び水田化したことを捉えていた。

本年度の調査でも同様の状況が確認された。特に河道跡の東岸は狭い中州状の微高地となり、その脇の河道跡内が最も深くなっていることが判明した。

なお、過去の調査から本遺跡では、平安時代前期の洪水砂礫の可能性のある砂層が確認されているが、2021～2023年度の調査域内では明確に断定できていない。平安時代の集落跡検出土層の薄い細砂～シルト層が該当すると思われるが、下層との層界面は不明瞭で、これらの土層が被覆した遺構面も確認できなかった。薄い堆積層が耕作等で攪拌されて遺存しなかった場合もあるが、水田開



図23 調査1面の遺構

連遺構は全く検出されておらず、おそらく調査域は平安時代前期には水田として利用されていないことが推察される。

平安時代中期の集落跡（図23）

過年度の調査区では竪穴建物跡が分布していたが、本年度の調査1面では若干の土坑と溝跡のみ検出した。溝跡は浅く途切れ、区画溝と推測する。土坑は調査区北西隅で数基検出され、うち1基では内部で火が焚かれて壁が赤化していた。今回の調査区は遺構密度が低く、竪穴建物跡がないことから、集落域の東はずれと判断した。

河道跡窪地内の水田跡（図24）

河道跡に形成された窪地地形はこれまでの調査区より深く、洪水土層の枚数も多い。確認された3面の水田跡を被覆する洪水土層は場所によって層厚が異なり、一部は洪水時に浸食された場所もあって遺存状態は悪い。水田跡は、窪地地形内の地形変換点付近に継続的に維持される畦畔を配置し、そのなかを小畦畔で区切っている。水田一筆は短辺2m前後×長辺2～9m前後の規模である。

調査4面の水田跡は、窪地地形最底部より一段高い場所を水田とし、最底部は自然堆積土層（シルト層）があり、湿地のままで水田化していない可能性がある。調査3面では水田域が拡大し、最低部にも畦畔が確認された。調査3面以降には用水を敷設して下流域へも水を配する構造に変化している。

水田跡の時期は調査4面水田跡から須恵器坏や土師器の非口クロ調整坏が出土し、奈良時代頃と



図24 調査3面の水田跡

推測する。調査2・3面の水田跡は奈良時代以後から平安時代前期までの所産とみる。

今後の調査にむけて

長野県内では検出例が少ない奈良時代水田跡が河道跡の窪地地形で確認できたことは大きな成果である。

その一方で本遺跡の北西にある岩井堂山の東山麓や調査区南東300m付近で検出されている平安時代前期の水田跡は、今回の調査区では確認できていない。現段階では本遺跡は善光寺平南部の石川条里遺跡や更埴条里遺跡のような数kmにわたるような広域条里型水田ではないと推察する。今後、奈良時代水田跡の広がり確認とあわせ、平安時代前期の水田跡の様相も確認していきたい。

また、平安時代中期の集落周辺部では、区画溝跡外に遺構がないことから、畑などとして利用されていたと推測した。具体的な検証はできなかったが、今後も類似調査等から集落周辺域の様相を明らかにしたい。

（市川 隆之）

(5) 南栗遺跡

松本 JCT 建設事業

所在地及び交通案内：松本市島立5024ほか
長野自動車道松本 IC から南に 3 km

遺跡の立地環境：鎮川左岸の自然堤防背後の緩斜面に立地。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2023.4.10～2023.12.8	5,200㎡	河西克造 大竹憲昭 平林 彰 関 香介 丸山晃平

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	16 (50)	奈良・平安時代
掘立柱建物跡	1 (6)	奈良・平安時代
墓坑	1 (4)	奈良・平安時代
土坑	107 (121)	奈良・平安時代
溝跡	1 (1)	奈良・平安時代以降
火葬施設	3 (3)	中世以降

() 内は2022年・2023年の合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	奈良・平安時代 (須恵器、土師器、灰輪陶器、緑輪陶器) 平安時代以降 (山茶碗)
土製品	平安時代以降 (羽口)
石器・石製品	平安時代以降 (砥石)
金属製品	平安時代以降 (帯金具、刀子、牽引鉄、釘、鉄滓、銭貨)
その他	平安時代以降 (人骨、動物骨)

調査の概要 (図26)

南栗遺跡では1983～1985年に圃場整備に伴い松本市教育委員会が、1985・1986年に長野自動車道の建設に伴い当センターが発掘調査を実施した。2022年からは中部縦貫自動車道と長野自動車道を結ぶ松本 JCT の建設に伴い、当センターにより発掘調査が行われている。

遺跡のある奈良井川西岸地域は三の宮遺跡、北栗遺跡、下神遺跡など、多くの古代の集落遺跡が



図25 遺跡の位置 (1 : 50,000 松本)



図26 南栗遺跡 R5 年度調査区

分布していて、本遺跡もそのうちの一つである。長野自動車道の建設に伴う一連の調査では321軒の竪穴建物跡が見つかった。

2022年度は6,000㎡を調査し、奈良・平安時代の竪穴建物跡34軒、掘立柱建物跡5軒、墓坑3基、土坑14基、溝跡1条、配石2基、井戸跡1基を検出した。

本年度は、昨年度調査区の南隣接部分5,200㎡



図27 調査区全景（北が上）

の調査を行い、奈良・平安時代と中世の遺構を確認した。

奈良・平安時代の集落の広がり

昨年度の調査区南端で検出した流路跡が長野自動車道調査で遺構が少なくなる位置とほぼ一致していたことから、奈良・平安時代の集落跡の南限と考えた。しかし本年度、流路跡の南側を調査したところ、同時代の竪穴建物跡16軒、掘立柱建物跡1軒、墓坑1基、土坑107基が新たにみつかった。竪穴建物跡は調査区中央にまとまる傾向があるものの、南端でも2軒みつまっていることから、集落跡は、さらに南に広がっていると推定される。

特徴的な竪穴建物跡

調査区南端で検出した竪穴建物跡2軒のうち、東側の1軒（SB44）では南西側の床面から輪の羽口が出土した（図28）。建物内には炭化物や鉄滓が多く混じったピットも1基みつかっていて、鍛冶業を行っていた可能性がある。また、西側の1軒（SB45）は東壁中央部に石組みのカマドを



図28 竪穴建物跡（SB44）出土の輪の羽口



図29 竪穴建物跡（SB45）カマド遺物出土状況

設けていて、内部には支脚に使ったとみられる石がそのまま残っていた。このカマドからは土師器がまとめて出土していて、カマドの廃棄時に、何らかの儀式が行われたと推定される(図29)。

焼失住居の発見

SB39とした竪穴建物跡からは埋土や床面付近から多量の焼土塊や炭化材が出土していて、焼失住居と考えられる。この建物跡は検出時から方形に焼土が周っている状況が確認でき、埋土内からも焼土が多量に出土した。また、床面付近では炭化材が放射状に残っていることが確認できた(図32)。

焼土や炭化材は建物跡内の全面に広がっているが、特に南西側に多くみられ、壁面は全体的に被熱し赤色化していた。

SB39からは他の建物跡に比べ山茶碗が多く出土している。また、須恵器甕片を転用した硯や、白磁の玉縁碗の破片、刀子などが出土していて、居住者の性格を考えるうえで重要な資料になった。



図30 竪穴建物跡(SB39)出土の白磁玉縁碗



図31 竪穴建物跡(SB39)カマド遺物出土状況(西から)



図32 竪穴建物跡(SB39)焼土・炭化物出土状況(西から)

中世後期の火葬施設跡 (図33~35)

調査区南端では古代面の上に中世面が確認され、火葬施設跡が3基見つかった (SK21・SK22・SK23)。いずれも内部から多量の焼土や炭化材、焼人骨が出土している。また、SK21・23は壁面が全体的に被熱し赤色化していた。

3基とも、平面形は隅丸長方形で、SK21・23は西壁中央部に突出部が設けられている。また、SK22・23は底部中央に東西方向に溝がある。溝の深さは、SK22が約3cm、SK23は約10cmである。また、SK21・23からは拳大～人頭大の石が出土し、特にSK23底部では、溝の両側に石を丁寧に並べた状態でみつかった。

出土遺物はほとんどないが、3基から銭貨が合

計10点出土している。銭貨の表面は肉眼で種類を判別できないほど腐食が激しい。肉眼で種類を判別できるものはほとんどないが、そのなかでSK22底部から出土した1点は洪武通宝 (初铸1368年) と判別できた (図36)。このことを根拠として、火葬施設跡の時期は中世後期頃と考えられる。

今後の課題

本年度の調査では古代の集落範囲が想定より南側まで広がっていることがわかった。来年度以降も継続する予定の調査では古代の集落や中世後期頃の火葬場の範囲や内容の把握に努めていきたい。

(関 杏介)



図33 火葬施設 (SK21) 石・骨・炭化物出土状況 (南から)



図35 火葬施設 (SK23) 底部集石検出状況 (北から)



図34 火葬施設 (SK22) 骨・炭化物出土状況 (西から)



図36 火葬施設跡 (SK22) 出土 洪武通宝

(6) 真光寺遺跡

一般国道158号（松本波田道路）改築工事

所在地及び交通案内：松本市波田1717-2ほか
松本電鉄上高地線三溝駅から北に0.3km

遺跡の立地環境：梓川右岸に形成された河岸段丘上（森口面）に立地する。本遺跡の範囲内には1557（弘治3）年に再興されたと伝わる真光寺が所在している。遺跡の北側と南側には、開発が中世にさかのぼる新村堰、和田堰、神林堰が流れており、これらは「三溝」の地名の由来とも言われる。また、遺跡の東方には7世紀後半以降の築造と推定される安塚古墳群、秋葉原古墳群が分布している。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2023.4.18～2023.12.08	2,600㎡	杉本有紗 水科沙華 平林 彰 酒井実姫 丸山晃平

検出遺構

遺構の種類	数	時期
火葬施設跡	13 (36)	中世
溝跡	12 (31)	中世以降（時期不明含む）
土坑	203 (476)	中世以降（時期不明含む）
石列	1	中世以降

() 内は2021～2023年の合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	中・近世（内耳鍋・陶磁器）
石器・石製品	縄文時代（打製石斧）、中世以降（石臼）
金属製品	中世以降（銭貨）

調査の概要（図38）

標記事業に伴い、当センターが2020年度から調査を実施している。2020年度は一部表土剥ぎを行い、2021年度から本格的な発掘調査に着手した。

2021・2022年度の調査では、7世紀後半から8世紀初頭の築造と考えられる古墳2基（SM01・

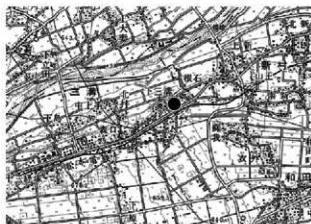


図37 遺跡の位置（1：50,000 松本）

02）、中世の火葬施設跡や土葬墓、中世の可能性が高い堅穴建物跡・溝跡・欄跡・土坑などの遺構を確認したほか、縄文時代中期の遺物も出土している。

本年度は、真光寺の東側、昨年度調査区の北西側の地区を調査し、昨年度までと同様の中世の遺構を検出した。さらに、内耳鍋などが出土する土坑や中世以降に属する石列や溝跡を検出した。

中世の火葬施設跡と土葬墓

本年度は、中世の火葬施設跡を13基、中世以降の土坑（墓坑を含む）を203基検出した。

火葬施設跡は、遺構検出面で炭や焼土が面的に広がる箇所を遺構として登録し、調査を進めた。遺構の平面形状は隅丸長方形や円形を呈している。遺構検出面から底部までの深さは隅丸方形では浅く、円形では深い傾向がある。ほぼすべての火葬施設跡で埋土は上下2層に分かれ、下層からは炭化物や焼土に混じって多量の焼骨片が出土した。また、15世紀代の古瀬戸の仏華瓶などの陶器片や、焼けた銭貨が出土したものもある（図39）。

多量に出土した焼骨片は亀裂が入ったり細かく割れていたりしているため多くは部位不明だが、大腿骨や骨盤片などの部位を推定できた個体もあった（図40）。火葬後に取骨行為があったのか、あるいは取骨されずそのまま埋葬されたのかについては、今後の整理作業で出土骨量や部位の詳細な観察を通して検討していきたい。

土葬墓と推定する土坑は、真光寺東側の昨年



図38 調査区全景（北から）



図39 火葬施設跡から出土した仏舎瓶（SK298）

度調査区付近で、直径約80cm、深さ約50cmで掘り込みが垂直に近い円形の土坑を6基検出した。このうち5基の底部から、焼成を受けていない歯や顎骨などの人骨片が出土した（図41）。なお、四肢骨など脛骨以下の部位は確認できなかった。茂原信生京都大学名誉教授のご教示によれば、出土骨には形成中の永久歯が含まれることから、6歳以下の子どもである可能性が高い。

こうした特徴は、昨年度確認された土坑群に類似する。この土坑群は現真光寺東側の限られた範囲のみに一定の距離で重ならず形成されてい



図40 火葬施設跡から出土した焼骨（SK328）

る。昨年度、これらの遺構の性格として歯や頭骨のみが埋納された墓坑である可能性を指摘しているが、6歳未満であれば全身の埋葬も可能であり、類例調査などを進めて、そうした特殊な埋葬があったのかを慎重に検討していく必要がある。いずれにしても、規格性のある土坑が一定範囲にのみ形成されたことは間違いなく、当時の葬制や



図41 土坑底部から出土した歯 (SK314)

土地利用を考察するにあたって重要な土坑群である。

16世紀の内耳鍋が出土する土坑

現真光寺より北西側の調査区では中世以降の土坑、溝跡を検出した。出土遺物としては、内耳鍋、陶磁器片（近世や近代以降含む）、鉄製品、銭貨、石製品などがある。特に内耳鍋については、現真光寺東側の本年度調査区内では出土せず、北西側の調査区内に集中する印象がある。

直径約5m、深さ約2mを測る隅丸方形の土坑(SK475)は、埋土中及び土坑底面で部分的に礫を多く含み、礫に混じって内耳鍋や用途不明の石製品などが出土した。内耳鍋は高さ約14cm、直径約27cmになる。胴部から口縁は直立に近く立ち上がる。こうした形状などから16世紀中頃と推定する。なお、土器底面は欠損し、胴部外側には炭化



図42 土坑 (SK475) から出土した石製品、礫

物が多量に付着していた (図43)。

SK475の近くには、規模や形態の差はあるものの、同質の埋土(黒色砂質土)で、内耳鍋や鉄製品、骨片などが出土する土坑(SK500)がみつかる。同じように埋土中に礫を多く含む箇所があり、特に底面には円形に礫が配置されていた。これらは、生活に関わる道具類を廃棄した土坑や井戸跡などに道具類が廃棄されたものと考えられる。

また、同調査区では、後世の攪乱により積極的に掘立柱建物跡としては認定できなかったものの、黒色砂質土を埋土とする小規模な土坑も多く検出した。こうしたことから、現真光寺北西側には16世紀代の居住に関わる空間が広がっていたことが想定できる。東側の土葬墓が広がる空間との関係については、各遺構の時期認定を慎重に行い遺跡全体の様相をとらえたい。

並行する石列と溝跡

現真光寺お堂の北東部分で、幅約2m、長さ約6mの石列を確認した。現耕作土直下で礫の上部が出土しはじめ、手作業により検出を進めたところ、長径約30~50cm程の扁平礫・亜円礫が直線的に並び、その間に5~20cm前後の亜円礫・亜角礫が多量に充填されていた。礫は花崗岩・安山岩・硬質砂岩・チャートなどがあり、地山(砂礫層)



図43 土坑 (SK475) から出土した内耳鍋



図44 石列と溝跡 (SD30) の検出状況 (南西から)

に含まれるものと同じである。

時期を特定できる出土遺物はないが、中世土坑などの埋土である黒色砂質土層の直上に石列が形成されていることから、中世以降の築造物であると推測している。なお、石列直下の黒色砂質土層には灰色シルトがブロック状に混じり、さらに部分的にわずかに硬い面があることから、凹凸のある地山の上に黒色砂質土を人為的に平らに整地したのちに石を配置したと考えられる。

また、石列の検出を進める過程で、石列に並行するように幅約2mの溝跡 (SD30) を検出した。溝跡は現真光寺お堂から北東方向に約8m伸びたところで北方向へ曲がり、本年度調査区の北端まで続いていた。深さは約0.6mを測り、断面は逆台形を呈する。埋土中には砂・粘土の互層が確認でき、堆積環境を推定するため科学分析を実施している。

石列は、溝跡 (SD30) が北に方向を変える箇所までは並行したが、そこから調査区北端までの

区間は部分的に礫が残るものの、現耕作土造成による削平のためか前述のような構造は認められない。しかし、石列に使用されていた長径30～50cm程の扁平礫・重円礫が溝跡 (SD30) の底面に点々と散見されるため、本来は石列も溝跡に沿って調査区北に向かって伸びていた可能性がある。

石列・溝跡の東側には土葬墓群、西側には居住に関わる遺構がある。仮に同時期にこれらが存在した場合、溝跡 (SD30) と石列は空間を区画する溝とそれに伴う構築物とも考えられるが、時期の認定と類例調査を進めたくて解明していく必要があろう。なお、溝跡 (SD30) は来年度調査予定地へ続くため、上記を踏まえて調査にあたりたい。

(杉木有紗)

(7) 安塚古墳群

一般国道158号(松本波田道路)改築工事

所在地及び交通案内: 松本市和田150番地ほか
アルピコ電鉄新村駅から南西へ750m

遺跡の立地環境: 梓川の右岸、東筑摩郡山形村清水高原を源流とする唐沢が形成する扇状地の扇端部に広がる。調査対象地は古墳群の最南端で、西隣には真光寺遺跡(当センターが2020年度から調査)、東隣には秋葉原古墳群(1982年度に松本市教育委員会が調査)がある。

発掘期間等

調査期間	調査対象面積	調査担当者
2023.6.12~9.25	1,000㎡	平林 彰

検出遺構

遺構の種類	数	時期
古墳(石室)	2(3)	古墳~奈良時代
象石	3	時期不明
土坑	20	時期不明
溝跡	6	時期不明
自然流路	1	中世以降

()内は調査対象地内の総計

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文、古墳、古代、中世
石器	縄文

安塚古墳群の歴史

安塚古墳群は、1701(元禄14)年と伝わる絵図に、「西安塚」として3基の古墳が描かれ、江戸時代前期には、その存在が知られていた(松本市教委1979)。1919年に刊行された旧東筑摩郡誌の「古墳及発掘物一覧表」は、「曾て開墾して水田とす。祝部土器の破片あり」と紹介している(信濃教育会東筑摩部会1919)。1950~60年代の水道工事などで、古墳らしい石積みや須恵器が発見され、南新・安塚地区一帯に注意が向けられた。1978



図45 遺跡の位置(1:50,000 松本)



図46 松本市特別史跡 安塚第6号古墳

年、付近一帯の圃場整備事業に伴う緊急調査により、7世紀後半から8世紀前半代に造られた9基の古墳が確認されるに至り(図46 松本市教委1979)、西は新村地区根石、東は専稱寺、北は梓川の段丘崖、南はアルピコ交通上高地線までの範囲に広がる安塚古墳群が遺跡地図に登録された。

今回、国道158号の改築計画が立案されたため、2021年度、松本市教委が改めて範囲確認調査を行ったところ、松本環状高家線以南で古墳らしい石積みがみつかったため、安塚古墳群が和田地区にまで広がることになった。

遺構の地中レーダー探査

当センターでは、工事用道路が未整備の段階における遺構確認調査の代替措置として、2022年度秋に地中レーダー探査を実施し、遺構(古墳)の分布範囲の把握に努めた。方法は、13,300㎡の対象範囲にIDS GeoRader社製のStream-Xという機材を南北方向に約20cm間隔で往復させ、地中の異常信号を拾っていくというものである。

その結果、松本市教委がみつけた古墳らしい石積みが、地下1.2mの異常信号と対応し、地中レーダー探査に一定の成果を期待できることが確かめられた。この探査では、「礫・構造物による反応」が、ほかに3カ所で確認された。

遺構確認調査の成果

本年度は、工事用道路が整備されたため、(株)島田組に発掘作業支援業務を委託して、調査対象範囲の西側約5,000㎡を対象に、遺構確認調査を実施した。松本市教委の試掘調査や地中レーダー探査の成果を参考に、幅2m、延長500mのトレンチを格子状に設定した(図48)。掘削は主にバックホーで行い、耕作土直下の黒色土や地山上面は人力で精査して、遺構の種類や数を確認するとともに、壁面観察によって遺物包含層の把握にも努めた。

その結果、調査範囲北側では、黒色土上面で古墳の石室の一部と考えられる石列を2カ所で検出した(図47)。このうち、地中レーダー探査の成果と一致したのは1カ所ある。また、黒色土直下にある暗褐色土上面ないし礫層上面で、掘立柱建物跡の柱掘方を思わせる落込みや、堅穴建物跡規

模の方形の落込みを検出した。したがって、対象範囲北側約3,000㎡は、面的な調査の必要があると判断した。

一方、対象範囲の南側には中世以降の自然流路が西から東へ流下していて、洗掘部分に流入した土砂内に、縄文土器(前期末)や古代・中世の土器片が混在していた。この範囲には、明確な遺物包含層はなく、人工的な遺構も確認できなかったため、面的な調査は不要であると結論付けた。

(平林 彰)

松本市教委 1979「松本市新村安塚古墳群緊急発掘報告書」
信濃教育会東筑摩部会 1919「東筑摩郡誌」



図47 古墳の石室(上空より)



図48 安塚古墳群 遺構確認調査範囲全景(西上空から松本市街地方面を望む)

(8) 西浦遺跡

中央新幹線建設工事

所在地及び交通案内：飯田市上郷飯沼2701ほか。
JR 元善光寺駅から、南西約1,200m。

遺跡の立地環境：天竜川右岸、南東に向かい傾斜する低位段丘面、標高約440～450mに立地する。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2023.4.17～2023.11.9	2,205㎡	綿田弘実 大泰可統

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	1 (13)	古墳時代
掘立柱建物跡	1 (11)	古墳～奈良時代
土坑	160 (511)	縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世
溝跡	3 (20)	不明
古墳	(1)	古墳時代
方形周溝墓	2	弥生～古墳時代

() 中央新幹線建設工事R4～R5の合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世
石器	弥生時代、古墳時代
黒曜石剥片	縄文時代
金属製品	不明

調査の概要

本調査は民間調査組織、(株)シ技術コンサルの支援導入を実施して行った。

昨年度の地区設定A～F区を踏襲し、隣接する調査範囲に-2、-3と番号を付けて地区名を追加した。遺跡内の最も西側部分はG区とした。本年度の調査は建物基礎等の撤去が完了したG区、A-2区、C-3区、C-2区の順に行った(図50)。

各区の調査

A-2区は耕作地と宅地造成による削平があっ



図49 遺跡の位置 (1 : 50,000 飯田)



図50 本年度の調査区



図51 A-2区 方形周溝墓2基 (西から)

たが、残された遺構を調査した。代表的なものとして方形周溝墓2基 (SM201・SM202) を検出した(図51)。SM201の周溝脇から弥生時代後期と思われる壺の破片がまとまって出土した。A-2区全体をみても、土器のまとまった出土はここに限られ、SM201は弥生時代後期の可能性がある。

C-2区もA-2区同様の削平が広く及んでいたが、複数の遺構と遺物包含層を調査した。竪穴建物跡 (SB201) と土坑 (SK2141) の埋土から古

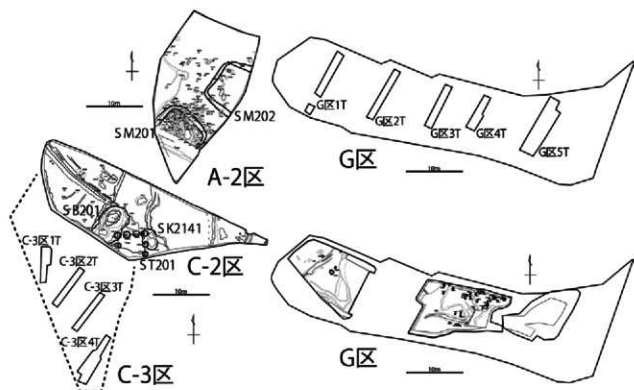


図52 本年度検出遺構・トレンチ掘削位置

墳時代前期の土器が複数個体まとめて出土した(図54)。SB201では床面よりやや上から焼土とまとまった炭を検出している。SB201とSK2141を壊して建つ掘立柱建物跡ST201は、時期を示す遺物の出土はないが、構造の類例から8世紀前後の古墳時代終末～平安時代初めと推定する(図52)。

C-3区はトレンチによる確認調査を行った結果、新戸川の氾濫や、耕作地の造成により削平が著しく、遺構・遺物を検出していない。

G区もC-3区同様、遺物包含層および遺構の大部分が削られていたが、1トレンチと3トレンチで櫓などの柱穴を思わせる小型土坑のまとまりを確認した。3トレンチの小型土坑1基から黒曜石の剥片が出土した。また5トレンチでは斜面上部からの土師器破片が混在した黒色土層の流入を確認した。これらの分布範囲を調べるため、1・3・5トレンチを拡張した(図52G区参照。図中でトレンチはTと略称する)。

(大泰司 統)



図53 C-2区遠景(北東から)



図54 C-2区SK2141土器出土状況

(9) 五郎田遺跡

中央新幹線建設工事

所在地及び交通案内：飯田市座光寺4008-1ほか。

JR 元善光寺駅から、南南西約1km。

遺跡の立地環境：天竜川右岸、南東に向かい傾斜する低位段丘面、標高約430mに立地する。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2023.15～2024.1.25	2,625㎡	綿田弘実 大泰司統

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	20 (68)	弥生時代、古墳時代、古代
掘立柱建物跡	4 (12)	古墳～古代
土坑	220 (716)	弥生時代、古墳時代、古代、不明
溝跡	12 (20)	弥生時代、古代、不明
土坑墓	1	弥生～古墳時代(副葬品有)
杖列(櫓か)	2	不明

() 中央新幹線建設工事R3～R5の合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文時代、弥生時代中期・後期、古墳時代、古代
石器	弥生時代、古墳時代(磨製石鏃、打製石斧、有肩屈形状石器など)
金属製品	銅又は刀(弥生～古墳時代)、鉄製品(古墳時代～古代)
ガラス製品	玉(弥生～古墳時代)

調査の概要

五郎田遺跡は2022年・2023年の発掘調査で弥生～平安時代の集落跡がみつがっている。本年度は昨年度の確認調査で東側②区とした部分の面調査を行った。本調査は西浦遺跡同様、㈱シン技術コンサルに発掘作業支援業務を委託して実施した。確認調査成果通り、遺構の検出面は2面あった。耕作土直下の上面では主に古代の遺構を検出し、間層を挟んで下面では主に弥生時代の遺構を検出した。

ただし、上面が確認できたのは本年度の調査面積の三分の一ほどで、古代の掘立柱建物跡ST202



図55 遺跡の位置 (1 : 50,000 飯田)



図56 本年度の調査位置



図57 掘立柱建物跡 ST202・ST203 (北東から)

とST203が2軒並んでいる周辺である(図57)。東側は水田面造成時の削平や、耕作の深度が深いことにより2面調査とはならなかった。掘立柱建物跡ST202・ST203の西側は土曾川の自然堤防縁で微高地となるため、間層の堆積が浅く、上下面の確認ができなかった。

弥生時代～古墳時代の遺構

この微高地縁に沿って弥生時代後期頃の竪穴建物跡SB201～206が並び、土器埋設炉があるものには中島式土器が使用される(図59・60)。これらの竪穴建物が廃絶された跡に掘り込まれた土坑

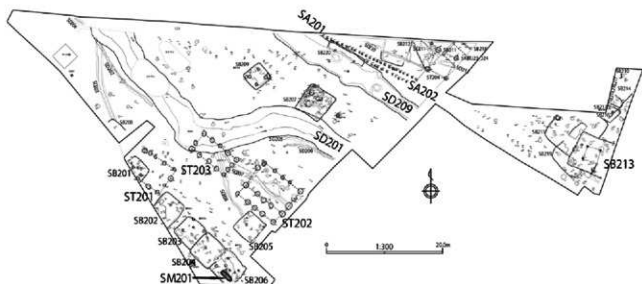


図58 本年度検出遺構



図59 竪穴建物跡 SB205全景 (南東から)



図61 土坑墓SM201作業状況



図60 竪穴建物跡 SB205土器埋設炉

墓 SM201の埋土上部から古墳時代前期と思われる甕の破片が出土した。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての墓と考えられるが、周溝も墳丘も伴わない。坑底部の中央からは、ガラス玉と鉄剣が出土した(図61)。ガラス玉は剣の脇から4点出土し、埋土下半分をふるいにかけて、さらに2

点確認した。ガラス玉は中央に孔がある直径約5mmの白型で明るい青色である。

弥生土器が出土した流路跡と古代の遺構

昨年度の確認調査で検出した堀状の溝跡 SD201は、蛇行する流路跡で、土曾川の自然堤防から北東側は西の沢川の氾濫原と推定している。不明瞭なものも含め、複数の流路跡を検出している。最も大きな流路跡 SD201は調査範囲内を蛇行しながら東西に横切り、長さ約56m、幅約5m、深さ約1.7mである(図62)。埋土から多量の弥生土器が出土した。埋土上半にはラミナが発達した砂層があり、砂層直下、検出面から60cm以上掘り下げたあたり、さらに20cm下、40cm下から、と3段階に分かれて複数個体の土器が出土した(図63・64)。

現段階での観察であるが、土器の特徴から恒川



図62 流路跡 SD201 (北東から)



図63 流路跡 SD201遺物出土状況



図64 流路跡 SD201遺物出土状況

式土器より古い要素を持つ土器から座光寺原式土器にかけての、弥生時代中期後半から後期初頭にかけて三回にわたって、土器の廃棄あるいは設置が行われたものと推察される。今後、土器の接合結果や埋土の珪藻分析から出土状況の意味や環境の変化を検討したい(図65)。

SD201は8世紀には埋没し、上には古代の遺構が分布する。調査区北東に平行して流路跡や



図65 流路跡 SD201珪藻分析サンプル採取状況



図66 流路跡 SD209と SA201・SA202 (東から)



図67 礎石のある竪穴建物 SB213

柱穴列が並ぶ。流路跡 SD209からは、弥生～平安時代の遺物が多量に出土した。また、柱穴列 SA201～202は柵と思われるが時期不明である(図66)。調査範囲の東端で検出した礎石を持つ竪穴建物 SB213は礎石4基のうち1基は廃絶時にずらされたものと思われる(図67)。この建物跡に付属すると想定される床面ビットから9世紀半ば頃の灰軸陶器が出土している。(大森司 統)

(10) 的場遺跡・

阿島北遺跡

中央新幹線建設工事

1 的場遺跡

所在地及び交通案内：飯田市上郷飯沼2658-1ほか JR 元善光寺駅から、南西約1.3km。

遺跡の立地環境：天竜川右岸の東側に向かい傾斜する低位段丘面に立地する。標高およそ450m

発掘期間等

調査期間	調査面積	担当者
2024.2.19～2024.2.22	950㎡	穂田弘実 村井大海 関谷介 大泰司統

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	古代（須恵器）



図68 的場遺跡の位置（1：50,000 飯田）



図69 的場遺跡本年度調査位置

2 阿島北遺跡

所在地及び交通案内：喬木村193-1ほか JR 元善光寺駅から、南東約5.0km。

遺跡の立地環境：天竜川左岸の西側に向かい傾斜する低位段丘面に立地する。標高およそ410m

発掘期間等

調査期間	調査面積	担当者
2024.2.26～2024.3.12	5,100㎡	的場遺跡と同じ

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	弥生時代（中期前葉）
石器	弥生時代（石鏃・磨製石鏃未成品）



図70 阿島北遺跡の位置（1：50,000 飯田）



図71 阿島北遺跡本年度調査位置

調査の概要

両遺跡ともにトレンチ調査による確認調査を実施したところ、遺構の検出はなかった。遺物は近年の盛土内からの出土であり、本調査は不要と判断した。

（大泰司 統）

(11) 五郎田遺跡・ 高屋遺跡

国道153号飯田北改良

1 五郎田遺跡

所在地及び交通案内：飯田市座光寺3993-1ほか
JR 元善光寺駅から南西へ約1km

遺跡の立地環境：天竜川右岸の低位段丘上で、天竜川支流の土曾川左岸の土石流堆積物上に立地
発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2023.4.27～2023.8.31	1,400㎡	長谷川桂子 宮脇正実 鈴木時夫

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	16 (19)	古墳時代～古代
土坑	109 (198)	古墳時代～古代
溝跡・流路跡	2 (2)	古墳時代

() 内は2022年・2023年の合計数



図72 遺跡の位置 (1:50,000)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代
石器	弥生時代 (打製石鏃、磨製石鏃、打製石斧、有肩扇状石器)
金属製品	古墳時代～近世 (鉄製品、銭貨)

調査の概要

国道153号の拡幅に伴い、2022年度から調査を開始した。本年度は調査対象地の中央部にあたる2区と3区の調査を実施した。2区の南西部でみつけた流路跡 (SD2・3) を境に北東側からは遺構・遺物は検出されなかった。3区は現代の



図73 五郎田遺跡3区全景 (南西から)



図74 竪穴建物跡 (SB10) 実掘 (東から)



図75 竪穴建物跡 (SB10) カマド遺物出土状況 (東から)

かく乱が多かったが、破壊が及ばない部分で古墳時代から古代の竪穴建物跡16軒や土坑100基あまりを検出した(図73)。居住域の中心は3・4区と考えられる。

遺構と遺物

3区は遺構が著しく重複している。竪穴建物跡はカマドや床面の一部が検出できただけで、明確な立ち上がりが確認できないものや掘り込みの浅いものが大半である。竪穴建物跡SB10はかろうじてカマドや床面の一部が残存し、北西壁側のカマド内からは潰れた古墳時代後期の土師器甕が出土した(図74・75)。ほかの竪穴建物跡のカマドも北西壁側に位置することが多い。直径1mほどの円形を呈する土坑は掘立柱建物跡の一部と考えられるが、柱痕が確認できたものはごくわずかで、認定は困難であった。遺物がほとんど含まれないため、遺構の時期の詳細は不明だが、竪穴建物跡との重複関係から、古墳時代から古代と考えられる。

2区の流路跡(SD2)からは河道堆積物の砂



図76 流路跡 (SD3) 遺物出土状況 (北西から)

礫に混じって多量の土器片や石器が出土した。比較的大きめで摩耗が少ない弥生時代から古墳時代の土器片や石器は、上流側(西方)に隣接する正泉寺遺跡の遺構に含まれていたものと考えられる。流路跡(SD3)では砂層中から完形に近い古墳時代後期の小型丸底土器や器台、高坏、甕などが出土した(図76)。

周辺の遺跡との関係

本年度の調査で、五郎田遺跡の国道付近に位置する土曾川沿いの微高地上に古墳時代から古代の居住域が広がり、背後に河道が存在することが分

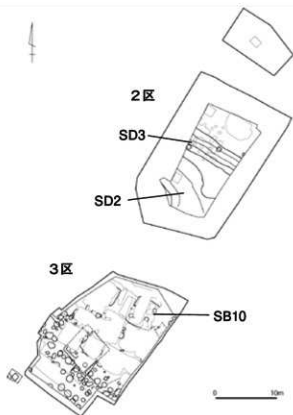


図77 五郎田遺跡 遺構概略図

かった(図77)。国道を挟んで北西側に隣接する正泉寺遺跡では、2020年度と2022年度の確認調査によって、切り合いの激しい弥生時代中期から古代の遺構や多量の遺物が検出されている。次年度以降の正泉寺遺跡の調査で、本遺跡との関係が明らかになるだろう。

2 高屋遺跡

所在地及び交通案内：飯田市上郷別府1714-1ほか JR伊那上郷駅から南東約1km

遺跡の立地環境：天竜川右岸の低位段丘上で、天竜川支流の栗沢川右岸の土石流堆積物上に立地
発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2023.8.2~2023.12.15	2,100㎡	長谷川桂子 宮脇正実 鈴木時夫

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	7 (7)	古墳時代~古代
掘立柱建物跡	3 (3)	古代
土坑	155 (186)	古墳時代~古代
溝跡・流路跡	10 (10)	弥生時代~古代
遺物集中	1 (1)	古墳時代

()内は2022年・2023年の合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	弥生時代、古墳時代(土師器、須恵器) 古代(土師器、須恵器、灰輪陶器)
石器	弥生時代(石鏃、打製石斧)

調査の概要

国道153号飯田バイパス建設に先立ち、1996・1997年度に飯田市教育委員会によって調査が行われている。本年度調査範囲の南方の高屋交差点付近に相当し、弥生時代から中世に至る墓域で、中世末になり居住域に変化することが確認されている。今回の調査対象地は、南西から北東へ緩やかに傾斜する。その地形に沿って、1区2区ともに流路跡を2条検出した。周辺から流路跡に壊された竪穴建物跡や掘立柱建物跡、土坑、溝跡がみつかった。これら遺構の分布域はいずれも調査区外へ広がる(図78・79・83)。

遺構と遺物

竪穴建物跡は西側の国道沿いと北東端付近に認



図78 高屋遺跡 1区全景(北から)



図79 高屋遺跡 2区全景(北から)

められた。掘り込みが浅く、遺構全体が検出できたものはない。調査区南西端でみつかった竪穴建物跡SB4は周溝や主柱穴が確認できた(図80)。出土した遺物は少量だが、古墳時代後期の竪穴建物跡と考えられる。3棟確認した掘立柱建物跡の柱穴は直径約60cmで明確な掘方をもつ。柱痕は検出できなかったが、底面の一部がやや窪んでいることから、柱や上屋の重みの影響が考えられる。また、同一形状の土坑が切り合っているため、建て替えも想定できる。ST2は北北東方向に長軸をもつ2間×4間以上の掘立柱建物跡である(図81)。検出状況から流路跡(SD6)によって削られていると考えられる。なお、3棟のうち1棟はSD6の埋没後に建てられている。弥生時代と考えられる溝跡(SD3)は一部を流路跡(SD1)に削平されている。全容は明らかではないが、形状から方形周溝溝の一部と考えられる。



図80 竪穴建物跡 (SB4) 全景 (北東から)



図82 墨書のある灰軸陶器「平」



図81 掘立柱建物跡 (ST2) (南西から)

SD1は砂礫層の中から摩耗した弥生時代から古墳時代の土器片や石器が出土している。SD6は南から流れ、途中で東方へ向きを変え、埋土上層の黒褐色土や下層の砂礫層から土器の出土が目立った。底部に墨書のある灰軸陶器や刻書のある須恵器が含まれる (図82)。

これまでの調査で見つかった古墳時代から古代の居住域の広がりや、墓域との関係を明らかにしていくことが、今後の課題である。

(長谷川桂子)

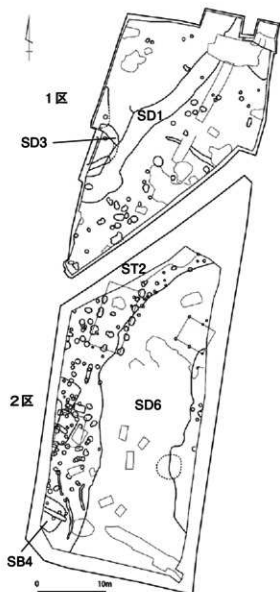


図83 高塚遺跡 遺構概略図

(12) かわらいせき 川原遺跡

防災・安全交付金（道路）事業・
国補ダム建設（治水ダム）事業（合併）

所在地及び交通案内：飯田市下久堅1524-1ほか
中央自動車道飯田ICから東へ約7.0km。

遺跡の立地環境：天竜川左岸低位段丘上。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2023.4.18～2024.1.31	3,500㎡	春日皓介 遠藤忠実子 穂田弘実

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	3（8）	縄文時代、古墳時代
掘立柱建物跡	0（1）	古墳時代
方形周溝墓	4（9）	弥生～古墳時代
土坑	18（75）	縄文時代、時期不明 （屋外埋設土器6基含む）
溝跡	0（4）	縄文時代～中世
配石・集石遺構	24（29）	縄文時代、中世以降

（内は2022年・2023年の合計数）

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・土製品	縄文（土器、ミニチュア土器、土偶、垂飾）、 弥生（土器）、古墳時代（土師器）、中世以降 （陶磁器）
石器・石製品	縄文（石鏃、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石 斧、磨石、石皿、石鏃、石棒、石刀）、弥生（磨 製石鏃未成品）、古墳（白玉）
金属製品	近世（銭貨）

調査の概要

本遺跡は、過去の発掘調査で縄文時代の竪穴建物跡や土坑、弥生時代の竪穴建物跡、縄文時代～中世の土器や石器、陶磁器などが確認されている。2022年度の発掘調査では、上記時代の遺構遺物に加え、古墳時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、弥生～古墳時代の方形周溝墓が見つかった。本年度の調査では、2022年度調査区下層の縄文時代面及び新たに拡張した3,500㎡の調査を行い、弥生時代後期～古墳時代初頭の方形周溝墓が新た



図84 川原遺跡の位置（1：50,000 時文）



図85 川原遺跡と風越山（南東から）

に検出されたほか、縄文時代後期の配石遺構・敷石住居跡や遺物が検出されている。

縄文時代の概要

本遺跡は現天竜川に接する微高地上に縄文時代の遺構が存在する。天竜川の約500m下流にある狭窄部により河道が限定されるため、天竜川的位置は縄文時代と大きく変わらないものと考えられる。

2022・2023年度調査区为天竜川側に接する現堤防下の調査区では、縄文時代中期を中心とする遺構と遺物が検出されている（長野県埋蔵文化財センター2019）。今回の調査区では、縄文時代後期の堀之内1式期の土器が大部分を占める。これらの土器片は、配石遺構の内外から検出されるが、土質により掘り込みの有無が不明瞭なため、確実に遺構に伴うと判断できない場合が多い。配石の他に明らかとなっている遺構は敷石住居跡2件、墓跡1基、屋外埋設土器6基でいずれも縄文時代後期の所産と考えられる。

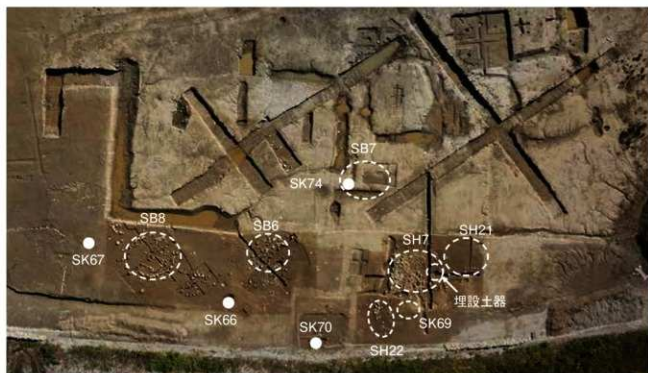


図86 縄文時代の遺構位置図

竪穴建物跡（敷石住居跡）

竪穴建物跡では検出面から床面にかけて石が多く出土し、SB 8（図87）は遺構の周囲を大型の礫が開んでいる。出土する石器や土器の多くは破片であるが、SB 8では床面に甕が1個体横向きに潰れた状態で出土している。SH 7、SB 7、SB 8では石開炉を確認している。

屋外埋設土器

竪穴住居跡など他の遺構に伴わず単独で検出される（図88）。このうち1基は土器の底部中心に拳大の礫が入っている。



図87 SB 8 全景（南から）

墓坑（図89）

主軸を南北方向に持つ長辺1 m、短辺約0.6 mの長方形の土坑である。北側に完形の鉢型土器が逆位置で出土したことから「甕被り葬」と考えられる。



図88 屋外埋設土器（SK74）（南から）



図89 墓坑（SK69）出土 鉢形土器（西から）

配石遺構

配石遺構（SH22）は柱状の河川円礫が弧状に配置されている（図90・91）。

弧の直径は3.4mで、長さ45cm～65cmの13点の柱状礫を外側にやや傾けて配置、内側には30～40cmの扁平な平石9点を置いている。柱状礫の外側には40～50cmの円礫とその間に小型の礫を裏込め状に細かく詰めている。

使われている石材と形状は天竜川河川敷の礫と矛盾しない。明確に伴う遺物がない状況であるが、周辺で出土する土器片は縄文時代中期末から後期前葉に相当する。

壺形土器の埋設土器

弧状列石の南約10mの位置にあるSH7の下面から屋外埋設土器1基（SK75）を検出した（図92・93）。検出面から土器底部までの深さは約30cmで、胴部下半が埋納され、その中に口縁部と胴部上半の破片が入っている。

土器は胴部中央が張る壺形を呈し、その最大径

は36cmを測る。口縁部外面には等間隔に3単位の把手が付く。ハケ調整のみで文線がないなどの差異はみられるが、青森を中心とした北東北地方に分布する「十腰内式土器」の特徴をもった土器で、埋設状態からは土器棺墓を彷彿とさせる。

配石遺構の位置

柱状礫を用いた配石遺構（SH22）の南側には配石遺構（SH21）がある。SH21は30～50cmの礫を南に弧が向く形の配石遺構である。SH21とSH22は南北方向に並びSH22の弧が北を向くことから、弧が反対を向く位置にある。またこの間に壺形土器の埋設土器があるなど、遺構の性格をみる上で位置関係についても考慮する必要がある。

（遠藤恵実子）



図90 配石遺構（SH22）（南から）



図91 配石遺構（SH22）（北から）



図92 屋外埋設土器（SK75）（南から）



図93 SH21からSH22（南から）

百済土器の発見

2022年度の調査で古墳時代の竪穴建物跡4軒、掘立柱建物跡1棟を検出した。そのなかで竪穴建物跡SB4出土の土器が有識者を招いた検討会議により「百済土器」の可能性が高いことがわかった(図94・95)。

「百済土器」は日本の古墳時代にあたる4世紀から660年に滅亡するまで続いた朝鮮半島西南部にあった「百済」の領域で焼かれた土器を指す。

本遺跡で出土した百済土器は、韓国考古学では「鉢」と表記される杯形の土器で日用雑器と考えられる。還元炎焼成の須恵質土器で、体部下端から底部端部にかけてケズリ成形痕があり、平底の底部に「ゲタ痕」を残す(図96・97)。今回の百済土器は、東日本で5例目、飯田市内では3例目の発見となる。

本遺跡で検出されたすべての竪穴建物跡にはカマドが付き、土器の年代観から5世紀中葉～後葉のものであると考えられる。百済は475年に当時の都であった漢城(現ソウル)が陥落し一時的に滅亡する。本遺跡出土の百済土器もこの漢城期のものと考えられ、相伴土器の年代観とも一致する。

「百済土器」が持ち込まれた背景については、想像を逞しくするならば馬をはじめとする渡来文化(ウマ、カマド、横穴式石室など)との関連が想定できる。飯田地域の古墳時代の遺跡では馬具の出土や、他地域には少ない馬の埋葬事例などが複数あり、県内ではいち早く馬の文化を受け入れたといわれている。ヤマト王権は百済と強いつながりを持っていて先進の技術を取り入れており、馬飼育なども先進技術や文化のひとつであった。飯田市内に本件も含め百済土器が3点出土していることから、当時の先進文化を持った人々が百済からヤマト王権を介して飯田地域、そして川原遺跡で生活していたものと想像ができる。そうした当時の人々の交流を考えられる非常に重要な遺物である。

(春日皓介)

参考文献

長野県埋蔵文化財センター 2019『川原遺跡 下川原遺跡』



図94 SB4 (東から)



図95 百済土器の出土状況(南から)



図96 体部下半から底部端部に残るケズリ痕



図97 底部のゲタ痕

Ⅲ 整理作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	整理の内容（作業）	整理中の主な成果
塩崎遺跡群 石川条里遺跡 長谷鶴前遺跡群	長野市	一般国道18号 (坂城更埴バイパス) 改築工事	遺物写真撮影 遺物実測トレース 遺構・遺物図版組修正 原稿執筆 報告書の刊行	塩崎遺跡群は、弥生時代～平安時代の複合集落遺跡である。本年度は、報告書掲載予定の24,514点から抽出した3,000点の遺物の写真撮影を行った。石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群では、これまでの成果をまとめた報告書を刊行した。弥生中期後半から平安時代までの水田跡、中世の居館跡とそれに伴う道路跡、近世の用水跡等、遺跡の変遷が明らかとなった。また、近代の在地窯の工房跡から出土した陶器製品・窯道具等を分類し、報告書に掲載した。
ふじ塚遺跡	下諏訪町	国道20号 (下諏訪バイパス) 改築工事	遺物注記・分類・計測・ 写真撮影・文字判読・ 金属製品の応急的保存処理	ふじ塚遺跡は、中世の礫石経塚と、その上に構築された中世～近世の塚から出土した礫石経63,340点の整理作業を実施した。礫石経の書写割合を調べたところ、文字や文字の部首および墨跡が確認されたものが72%を占めることが判明した。文字が判読できた27,480点は、99%が「一石に一字書写された礫石経で、礫石経塚が「一字一石経塚」と判断される。
沢尻東原遺跡	辰野町	北沢東工場遺地の 開発事業	報告書の原稿作成 編集、校正 報告書の刊行 移管準備・移管	沢尻東原遺跡は、縄文時代中期の集落のはほぼ全体を調査した。本年度は調査成果をまとめた報告書を刊行し、出土遺物と記録資料を辰野町に移管した。 竪穴建物跡は50軒を数え、集落変遷は7期におよぶ。集落は中央に広場をもち、その外側に居住域が広がる。居住域は北群と南群に大きく2分され、居住域と広場の境には墓域も広がるなど、集落の構造を検討する上で、貴重な事例となった。



図98 沢尻東原遺跡 原稿の校正作業



図99 沢尻東原遺跡 遺物の収納作業

(1) 塩崎遺跡群・石川条里遺跡・
長谷鶴前遺跡群

国道18号(坂城更埴バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群は、長野市南部の篠ノ井塩崎地区に位置する。

3遺跡の発掘調査は2013～2021年度に実施し、本格整理作業は2016年度から継続している。石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群については、本年度の発掘調査報告書の刊行をもって、整理作業は終了した。

整理作業の概要

塩崎遺跡群では昨年度に引き続き、報告書刊行に向けての遺構トレース図の編集作業、遺物実測・トレース作業を行った。また、委託による遺物写真撮影(図100)と科学分析を行った。科学分析は弥生時代中期中葉以前の出土資料を対象として、土器の種実圧痕同定、木棺墓等出土土類の石材同定、円形貯蔵穴など出土の炭化材の年代測定、木棺墓・円形貯蔵穴検出の赤色顔料分析を行った。赤色顔料分析では、木棺墓において、ベンガラだけでなく水銀朱も使用していたことが明らかとなった。

石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群では、年度末の報告書刊行に向けて、遺構・遺物図版・写真図版の編集や原稿執筆作業を行った。また、長谷鶴前遺跡群では、キセル等の金属製品について、応急



図100 塩崎遺跡群 再葬墓出土土器の集合写真撮影

的保存処理を行った。

整理作業の成果をふまえて、以下に3遺跡の概要を記す。

A. 塩崎遺跡群

本遺跡は、長野盆地南端の千曲川左岸自然堤防上に立地する弥生時代～平安時代の複合集落遺跡であり、検出遺構・出土遺物ともに膨大である(下表参照)。

遺構の重複が激しいため、出土土器の整理を通じて、各遺構の時期を検討した。図101に堅穴建物跡の時期別検出数を示した。本遺跡では、弥生時代中期後半から集落の形成が始まり、後期になると堅穴建物跡の数は飛躍的に増加し、古墳時代中期に一旦減少する。古墳時代末から奈良時代にかけて再び増加に転じ、平安時代前期に千曲川の洪水砂層(仁和の洪水)で被覆されるまで、集落が継続したものと考えられる。

塩崎遺跡群 主な遺構

遺構の時期	内容・数
弥生時代前期～中期初葉	円形貯蔵穴24、土器棺再葬墓14
弥生時代中期中葉	木棺墓64
弥生時代中期後半	堅穴建物跡36、井戸跡6、長方形土坑44、土坑墓1
弥生時代後期	堅穴建物跡166、掘立柱建物跡2、井戸跡19、周溝墓5、木棺墓2、土坑墓6、溝跡5
古墳時代前期	堅穴建物跡42、井戸跡13、土坑墓2、溝跡1
古墳時代中期	堅穴建物跡5、古墳2
古墳時代末～奈良時代	堅穴建物跡93、掘立柱建物跡6、井戸跡13、溝跡15
平安時代	堅穴建物跡51、井戸跡9、溝跡10
中世以降	井戸跡26、土坑墓7
時期不明	堅穴建物跡22、井戸跡10
合計	堅穴建物跡415、円形貯蔵穴24、長方形土坑44、井戸跡94、墓跡109、その他土坑205、溝跡46

塩崎遺跡群 主な遺物(数字は報告書掲載予定数)

遺物の種類	点数	時期・内容
土器	5274	弥生時代前期末～平安時代
土製品	1902	土偶、土偶形容器、紡錘車
石器	15619	剥片石器、礫石器
石製品	1056	分銅、紡錘車、石臼、玉類
金属製品	626	鉄剣、鉄鏃、鉄斧、刀子、銅刀

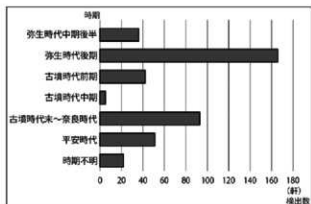


図101 塩崎遺跡群 竪穴建物跡の時期別検出数

イ. 石川条里遺跡

本遺跡は、塩崎遺跡群が立地する自然堤防背後の後背湿地に広がる。広範囲で確認された弥生時代中期後半の水田跡に始まり、洪水砂に被覆された平安時代前期の条里型水田跡など、近世に至る

石川条里遺跡 主な遺構

遺構の時期	内容・数
弥生時代	水田跡(水田2・畦畔23)、溝跡8
古墳時代	水田跡(畦畔26)、土坑15、溝跡3
古代	水田跡(水田1・畦畔53)、土坑8、溝跡29
中世以降	掘立柱建物跡6、欄列5、墓跡5、土坑454、溝跡146
合計	掘立柱建物跡6、欄列5、墓跡5、水田跡(水田3・畦畔103)、土坑477、溝跡186

石川条里遺跡 主な遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	土器・陶器・磁器(弥生時代～近世)
土製品	土錘、ミニチュア土器、土製円盤
石器・石製品	玉類、打製刃器、磨製石斧、砥石、台石、石臼、石錘
金属製品	鍬形兜前立、鉄鍬、釘、刀子、銭貨
木製品	鍬、杭他(弥生時代・古墳時代) 田下駄、建築部材(平安時代)



図102 石川条里遺跡 平安時代の水田跡(11c区)

重層的な水田跡が検出された(図102)。畦畔の芯材として、田下駄・建築部材などの多量の木製品が出土した。また、中世前期の居住遺構、中世後期の館跡が検出され、堀跡からは鍍金を施した銅製の鍬形兜前立が出土した。更に、近世の塩崎用水等の用水跡が多数検出され、遺跡の変遷が明らかとなった。

ウ. 長谷鶴前遺跡群

本遺跡は、石川条里遺跡西側に接する山麓の崖錐地形上に立地する。石川条里遺跡から続く平安時代前期の水田跡、中世後期の館跡、中世～近世の道路跡、近代では地元窯として文献に残る長谷焼の陶器製作工房跡などの多様な遺構が検出された(図103)。(風間真起子)

長谷鶴前遺跡群 主な遺構

遺構の時期	内容・数
古代	水田跡(水田1・畦畔16)
中世	水田跡(畦畔2)、道路跡1、堀跡1、溝跡3、集石遺構1
中世～近世末	掘立柱建物跡1、道路跡1、堀跡1、土坑282、溝跡(道路側等)37、集石遺構1
近代	陶器製作工房跡1、土坑107、溝跡11
合計	掘立柱建物跡1、陶器製作工房跡1、水田跡(水田1・畦畔18)、道路跡2、堀跡2、溝跡51、土坑389、集石遺構2

長谷鶴前遺跡群 主な遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	土器(中世)、陶器・磁器(近代)
窯関連遺物	窯道具、ロクロ台石(近代)
金属製品	キセル、釘、銭貨(近世～近代)
木製品	田下駄、建築部材他(平安時代) 三方、曲物、籠状製品(中世)



図103 長谷鶴前遺跡群出土陶器(長谷焼)

(2) ふじ塚遺跡

一般国道20号(下諏訪岡谷バイパス)改築工事

ふじ塚遺跡は、諏訪湖の北側(湖北地域)に鎮座する諏訪大社下社春宮背後に所在する。和田峠に源を発し諏訪湖に流入する砥川に形成された河岸段丘上に立地する。

本遺跡では、発掘調査を2020・2021年に実施し、2020年の調査で中近世の塚と中世の礫石経塚が発見された。2021年からは出土した6万点に及ぶ礫石経を中心とした本格整理作業を実施し、本年度で3年目となる。

発掘調査で確認した遺構は以下のとおり。

遺構の種類	数	時期	備考
土坑	10	縄文時代・不明	
溝跡	5	不明	
塚	1	中世～近世末	調査時は両遺構を1基と認識
礫石経塚		中世	

整理作業の概要

本格整理作業では、礫石経の注記・計測・分類(文字判読)・簡易的な写真撮影・遺物台帳作成と入力を行い、これら作業は本年度で終了した(図104)。本年度に礫石経一覧表作成に着手し、今後は礫石経に書写された経典名や願主名の把握、さらには礫石経塚やその上に構築された塚との関係を捉える検討作業が必要である。

また、発掘時に礫石経塚の調査指導を受けた立正大学文学部時枝務教授(専門:宗教考古学)に2021年度から継続して文字の判読や礫石経・礫石経塚の評価について指導を受けた(図105)。

時枝教授による指導成果

本年度は4回、整理指導を受けた。3年間の指導で文字を判読していただいた礫石経は11,000点に及ぶ。

判読資料の中には、「泣」と言う文字に「涙」を絵として表現したもの(図106)や、「仙」の偏上位を丸く書いた例、「怠」の「ム」の部分塗り潰した例など、経文の書写という作業では不必要とも思われる表現が書かれた礫石経が確認さ

れた。こうした「遊んでいる文字が書かれた礫石経」の存在は、荘厳な雰囲気の中で礫石経の書写が行われたのではなく、和やかな雰囲気の中で書写や経塚の構築が行われたことを示す貴重な資料であるとご教示いただいた。

信仰の拠点としてのふじ塚遺跡

ふじ塚遺跡では、16世紀に礫石経塚が構築さ



図104 礫石経の整理風景



図105 時枝教授による指導風景



図106 「泣」と書写された礫石経と書写文字図

れ、その上に土石混合で塚が構築されるという礫石経塚から塚への変遷が捉えられた(河西2021)。

出土した礫石経約6万点は、①礫石経塚、②塚、③塚の周囲から出土しており、本年度までの整理作業で、各地点の出土数を把握することができた(図107)。

	出土地点	時期	出土数
①	礫石経塚	中世(16世紀)	61,895点
②	塚	中世(16世紀)～近世(19世紀)	1,415点
③	塚の周囲	中世(16世紀)～近世(19世紀)	30点
合計			63,340点

図107 出土地点別の礫石経数(2023.12月時点)

礫石経は、大半が礫石経塚(図107①)に帰属する。礫石経塚は、経塚の上部に和鏡とかわらけを埋納して仏教的な儀礼が行われたと理解されるが(河西2021)、塚を構築する過程でも礫石経は埋納されており(図107②)、信仰の対象である塚に仏教的な要素が内在することがわかる。

ふじ塚遺跡では、16世紀の礫石経塚造営を契機として、この地が信仰の拠点になっていたと理解できる。出土地点によって礫石経に書写された文字や書写割合に違いがあるか否かは、今後の整理作業で検討していきたい。

礫石経の組成

本年度の整理成果として、礫石経の出土総点数と礫石経の書写割合、書写方法の割合が把握できたことがあげられる。

礫石経6万点の内、文字判読可能と部首判読可能、墨跡が確認されたものは72%を占め、墨跡がないものが28%であった(図108)。礫石経の調査では、礫石経の20～30%に経文などが書写されている事例が多いとの時枝教授からの指摘からすると、ふじ塚遺跡は書写割合が高いことを数値で示すことができ、大変興味深い。

さらに、文字が判読できた27,480点の種類をみると、河原石の一石に一字書写された礫石経が99%を占めることから、数値上からもふじ塚遺跡の礫石経塚は「一字一石経塚」としてよいだろう(図109)。

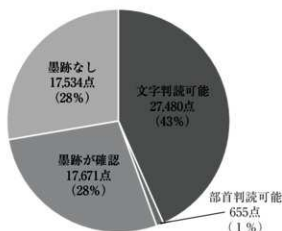


図108 礫石経の書写割合(2023.12月時点)

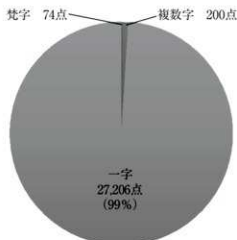


図109 礫石経の種類(2023.12月時点)

今後の課題と展望

県内において本格的な礫石経塚の調査例は少なく、6万点に及ぶ礫石経全点を対象とした整理作業は、管見の範囲では類例がない。今後は、今までの整理で作成した礫石経の基礎データをもとに書写された経典名や願主の検討・分析を行い礫石経の実像を解明するとともに、礫石経塚と塚との関連性や両者における礫石経の埋納状況の違い、この地に仏教的な礫石経塚と信仰的な塚が重なる遺構が構築された歴史的位置づけを報告書刊行の中で明らかにしたい。

そして、遺構としての「礫石経塚」「塚」と、遺物としての「礫石経」の新知見が得られるものと考えられる。(河西克造)

参考文献

河西克造 2021 「下諏訪町ふじ塚遺跡の礫石経塚 その構造と特徴」『長野県埋蔵文化財センター年報38』

(3) 沢尻東原遺跡

辰野町北沢東工場適地の開発に伴う
埋蔵文化財発掘調査

本遺跡は2019年度に発掘作業を行った。本格整理作業は2020年度から開始し、本年度は報告書の原因作成及び、遺構・遺物図版、写真図版などの編集を行い、発掘調査報告書を刊行した。同時に調査資料の移管準備を進め資料を辰野町に移管した。

遺跡の概要

本遺跡は天竜川右岸の河岸段丘上に位置する。調査対象面積は1.8haと広大で集落のほぼ全域を調査した。辰野町教育委員会による確認調査の成果と合わせ、本集落は南北に延びる河岸段丘面の中でも最北端の縁辺部に占地していたことが判明した。縄文時代の遺構・遺物は、中期以外は検出されず、遺構同士の切り合い関係が少ないため、縄文時代中期集落のありかたを考える上で、非常に貴重な資料となった。

集落変遷の検討

集落の消長：本集落の変遷について、報告書では9期に区分した。うち第1・2期は前期末～中期初頭の土器片が出土することから、当地における集落進出の前段階とした。辰野町では、本遺跡の周辺で当該期の三谷遺跡・日除遺跡ほかを確認されており、こうした遺跡の集団が本遺跡に移住した可能性がある。

集落は第3期～第9期までの7段階に変遷する。成立期である第3期（猪沢式～新道式一部段階）は堅穴建物跡4軒を確認した（図110a）。

集落は以後途絶えることなく継続し、第8期（曾利Ⅰ式）で15軒と最盛期を迎え（図110c）、直後の第9期（曾利Ⅱ式）で2軒となって（図110d）、以後遺構の検出はない。

こうした唐突ともいえる集落の終焉には、集落ごと移転した可能性を指摘したい。本遺跡の北側、天竜川の対岸にある樋口内城遺跡では本集落における終末期の第9期以降も中期後葉の堅穴建

物跡が多く確認できる。当該期の堅穴建物跡2軒（SB1・41）は集落の北端に位置し、天竜川対岸の樋口内城遺跡を目視できる場所にある。具体的な証明は困難であるが、近接地における集団移転を検討しうる一事例となろう。

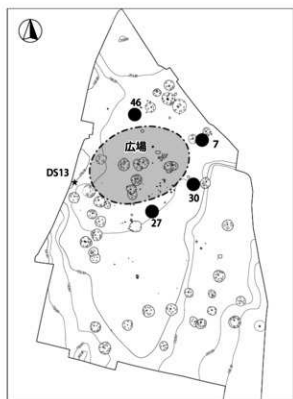
集落の双分性：本集落は東西120m、南北180m程の範囲に形成される。中央には広場と推測される無遺構地帯があり、その外周部に居住域が広がることが判明した。遺構の分布状況から居住域は大きく北群と南群に分かれ、共に居住域と広場の境に墓域が存在する。本集落の開始期（第3期）は北群だけであるが、この段階で既に北群の範囲内だけで無遺構地帯（広場）を囲むように堅穴建物が分布する（図110a）。以後第4期以降は中央の広場を挟み南群が形成され、第8期まで集落内で2つの集団が維持される（図110b・c）。しかし堅穴建物や屋外埋設土器などの遺構数や出土遺物の質、量について両群を比較すると、全期間を通じて常に北群に優位性があったことが確認できた。

墓制：本集落では屋外埋設土器のほかにも墓の可能性のある長軸80cm以上の大形土坑（SK）を15基検出している。大形土坑の分布数は北群14基、南群1基と北群が圧倒的に多いが、南群にも存在する点は墓域の双分性を検討する上で注目したい。屋外埋設土器と大形土坑は居住域と広場の間を中心に検出されており、集落内で墓域が存在したと考えられる。

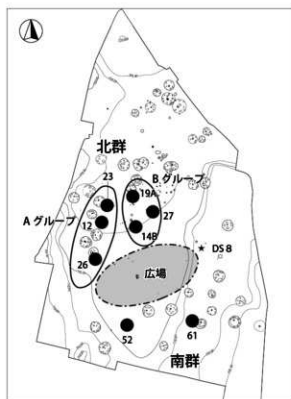
墓域のほか、本集落では居住域で略完形の土器が大量に出土する堅穴建物跡が確認できた。なかでも北群に属するSB10・13では、略完形の土器が大量に出土しただけでなく意図的な土器の切断例が存在し、廃屋墓の可能性も指摘されている（高橋2007、寺内2021）。本集落における墓制は、墓域だけでなく廃屋墓の存在も考慮して複合的に検討することが重要である。（廣田和穂）

参考文献

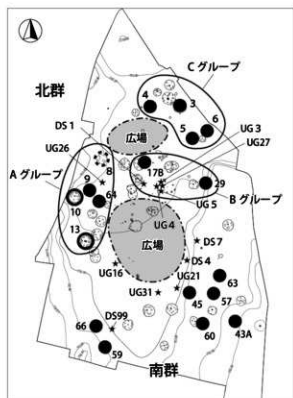
- 高橋龍三郎 2007「関東地方中期の廃屋墓」『縄文時代の考古学』9同成社
- 寺内隆夫 2021「縄文時代中期中葉における土器と堅穴建物跡の二次利用について」『長野県埋蔵文化財センター年報』37



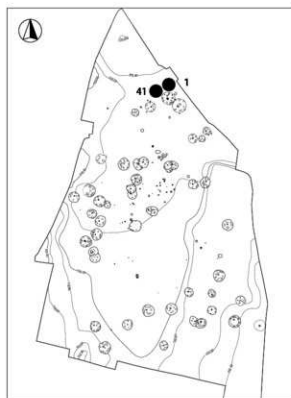
a 第3期集落



b 第4期集落



c 第8期集落



d 第9期集落

● 竪穴建物跡 ○ 広場 ★ 屋外埋設土器 ○ 廃屋基

0 (1:2000) 40m

図110 沢尻東原遺跡における集落変遷

Ⅳ 普及公開活動の概要

分類	名称	場所等	期日	参加者数(名)
1 施設公開	夏休み考古学チャレンジ教室	当センター	8/4・8/5	235
2	現地説明会・ 現地公開	五郎田遺跡	6/12～16	50
		川原遺跡	7/4～7	102
		長沼城跡	10/7	103
		五郎田遺跡	10/21	53
		南栗遺跡	10/28	89
	遺跡見学会	ひさかた村塾地区巡り	川原遺跡	9/2
	ひさかたウォーキング	川原遺跡	11/5	38
講座	遺跡発掘Q & A	篠ノ井老人福祉センター	5/18	20
	長野盆地の開拓者(弥生時代)	篠ノ井老人福祉センター	6/5	24
	県立歴史館古墳展 見学	長野県立歴史館	7/20	26
	縄文ムラのくらし(縄文時代)	篠ノ井老人福祉センター	8/17	20
	縄文土器のヒミツ(縄文時代)	篠ノ井老人福祉センター	9/21	20
	篠ノ井町歩き	篠ノ井周辺	10/19	23
	最古の道具、石器(旧石器時代)	篠ノ井老人福祉センター	11/16	23
	古代の鉄作り(平安時代)	篠ノ井老人福祉センター	12/21	25
3 出前授業	近年の長野県における遺跡発掘調査から	信州大学教育学部	5/23	35
	・縄文から古墳時代のくらし ・土器や道具などの移り変わり	長野市立安茂里小学校	9/5	35
職場体験	第一学院高等学校	埋文センター	6/13・2/6	3
	長野市立松代中学校	埋文センター	7/10	1
	長野市立篠ノ井東中学校	埋文センター	7/12・13	2
	長野市立篠ノ井西中学校	埋文センター	7/20・7/21	1
	長野県立長野高校	埋文センター	8/17	1
	長野工業高等専門学校	埋文センター・長沼城跡	9/11～15	1
	長野市立東北中学校	長沼城跡	10/11・12	5
	長野俊英高等学校	埋文センター	11/28	2
4 連報展・展示会	掘るしん2023	長野県立歴史館	3/18～5/28	2,276
	県庁ロビー展	長野県庁	11/6～10	—
	掘るしんinしもすわ 講演会	下諏訪町総合文化センター	11/12	91
	掘るしん2024 展示会	キッセイ文化ホール	2/17～3/17	1,008
	掘るしん2024 遺跡報告会・講演会		2/23	101
5 施設利用		展示室		362
		図書室		34
		総計		4,821
		国補対象計		1,119

◎上記の内、太字の普及公開活動は、文化庁の国補事業「地域の特徴ある埋蔵文化財補助事業」を活用して実施した。

○展示室・図書室の利用人数は2024年3月10日現在の数字。

(1) 施設公開

○第15回夏休み考古学チャレンジ教室の開催

実施日：8月4日（金）午後1時～4時

8月5日（土）午前9時～午後3時

目的：夏休みの期間中に、埋蔵文化財センターの施設を公開し、展示室等の見学や当センターの業務を体験していただくことで、当センターの社会的役割及び埋蔵文化財に対する理解を深める。

内容：

- ・施設公開…展示室、図書室及び遺物の整理作業を公開、埋蔵文化財や考古学の質問に回答
- ・体験…本物の遺物及び土器パズルを用いた遺物接合作業の体験、実物の土器を用いた拓本体験及び「縄文ワークショップ」を実施した。その他、埋蔵文化財に関連する体験を自宅で行う教材として「まが玉作成キット」を配布した。

来場者数：235名（4日97名、5日138名）

当センターの業務理解の促進や埋蔵文化財に対する理解の深化という施設公開の趣旨に鑑み内容を検討し、コロナ禍後4年ぶりに体験ブースを復活しての開催となった。

地元篠ノ井地区を中心に長野市周辺の小学生以下の子供とその家族が多数来場され、センター業務や埋蔵文化財行政に対する理解、考古学に対する普及啓発に資するイベントとなっている。また、毎年継続して開催してきたところ、夏休みの恒例イベントとして定着しており、地元住民と職員との交流の場にもなっている。

体験ブースは、坂城町上五明条里水田址出土の土器及び土器パズルを用いた遺物の接合作業体験、辰野町沢尻東原遺跡の土器を用いた土器の拓本作業体験を実施した。

また、文化振興事業団活動支援策ワーキンググループと共同で「JOMON ファッションワークショップ」を実施した。講師に北澤麻希氏を招き、貫頭衣に縄文時代をモチーフとした模様をステンシルやシルクスクリーンで描き、オリジナルの「縄文服」を作成した。このような趣向の異なるワークショップを合わせて開催したことは、来場者から好評であった。また、事業団職員間の交流

という面でも効果があった。

このほかに展示室及び図書室の見学、下諏訪町ふじ塚遺跡出土の礫石経を取り扱った整理作業の見学、来場者の考古学や埋蔵文化財についての質問に当センター職員が回答する質疑応答ブースを設けた。

また、来場の記念品として長野市塩崎遺跡群で出土した土器をデザインしたトートバッグと、「まが玉作成キット」を配布した。

来場者へのアンケートでは、「毎年子供たちと楽しく参加させていただいています。手に触れていろんなことが体験できて、とてもいい思い出になっています。」「弥生時代の土器を拓本して、歴史を感じました。」「職員の方に考古学にまつわる色々なことを教えてもらえて、とても有意義でした。」などの感想が寄せられた。

（村井大海）



図111 土器パズルを用いた接合作業体験の様子



図112 「JOMON ファッションワークショップ」の様子

(2) 現地説明会等

現地説明会・現地公開は4遺跡（5回）で実施した。見学者は現地説明会で245名、現地公開で152名の計397名である。

①現地説明会

○長沼城跡（長野市）

開催日：10月7日（土）

見学者：103名

長沼城跡及び本年度の調査概要や遺構、発掘調査から明らかとなった長沼城跡の構造について説明し、出土遺物の展示を行った。地元住民を中心に多数の方が来場し、県外からの参加者もあった。職員の説明を熱心に聞く方や、展示遺物について詳細に質問する方がいて、参加者の関心の高さがうかがえた。

○五郎田遺跡（飯田市）

開催日：10月21日（土）

見学者：53名

遺跡の概要と本年度の調査内容について説明した。また写真パネルや出土遺物の展示を行った。参加者は地元の方が半数以上を占め、遺跡や発掘調査に対する関心の高さがうかがえた。説明後の自由見学時間に、職員への質問や再度現場を熱心に見学するなど、より詳細に知ろうとする参加者の姿が印象的だった。

○南栗遺跡（松本市）

開催日：10月28日（土） 見学者：89名

発掘調査現場では古代の竪穴建物跡、中世の火葬施設など遺構の説明を中心にを行い、現場事務所内では出土遺物の展示を行った。参加者からは「昔からこの地に人々が生活していたことを初めて知った」という声があり、古代の松本の姿を知っていただく良い機会となった。

②現地公開

○五郎田遺跡（飯田市）

開催日：6月12日（月）～16日（金）

見学者：計50名

発掘調査現場を公開し、古墳時代から古代に属する竪穴建物跡や土坑などの遺構や発掘作業の説明、出土遺物の展示を行った。参加者は地元の方が多く、発掘調査の様子や遺構・遺物を熱心に見学していた。また今後も地元向けに遺跡の公開を継続してほしいという要望も寄せられた。

○川原遺跡（飯田市）

開催日：7月4日（火）～7日（金）

見学者：計102名

地元住民の方々を中心に発掘調査現場を公開した。遺物展示の目玉である百濟土器への参加者の関心が非常に高く、出土した背景など多くの質問が寄せられた。また地元の下久堅小学校の児童も見学に訪れ、興味津々な様子で見学していた。

（丸山晃平）



図113 南栗遺跡現地説明会の様子



図114 川原遺跡現地公開の様子

(3) 速報展・講演会等

①速報展

「掘るしん2023」

開催日：2023年3月18日（土）～5月28日（日）

会場：長野県立歴史館小展示室

見学者：2,276人

内容：2022年度に発掘調査・整理作業を実施した8遺跡について、出土品と写真パネルを展示した。長野市塩崎遺跡群では弥生時代前期の搬入土器（遠賀川系壺）、坂城町上五明条里水田址では平安時代の製鉄炉関係資料、松本市真光寺遺跡では古墳副葬品の須恵器、飯田市五郎田遺跡では古墳時代の直弧文施文高坏など、地域や時代を代表する新発見資料を紹介した。

「掘るしん2024」展示会・講演会

会場であるキッセイ文化ホール（長野県松本文化会館）との共催事業である。2023年度の調査・整理成果を展示した「展示会」と「講演会・報告会」を催した。それぞれの詳細は以下のとおりである。

○展示会

開催日：2024年2月17日（土）～3月17日（日）

会場：キッセイ文化ホール

2階 ギャラリー（旧レストラン）

来場者：1,008人

11遺跡を対象に、出土品と写真パネルを展示した。出土品の展示遺跡は長野市長沼城跡、松本市真光寺遺跡、同市南栗遺跡、飯田市川原遺跡の4遺跡である。



図115 掘るしん2024 展示会

様々な文化イベントが開催される施設内での展示会のため、幅広い年齢層を対象に、分かりやすさや親しみやすさを心掛けた。展示以外にも「考古ワークショップ」として、南栗遺跡出土土器に触れるハンズオン展示、土器立体パズル、長沼城跡出土の天目茶碗などを模したペーパークラフト、ぬり絵コーナーを設けた。また会期中は毎日職員が展示解説を行い、発掘調査の動画も上映した。

会期中にはコンサート鑑賞に訪れた人や子供向けイベント参加の家族連れが、その合間に立ち寄られることが多く見受けられた。

○講演会・報告会

開催日：2024年2月23日（金・祝）

会場：キッセイ文化ホール 国際会議室

来場者：101人

講演：「信州の旧石器時代を掘る」

講師 大竹憲昭

報告：長野市長沼城跡	報告者	伊藤 愛
松本市真光寺遺跡	報告者	酒井美姫
松本市南栗遺跡	報告者	丸山晃平
飯田市川原遺跡	報告者	遠藤恵実子

講演会は講師が長きにわたり携わった長野県の旧石器時代遺跡での発掘調査を振り返り、成果から得られた多くの知見から、信州の旧石器時代像を示した。調査報告は、2023年度に注目を浴びた4遺跡の調査担当者が、遺跡や出土品の特徴、調査の成果や課題について報告した。終了後、展示会場で展示解説と報告会来場者の質問に答えた。

（村井大海）



図116 掘るしん2024 講演会

②地域展

「掘るしんinしもすわ

～遺跡から見る中世の折り～

下諏訪町では、町制施行130周年企画展「しもすわ鎌倉物語」を諏訪湖博物館・赤彦記念館で9月9日（土）～11月19日（日）を会期として開催した。埋文センターからは、町内のふじ塚遺跡で発見された礫石経塚出土遺物と写真パネルを展示した（図117）。埋文センターでは、この企画展会期中に、関連事業として「掘るしんinしもすわ」と題した講演会を開催した（図118・119）。

開催日：11月12日（日）

会場：下諏訪町総合文化センター

参加者：91名

演題・報告者：

基調報告①

「発掘された下諏訪の中世」

諏訪湖博物館・赤彦記念館 宮坂 清 館長

基調報告②

「下諏訪町ふじ塚遺跡の調査成果」

埋文センター 河西克造 調査指導員

講演

「礫石経の語り」

立正大学文学部 時枝 務 教授

ディスカッション

パネラー：時枝務教授、宮坂清館長、河西克造
調査指導員

司 会：川崎保調査部長

内容：

宮坂館長は、中世の寺院と集石墓が発見された「殿村・東照寺址遺跡」の発掘成果を報告した。

寺院では、調理用具や茶器が出土したことから、宗教行事だけでなく、生活を営んでいることがわかったことと、集石墓では、「妙法蓮華経」「南無阿彌陀仏」などと经文が書写された礫石経（多字一石経）が発見されたことを報告した。礫石経には「供養」と書写されたものもあり、死者を弔う願いが込められていたことがわかると指摘した。さらに、諏訪大社下社には中世の文献史料がなく、昭和30年代に考古学者の藤森栄一氏が、



図117 ふじ塚遺跡の資料展示風景

下社の中世を語るには考古資料によるしかないと指摘したことにも触れた。2023年は藤森栄一氏没後50年の節目の年で、現在は藤森氏の研究時点より発掘資料が増え、考古資料から「中世の世界」が垣間見られるようになった現状を報告した。

河西は、下諏訪町ふじ塚遺跡の発掘調査と整理作業の方法と成果について報告した。発掘当初、「ふじ塚古墳」として認識されていた埴井が、中近世の塚と判明し、塚の下層から6万点に及ぶ礫石経（「礫石経塚」）が発見されたこと、全国的にも稀有な6万点に及ぶ礫石経の整理作業では、書文字や文字の書写割合が明らかになったことなどを報告した。発掘によって、礫石経という文字資料を対象とした考古学研究から、文献史料がなく不明な点が多い諏訪盆地における中世後半の民衆・宗教史に言及できる可能性があることを指摘した。

時枝教授は、日本における経塚研究の現状と礫石経塚・礫石経の出現と変遷について講演した。

1007年（寛弘4年）、日本で初めて造営された経塚は、藤原道長が経典を後世まで残すことを目的に造営した金峯山経塚（奈良県）で、古代では「経典保存」を目的に経塚が造営された。時期を経るごとに経塚は、経筒を岩の隙間に差し込む簡易な方法で埋納する施設に変化したと指摘した。

「礫石経」は、12世紀に出現し、ふじ塚遺跡のような礫石経塚は現世利益や極楽往生祈願など、本堂の下に埋納した礫石経は地鎮、殿村・東照寺址遺跡は墓地に伴う礫石経は死者供養などといっ

た多様な目的で使われていることを示した。また、礫石経には「多字一石経」と「一字一石経」の2種類があり、「多字一石経」は経典といえるが、経文の一字もしくは数文字書写された「一字一石経」は経典の役割を成さず、文字に呪力があるとしか考えられなかった。中世の経塚は、古代の経塚とは造営目的が異なる施設となった反面、庶民にとって「経塚」と「写経」が身近な存在となり、「民間信仰」の要素を多分に具備した施設と指摘した。

最後に、ふじ塚遺跡の調査について言及された。

墳丘の発掘調査で、「塚」と「礫石経塚」の2者が捉えられた事例として、物見処経塚（東京都）を紹介し、「塚」を造る意識と「礫石経塚」を造る意識とに分かれており、ふじ塚遺跡を考える重要な視点と指摘した。

ふじ塚遺跡では、最初に地鎮・鎮壇の儀式が行われ、礫石経塚が造営された可能性を示唆した。

礫石経については、間違っただり誤字・脱字が激しい文字が多くあり、文字に縁のない人が写経に参加したと考えられると指摘した。さらに、文字が書写された割合については、文字（墨跡を含む）があるものが7割、文字がないものが3割を占めるとの河西の報告を受け、両者を供養すれば一緒になるという信仰があったことを示すとした。

ディスカッションでは、仏教考古学の捉え方や、中世の民衆と宗教との関わりなどについて意

見が交わされたが、ここで時枝教授から本講演会のまとめとなるコメントがあった。

中世の民衆が書写する経典は、宗教的な指導者の宗派で決まるが、礫石経には、約9割に法華経が書写されていること。ふじ塚遺跡でも大半が法華経が書写されており、書写文字と出土遺物から複数の要素が複合されて「民間宗教」として存在していた可能性を示唆した。ふじ塚遺跡では、宗教的な指導者との関わり方を明らかにすることが今後の課題と指摘した。

日本の経塚研究が遅れている状況のなかで、ふじ塚遺跡は初めて行われた大規模な礫石経塚の調査であり、考古学の調査方法を確立して、それを実践した点で評価できるとの言句で締められた。

当日は、報告者・参加者共々、一時「仏教考古学」に浸った貴重な機会であった。

(河西克造)



図118 時枝教授の講演風景



図119 ディスカッションの風景

(4) 展示室・県庁ロビー展示等

①展示室（通年公開）

当センターでは、発掘作業・整理作業を実施している遺跡の中で速報性のある出土品や普及公開資料等を展示室で一般公開している。本年度は長野市長沼城跡出土の華南三彩や鳥形水滴、同市塩崎遺跡群出土の遠賀川系土器や弥生時代後期の箱清水式土器、坂城町上五明条里水田址出土の製鉄関連遺物、松本市真光寺遺跡の古墳出土品などを展示した。本年度の見学者数は362名であった。

②生涯学習月間長野県庁ロビー展示

開催日：11月6日（月）～11月10日（金）

会場：長野県庁1階 玄関ホール

内容：長野県教育委員会文化財・生涯学習課による生涯学習月間の展示に協力した。夏休み考古学チャレンジ教室における「JOMON ファッションワークショップ」で作成した「縄文服」を展示して、内容を紹介した。また、「信州の遺跡」や各遺跡の「発掘たより」など、当センターの刊行物を配布した。



図120 生涯学習月間長野県庁ロビー展示の様子



図121 まが玉カードとたんけんマップ

③まが玉カード

普及啓発用教材「まが玉カード・たんけんマップ」を作成し、県内の展示施設で来館者に配布した。

カード作成配布事業は2021年度から始めている。2021・2022年度は縄文時代の遺物を素材とし、県内26の展示施設と連携した。本年度はその第3弾として「まが玉」を題材としたカードを作成することとし、県内の考古資料を収蔵する展示施設に協力を依頼した。千曲市の国史跡森將軍塚古墳出土のヒスイ製まが玉や阿智村の国史跡神坂峠出土の峠祭りに関係するまが玉などに埋文センターが現在整理作業を進めている長野市塩崎遺跡群出土の極小まが玉を含めた、15種類のカードを作成した。カードを配布する展示施設は15カ所、県内9広域に及ぶ。

カードを5種類以上集めた方に「まが玉カードホルダー」を記念品として進呈した。

④HP更新・動画作成

開設から10年以上が経過した埋文センターのHPについて、デザインなどの更新を行った。さらにHPのコンテンツに組み込んだYouTubeで、発掘調査の進め方や調査方法を紹介する動画を製作し、公開した。

また、発掘調査や整理作業の様子、埋文センターの行事案内には随時SNSを活用した。

(村井大海)

(5) 講座・出前授業・職場体験

① 講座

○ 篠ノ井老人福祉センター生きがいづくり講座
「おとなりさんの考古学入門」(全8回)

- 1) 「遺跡発掘Q&A」(5/18)
- 2) 弥生時代「長野盆地の開拓者」(6/5)
- 3) 見学「県立歴史館古墳展」(7/20)
- 4) 縄文時代「縄文時代の暮らし」(8/17)
- 5) 縄文時代「縄文時代のヒミツ」(9/21)
- 6) 遺跡めぐり「篠ノ井町歩き」(10/19)
- 7) 旧石器時代「最古の道具、石器」(11/16)
- 8) 平安時代「古代の鉄づくり」(12/21)

6回目となる本年度は、旧石器時代から平安時代までの時代ごとの題材とともに、「遺跡発掘Q&A」といった従来と視点を変えた講座も行った。

また、座学だけではなく県立歴史館古墳展の見学や篠ノ井地区の遺跡めぐりといった体験型の講座を取り入れたことは、大変好評であった。今後もより参加者の興味関心を引くことができる講座を考えていきたい。

② 出前授業

○ 信州大学教育学部 5月23日(火)

内 容: 「近年の長野県における遺跡発掘調査」

主に社会科学教員を目指す学生対象の「日本史講座」の1コマとして行った。考古学と文化財保護(主に埋蔵文化財調査)について、当センター「長沼城跡」等の発掘調査事例を用い、具体的に解説した。近年埋蔵文化財も含め「文化財」は、活用事業など社会貢献が求められる時代となっていること、担当職員も考古学に限らず多様な人材



図122 篠ノ井老人福祉センターでの講座



図123 安茂里小学校での出前授業

が必要となっていることなどを伝え、それに関連して当センターのインターンシップ事業も説明した。

○ 長野市立安茂里小学校 9月5日(火)

内 容: 「縄文から古墳時代の暮らし」

「土器や道具などの移り変わり」

6年生の歴史学習の一環として、出土品の実物や複製品を使用し授業を行った。実際に遺物に触れることで重さや手触り感などを感じてもらい、その上で時代順や用途などの質問を投げかけ、児童が自分のもつ知識から考える場面も設定した。

あわせて、小学校周辺の遺跡地図などを用いて、地元の歴史についても解説した。児童たちは身近に遺跡があることに驚き、地元の歴史に関する興味関心が高まったようである。

③ 職場体験

今学校では、「自ら考える」ことが重視され、その方策の一つとして学校外での活動・体験も増えている。当センターにも多くの職場体験希望があり、学校の要望にできるだけ応えるべく、以下のような複数の形で、可能な限り受け入れている。(※詳細な実施日や参加人数はP44「概要」参照)

ア センターにおける職場体験

実施校: 長野市立松代中学校、同篠ノ井東中学校、同篠ノ井西中学校、長野俊英高等学校、第一学院高等学校

内 容: 遺物の整理と図書整理作業を主として行った。遺物の整理は、土器の接合・拓本、礫石経の撮影・実測作業などで、図書室での図書整理などの作業を通して、調査成果としての報告書についても説明をした。

イ 発掘現場における職場体験

実施校：長野市立東北中学校

内容：学区内の長沼城跡発掘調査現場で、土を削って遺構の検出、出土した遺物の取り上げ、土器洗浄などの作業を行った。また、地層を抜き取る最新の調査（地層抜き取り調査）についても見学し、採取した試料の地層面を削るなどの作業も体験した。

ウ 発掘現場・センター双方における実務訓練

実施校：長野工業高等専門学校

内容：センターにおいて遺物の整理（注記・復元・洗浄・実測）と図書室での図書整理などの作業を3日間、長野市長沼城跡発掘調査現場において、遺構の検出や測量、写真撮影などの作業を2日間行った。

エ センターにおける探究活動支援

実施校：長野県長野高等学校

内容：探究活動における考古学に関する研究テーマに基づき、事前に質問や要望を送ってもらい、フィールドワークとしてセンターに来所した際、質問への回答や生徒と職員との意見交換、施設見学などを行った。



図124 職場体験（上：整理作業、下：発掘作業）

(6) 出版物

○長野県の埋蔵文化財情報誌「信州の遺跡」

【第21号】令和5年8月1日発行

- ・最新発掘調査情報 松本市南栗遺跡
- ・南信州の埋蔵文化財最新情報
飯田市川原遺跡、五郎田遺跡
史跡 恒川官衙遺跡
- ・信州の近代遺跡
伊那に眠る巨大な戦争遺跡「陸軍伊根飛行場」
- ・埋文本棚 海戸塾「考古地域学を学ぶ」
藤井一至「大地の五億年」
- ・特集 日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」
中央日本四県連携「山の洲文化財交流展」

【第22号】令和6年2月19日発行

- ・埋蔵文化財最新情報 富士見町曾利遺跡、山ノ内町史跡佐野遺跡、飯田市五郎田遺跡、松本市真光寺遺跡
- ・特集 信州近世城郭 発掘調査最前線
史跡松本城、史跡上田城跡、史跡松代城跡、長野市長沼城跡

○「長野県埋蔵文化財センター年報40」

令和6年3月22日発行

- ・2023年度の事業概要、調査研究ノート ほか
(中野亮一・遠藤恵子)



図125 信州の遺跡 第21号

V 指導者招へい

期 日	所 属 等	氏 名	内 容
5月9日～11日	駒澤大学文学部名誉教授 日本大学文学部教授 滋賀県文化財保護協会 飯田市教育委員会 阿智村教育委員会	酒井清治 山本孝文 辻川哲郎 春日宇光 中里信之	川原遺跡出土百済土器指導
5月30日～6月1日 8月28日～30日	京都大学名誉教授 獨協医科大学医学部 総合研究大学院大学	茂原信生 櫻井秀雄 本郷一美	長野市塩崎遺跡群ほか出土骨整理指導
5月29日	長野南警察署交通課		交通安全講習
6月6日～7日 7月5日～6日 9月6日～8日 11月21日～22日	立正大学文学部	時枝 務	下諏訪町ふじ塚遺跡整理指導
6月20日	県文化財保護審議会委員	市澤英利	松本市真光寺遺跡・南栗遺跡ほか 発掘調査指導
6月20日	元職員	寺内隆夫・若林 卓	松本市真光寺遺跡発掘調査指導
7月18日～19日	県文化財・生涯学習課長	岡田憲輔	県内センター受託遺跡調査指導
8月17日	滋賀県立大学名誉教授	中井 均	長沼城跡発掘調査指導
9月19日	松本市教育委員会	竹原 学・竹内靖長	長沼城跡発掘調査指導
9月21日	元愛知県埋蔵文化財センター副センター長	石黒立人	中央新幹線五郎田遺跡発掘調査指導
9月25日・26日	県文化振興事業団理事 安曇野市豊科郷土博物館長 早稲田大学文学部学術院教授	市澤英利 原 明芳 高橋龍三郎	中野市南大原遺跡発掘調査指導
9月29日	長野県立歴史館特別館長	笹本正治	長沼城跡発掘調査指導
12月19日～21日 2024年 2月27日～29日	京都大学名誉教授 獨協医科大学医学部 総合研究大学院大学 日本大学松戸歯学部	茂原信生 櫻井秀雄 本郷一美 五十嵐由里子	信州大学医学部出土骨整理指導
2024年 1月23日～24日	北海道埋蔵文化財センター理事長	長沼 孝	川原遺跡出土遺物及び現地調査指導
2024年 2月21日～29日	学校法人黒木学園	増田明仁	パソコンソフト技能講習
2024年3月5日	元職員	岡村秀雄	長沼城跡整理指導

VI 会議・研修会への参加

(1) 会議・委員会等

期 日	内 容	出 席 者	場 所
4月26日	文化財保護行政市町村担当者会議	春日皓介・水科沙華 酒井実姫・熊本奈美	塩尻市
6月15日～16日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会	原田秀一・川崎 保 上田典男	和歌山県和歌山市
8月7日～8日ほか	文化庁近世・近代埋蔵文化財保存活用調査研究委員会	谷 和隆	京都府京都市
10月20日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会中部・北陸ブロック会議	神田弘一 西 香子	石川県金沢市
11月1日～2日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会	柳澤 亮 村井大海	茨城県水戸市
1月29日	全理協デジタル等技術活用推進委員会研修会	村井大海・伊藤 愛 春日皓介・鈴木時夫	リモート
1月31日～2月2日	文化庁埋蔵文化財担当職員等講習会	杉木有紗・春日皓介 伊藤 愛・村井大海 水科沙華・関 香介	リモート
9月25日	県文化財保護審議会史跡・考古部会	川崎 保 ほか5名	中野市・センター

(2) 研修会等

期 日	内 容	参加者・調査者	場 所
5月12日	文化財とICTを活用した授業づくり	水科沙華	福岡市
6月8日～9日	市町村埋蔵文化財研修(基礎研修)	西 香子・水科沙華 関 香介・熊本奈美 酒井実姫・小出晟生	松本市
6月15日～	長野経済研究所 実務セミナー	丸山晃平 ほか26名	長野市
6月28日～30日	地山掘削及び土止め支保工主任者技能講習	廣田和徳・杉木有紗 遠藤忠美子	松本市
7月2日～5日	黒曜石産地視察調査(職員自己研鑽研修)	大竹憲昭 村井大海	北海道
7月11日～14日	木質文化財の科学的調査基礎課程	水科沙華	奈良文化財研究所
7月24日～28日	遺跡地図・GIS 課程	関 香介	奈良文化財研究所
8月23日～25日	世界遺産視察調査(職員自己研鑽研修)	原田秀一・川崎保	北海道・青森県
10月25日～28日	応急的保存処理先進事例調査(職員自己研鑽研修)	水科沙華・熊本奈美	青森県・宮城県・福島県
2024年 2月6日～9日	文化財レスキューのための保存処理分析研修	杉木有紗・原田秀一 酒井実姫	福岡市・熊本市
2024年 2月19日～22日	地震災害痕跡調査課程	熊本奈美	奈良文化財研究所
2024年 2月20日・3月15日	考古資料保存技術講習会	水科沙華・熊本奈美 酒井実姫	長野県立歴史館
2024年 2月24日～27日	韓国古代土器研修	川崎保・春日皓介	大韓民国ソウル市ほか
2024年3月7日	広報ワーキンググループ研修会	谷 和隆・村井大海 ほか2名	松本市
2024年3月22日	関東ブロック埋文共同研究会	柳澤 亮・谷 和隆 ほか5名	リモート

Ⅶ 学校・関係機関への協力等

(1) 職員派遣・技術支援等

期 日	依 頼 者	対 応 者	内 容
4月～R6.1月	長野大学	川崎 保	講座（日本史概論・信州地域史）
4月28日ほか	長野県教育委員会	宮脇正実	長野県文化財保護指導委員会
5月24日	佐久市教育委員会	市川隆之	中世～近世土器の鑑定
5月26日	小諸市教育委員会	市川隆之	近世土器の鑑定
6月16日	長野県総合教育センター	廣田和穂・河西克造	教科等教員研修（「社会科の基本Ⅰ」）
10月 4日	佐久市教育委員会	河西克造	国史跡龍岡城跡調査
10月31日	飯田市教育委員会	綿田弘実	黒田大明神原B遺跡整理
11月4日～3月31日	伊那市教育委員会	河西克造	伊那市誌編さん協力員
11月10日	山形村教育委員会	川崎 保・西 香子	洞遺跡調査
11月15日	佐久市教育委員会	中野亮一	大給垣顕彰委員会
11月15日	山ノ内町教育委員会	綿田弘実	佐野遺跡保存活用計画策定委員会
12月12日	朝日村朝日美術館	水谷沙華・平林 彰	氏神遺跡ほか出土品の応急的保存処理
12月15日	愛知県埋蔵文化財センター	綿田弘実	根道外遺跡調査
12月18日	佐久市教育委員会	長谷川桂子	香坂山遺跡地質調査
2024年2月29日	小諸市教育委員会	市川隆之	平原城跡の出土品の鑑定
2024年2月29日	中川村歴史民俗資料館	酒井実姫	土器修復
2024年3月18日	佐久市教育委員会	市川隆之	北小路遺跡・柳堂遺跡の出土品鑑定

技術支援の概要

信州大学医学部所蔵考古資料整理業務

期間 2023年4月1日～2024年3月29日

今年度は、信州大学から預かった約29,800点の対象考古資料（土器、石器類、骨等脆弱遺物）について、既報告の文献などを調査、照合し、台帳に反映させ、今後の歴史的な評価、分析につなげた。とくに、骨類については外部有識者を招聘し、整理指導を受け、骨類の鑑定を行った。

明治・大正期の考古資料の中には、1924（大正13）年刊行『諏訪史』第一巻の第69図12や桐原健氏が「信濃考古」No.20で紹介した松本市波田発見の土偶をはじめ、長年、所在不明であった重要な考古資料が含まれていることが判明した。

人・獣骨はほぼすべての鑑定を終え、八幡一郎氏が1952年に調査した茨城県女方第三号墳の人骨を再調査したほか、茅野市栃窪岩陰出土品にニホンオオカミの歯があることも再確認できた。



図126 土偶胴下半部（縄文晩期） 注記：東筑摩郡波多村新田



図128 骨類の鑑定指導（茂原信生京大名管教授ほか）

長和町埋蔵文化財調査技術指導業務委託

期間 2023年10月1日～2024年2月29日

長和町は本州最大級の黒曜石原産地をもち、町村合併以前の旧長門町、旧和田村は1986年から1991年にかけて原産地とその周辺の遺跡について分布調査をおこなってきたが、それ以外の遺跡については昭和50年代に作成したもので、近年の開発などにも遺跡範囲の記述がなく不都合が生じていた。このため町村合併後の2014年から毎年、国庫補助を受け分布調査を行い、本年も古町・長久保地区を中心に踏査をおこなった。

また、昨年旧長門町（一部旧和田村男女倉地区の資料も含む）で昭和2～30年代に精力的に遺跡調査に努め、町の遺跡分布図の基礎を作った郷土史家故児玉司農武氏の蒐集資料（木箱150箱）が町に寄贈され、その蒐集資料台帳を作成した。



図127 分布調査風景



図129 児玉司農武蒐集資料

(2) 学校等への協力（職場体験を含む）

期 日	名 称	対 応 者	内 容
4月13日	長野市立通明小学校	廣田和徳	土器バズル等の貸与
5月12日～ 9月28日	山ノ内町教育委員会	川崎 保・柳澤 亮 風間真起子	史跡佐野道跡等出土土器復元
5月17日	SBC 信越放送株式会社	川崎 保	「すぐ出せテレビ」取材 長野盆地の弥生時代
5月18日 6月15日 7月20日 8月17日 9月21日 10月19日 11月16日 12月21日	篠ノ井老人福祉センター （おとなりさんの考古学 入門：全8回）	柳澤 亮 市川隆之 柳澤 亮 岡 吉介 熊木奈美 廣田和徳 村井大海 水科沙華	道跡発掘 Q & A 長野盆地の開拓者 県立歴史館古墳展見学 縄文土器のくらし 縄文土器の秘密 篠ノ井町歩き 最古の道具、石器 古代の鉄作り
5月21日	長野県考古学会	上田典男	道跡報告会「西浦道跡の調査成果」
5月23日	信州大学教育学部	川崎 保・柳澤 亮	考古学講座「近年の長野県における道跡発掘調査から」
5月24日	上田市まるこ公民館	大竹憲昭	まるこ春秋学園講演会 「掘ってわかった信州の歴史」
6月2日	INC 長野ケーブルテレビ	柳澤 亮・市川隆之	「ながのニュース」取材 整理作業について
6月5日	ことぶきアカデミー	川崎 保	講座 「上田地域の古代の条里地割の意味を考える」
6月9日	長沼小学校教員	伊藤 愛	長沼城跡現場見学（10名）
6月17日 7月1日	金鶏会館連続公開講座 「考古学シリーズ5」	中野亮一 川崎 保	「近世信濃国の城と城下町」 「塔筒形合子はなぜ長野市小島・柳原道跡群に埋められたか」
6月13日 R6年2月6日	第一学院高等学校	廣田和徳・風間真起子	職場体験（3名）
7月10日	長野市立松代中学校	廣田和徳・風間真起子	職場体験（1名）
7月12日・13日	長野市立篠ノ井東中学校	廣田和徳・風間真起子	職場体験（2名）
7月20日・21日	長野市立篠ノ井西中学校	廣田和徳・風間真起子	職場体験（1名）
7月26日	松本市教育委員会	河西克造・平林 彰 杉木有紗	南栗道跡・塚塚古墳群・真光寺道跡視察
8月3日	南箕輪村教育委員会	杉木有紗	真光寺道跡視察
8月4日	テレビ信州	杉木有紗・水科沙華 酒井実亜	「ゆうがた Get !」取材 真光寺道跡の発掘調査
8月17日	長野高等学校	廣田和徳	フィールドワーク（1名）
8月29日	長野県教育委員会	柳澤 亮・伊藤 愛	県教委インターシップ生見学（長沼城跡）
9月2日	飯田市下久堅公民館	長谷川桂子・遠藤恵実子	久堅村熱地域巡り 川原道跡見学（12名）
9月3日	千曲市桜堂公民館	川崎 保	桜堂区防災訓練講演会「千曲川の洪水災害の歴史」
9月5日	長野市立安茂里小学校	柳澤 亮・熊木奈美	出前授業
9月10日	佐久市教育委員会	川崎 保	記念講演会「古代の人々が愛した玉・勾玉を中心に～」
9月11日～15日	長野工業高等専門学校	廣田和徳・風間真起子 伊藤愛	実務訓練（1名）
9月14日	坂城町立坂城小学校	廣田和徳	銅鐸レプリカ等の貸与
9月16日	柳原地区住民自治協議会	川崎 保	歴史探訪講演会 「小島・柳原道跡群出土の塔筒形合子と恵亮について」

9月19日	吉田地区住民自治協議会	西香子・是枝敦子	歴史講座 「浅川扇状地遺跡群の発掘調査の成果」
9月20日	長野市文化財保護協会	伊藤 愛	「長沼城跡」調査状況の説明
9月21日	長沼小学校6年生	中野亮一・広田良成 熊本奈美	長沼城跡現場見学
9月28日	北陸地域づくり協会ほか	柳澤 亮	千曲川会講演「川から遺跡を考える—中野市南大原遺跡、長野市長沼城跡の調査」
10月3日	飯田市立下久堅小学校	谷 和隆・春日皓介	遺跡発掘体験事前学習
10月11日・12日	長野市立東北中学校	伊藤 愛	職場体験（5名）
10月12日	飯田市立下久堅小学校	谷 和隆・春日皓介 綿田弘夫・遠藤恵実子	遺跡発掘体験（22名）
10月18日	北陸地域づくり協会ほか	川崎 保・伊藤 愛 上田典男	長沼城跡・南大原遺跡見学
10月26日	かまちまづくり協議会	川崎 保	長沼城跡現地視察
11月5日	飯田市下久堅公民館	春日皓介・遠藤恵実子	久堅ウォーキング 川原遺跡見学（38名）
11月18日	奈良女子大学	川崎 保	シンポジウム勾玉談義「勾玉の出現について」
11月28日	長野俊英高等学校	廣田和穂・風間真起子	職場体験（2名）
12月10日	佐久市白田文化協会	中野亮一	第37回文化講演会「近世信濃国の城と城下町」
12月20日	SBC 信越放送株式会社	柳澤 亮・村井広海	「Yes!ものづくり」取材
2024年3月2日	静岡県埋蔵文化財センター	川崎 保	令和5年度山の洲文化財交流展記念講演会 パネリスト
2024年3月3日	森将軍塚古墳友の会	川崎 保	講演会「森将軍塚古墳からシナノのクニへ」
2024年3月9日	松本市教育委員会	杉本有紗	遺跡報告会「真光寺遺跡の発掘調査」
2024年3月30日	辰野町教育委員会	廣田和穂	沢尻東原遺跡の調査成果報告

（3）調査資料の利用

承諾月日	申請者	内容
4月18日	安曇野市個人	柳沢遺跡画像の転載
4月24日	信濃毎日新聞社	長沼城跡画像の転載
5月8日	ジャパン通信情報センター	真光寺遺跡画像の転載
5月15日	えにし書房株式会社	柳沢遺跡画像の転載
5月23日	新潟大学教授 卜部厚志	長沼城跡ボーリングコアの譲受
6月2日	フランス Adeline Grolleau	日向林B遺跡画像の転載
6月8日	信濃毎日新聞社	小島・柳原遺跡群画像の転載
6月8日	INC 長野ケーブルテレビ	塩崎遺跡群・長沼城跡画像の転載
8月4日	酒々井町教育委員会	日向林B遺跡・竹佐中原遺跡画像の転載
8月17日	飯田市教育委員会	川原遺跡画像の転載
8月23日	富山大学生	塩崎遺跡群出土資料の閲覧

9月7日	諏訪湖博物館・赤彦記念館	ふじ塚遺跡出土資料の借用
9月15日	かみつけの里博物館	柳沢遺跡・篠ノ井遺跡群画像の転載
9月26日	CB ツアーズカンパニー	当センターHP画像の転載（展示室風景）
11月6日	長野県文化財保護協会	当センターHP画像の転載（掘るしん展示風景）
11月24日	坂城町教育委員会	上五明糸里水田址（申請者撮影画像の公開）
11月28日	石川県埋蔵文化財センター 林 大智	南大原遺跡出土資料の閲覧
12月14日	弘前大学教授 上條信彦	上五明糸里水田址水田土壌サンプルの譲受
12月21日	SBC 信越放送株式会社	当センターHP画像の転載（発掘作業風景）
12月27日	鳥根県古代文化センター	柳沢遺跡画像の転載
2024年1月12日	塩尻市 個人	ふじ塚遺跡出土資料の閲覧
2024年1月24日	長野市教育委員会	榎田遺跡出土資料の転載
2024年1月24日	株式会社あお	当センターHP画像の転載（土器整理風景）
2024年1月30日	飯田市個人	川原遺跡・下川原遺跡のドローン空撮
2024年2月2日	長野市教育委員会	榎田遺跡出土資料の転載
2024年2月2日	長野県教育委員会文化財・生涯学習課	長沼城跡地層抜き取り調査法写真の掲載
2024年2月16日	弥生中期土器研究会 星野宙也ほか	孫苞島遺跡出土資料の閲覧

（4）インターンシップ等

2018年度から制度化したインターンシップ事業は本年度で5回目である（2021年度中止）。センターHP及びSNS、大学での出前講座などで周知を進めたところ、13大学の学部生・大学院生延べ42名（夏期31名・冬期11名）の参加があった。

夏期は各地の発掘現場で、考古学のみならず、安全点検や現地説明会準備などといった現場の運営管理を学んでもらった。冬期は整理室で出土遺物の洗浄・注記・分類や図面修正等の基礎的作業を通じ、発掘調査・記録管理・報告書刊行という記録保存業務の一連の流れを把握してもらっている。またSNSを通じて申込みのあったオランダ・ライデン大学所属で中国籍学生1名も、大学カリキュラムとしての参加を受け入れている。

参加学生は将来文化財分野での就職を希望する者が多く、卒業後には本県や当センター職員、その他地方自治体等職員として文化財に関わる仕事に携わっている者も複数ある。文化財保護業界の

課題である人材確保、人材育成に対して、一定の効果もあげつつある。

参加学生の所属大学・大学院は以下のとおり。愛知学院大、学習院女子大、金沢大・大学院、信州大（教育学部・工学部）、専修大・大学院、総合研究大学院大、帝京大、東海大、富山大、長野大、奈良大、弘前大、立正大大学院

（柳澤 亮）



図130 インターンシップ生による調査（長沼城跡）

2023年度（インターンシップ）参加学生

期 間	所 属	氏 名	遺 跡
7月5日～20日（発掘）	帝京大学	渡 飛	長野市長沼城跡
7月5日～8月16日（発掘）	オランダ ライデン大学	Aurora Gao 幸	長野市長沼城跡
7月18日～8月1日（発掘）	専修大学大学院	三田 日向乃	松本市真光寺遺跡
8月1日～18日（発掘）	信州大学	青野 魁志	長野市長沼城跡
8月17日～30日（発掘）	長野大学	松田 龍	長野市長沼城跡
8月17日～30日（発掘）	学習院女子大学	林 優衣奈	松本市南栗道跡
8月18日～31日（発掘）	奈良大学	中嶋 彩瑛	長野市長沼城跡
8月18日～31日（発掘）	奈良大学	数井 歩	長野市長沼城跡
8月18日～31日（発掘）	奈良大学	浅井 勇真	長野市長沼城跡
8月18日～31日（発掘）	金沢大学	清澤 美月	松本市南栗道跡
8月21日～9月4日（発掘）	専修大学	ヒギンス 凱	松本市南栗道跡
8月21日～9月15日（発掘）	立正大学大学院	小山 峻輝	長野市長沼城跡
8月29日～9月12日（発掘）	専修大学	小林 奎太	長野市長沼城跡
9月4日～15日（発掘）	東海大学	大多和 泰照	松本市真光寺遺跡
9月4日～15日（発掘）	信州大学	山本 晃輝	長野市長沼城跡
9月4日～15日（発掘）	信州大学	吉村 駿希	長野市長沼城跡
9月4日～15日（発掘）	専修大学	佐藤 優哉	松本市真光寺遺跡
9月4日～15日（発掘）	専修大学	川村 怜雄	長野市長沼城跡
9月4日～15日（発掘）	専修大学	大島 和月	長野市長沼城跡
9月4日～27日（発掘）	金沢大学大学院	グエン ティ タイン ガン	松本市南栗道跡
9月4日～15日（発掘）	専修大学	長澤 桂隆	松本市南栗道跡
9月4日～15日（発掘）	信州大学	小林 雅広	松本市南栗道跡
9月4日～15日（発掘）	奈良大学	和田 美桜	松本市南栗道跡
9月4日～15日（発掘）	奈良大学	林元 万依	松本市南栗道跡
9月13日～27日（発掘）	信州大学	伊藤 快哉	長野市長沼城跡
9月14日～28日（発掘）	金沢大学	石井 里奈	松本市真光寺遺跡
9月15日～29日（発掘）	富山大学	宮坂 岳	坂城町上五明条里水田址
9月15日～29日（発掘）	立正大学	金澤 陽依	坂城町上五明条里水田址
9月19日～10月3日（発掘）	信州大学	保志場 暖	松本市真光寺遺跡
9月19日～10月3日（発掘）	信州大学大学院	鍾 堯	長野市長沼城跡
11月6日～11月17日（発掘）	弘前大学	清水 綾乃	長野市長沼城跡
2月13日～3月8日（整理）	奈良大学	吉澤 佑弥	松本市南栗道跡・長野市長沼城跡
2月13日～3月5日（整理）	愛知学院大学	三村 優斗	松本市真光寺遺跡
2月19日～3月4日（整理）	専修大学	長澤 桂隆	松本市南栗道跡
2月21日～3月6日（整理）	金沢大学	北西 暉	松本市真光寺遺跡
2月26日～3月8日（整理）	弘前大学	秋山 友希	長野市長沼城跡
2月26日～3月8日（整理）	信州大学	山本 晃輝	松本市南栗道跡
2月26日～3月8日（整理）	金沢大学大学院	グエン ティ タイン ガン	松本市南栗道跡
2月26日～3月8日（整理）	総合研究大学院大学	青野 圭	松本市南栗道跡
3月4日～3月15日（整理）	立正大学大学院	小山 峻輝	長野市長沼城跡
3月4日～3月15日（整理）	奈良大学	二ノ宮 由大	長野市長沼城跡
3月4日～3月15日（整理）	信州大学	伊藤 快哉	長野市長沼城跡

※在籍大学のカリキュラムとして参加（私費）

(5) 県有施設（県立歴史館）利用の応急的保存処理

期 間	種類・点数	内 容	担 当 者	遺 跡
2024年1月～3月	青銅鏡2点	有機洗浄・BTA処理 樹脂含浸等	水科沙華 熊木奈美	下諏訪町ふじ塚遺跡 飯田市西浦遺跡

(6) 派遣等の受入

出向

期 間	所 属	職	氏 名	遺 跡
4月～2024年3月	北海道埋蔵文化財センター	調査研究員	広田良成 大泰司統	長野市長沼城跡 飯田市五郎田遺跡ほか

研修派遣

期 間	所 属	職	氏 名	遺 跡
4月～2024年3月	伊那市教育委員会	学芸員	熊木奈美	長野市長沼城跡

VIII 組織・事業の概要

(1) 組織

令和5(2023)年10月1日現在

一般財団法人長野県文化振興事業団

【評議員】5名 堀内征治 笠原甲一 小出貞之 石川利江 山田明子

【理事会】12名

理事長：吉本光宏 副理事長：金澤 茂 常務理事：山本晋二
 理事：市澤英利 唐木さち 松山 光 松本 透 北沢理光
 監事：金井貞徳 丸茂洋一
 中村 誠

事務局	10名	所 長 副所長(兼管理部長) 管理部 7(8)名 管理部長 管理課長 調査研究員 主事 4名 調査部 32名 調査部長 調査第一課 11名 課長 課長補佐以下10名 調査第二課 11名 課長 主任調査研究員以下10名 飯田支所 9名 支所長 課長補佐以下8名
芸術文化推進室	0名	
埋蔵文化財センター	40名	
県民文化会館	24名	
伊那文化会館	16名	
松本文化会館	18名	
県立美術館	32名	
飯田創造館	7名	
アーツカウンシル推進室	8名	

(2) 職員(臨時職員を除く)

令和5(2023)年10月1日現在

所 長	原田秀一		
副 所 長	草間ちづる		
管理 部	管理部長(兼)	草間ちづる	
	管理課長	神田弘一	
	主 事	村井大海 日向 育 高野和子 中澤克子 酒井清美	
調 査 部	調査部長	川崎 保	
	飯田支所長	谷 和隆	
	調査課長	[第一課] 西 香子 [第二課] 柳澤 亮	
	調査課長補佐	[第一課] 廣田和穂 [飯田支所] 長谷川桂子	
	調査研究員	[第一課]	杉木有紗 水科汐華 関 杏介 酒井実姫 丸山晃平
		[第二課]	伊藤 愛 広田良成 (北海道理文より出向)
		[飯田支所]	寺澤正俊 風間真起子 小出晟生 春日皓介 大泰司 統 (北海道理文より出向) 宮脇正実 鈴木時夫 遠藤恵美子
	調査指導員	[第一課]	大竹憲昭 平林 彰 河西克造
[第二課]		上田典男 市川隆之 中野亮一	
[飯田支所]		綿田弘実	
学芸員	[第二課] 熊木奈美 (伊那市教育委員会より研修派遣)		

(3) 事業

事業名または箇所名		事業箇所	委託事業者等	事業内容	精算(千円)	
委託事業	整備・整理作業	国道18号 (坂城更埴バイパス) 改築	長野市 塩崎遺跡群ほか2遺跡	国交省関東地整局 長野国道事務所	整理作業	61,646
			坂城町 上五明条里水田址		発掘作業	37,658
		国道20号 (下諏訪岡谷バイパス) 改築	下諏訪町 ふじ塚遺跡		整理作業	30,474
		一般国道158号 (松本波田道路) 改築	松本市 真光寺遺跡ほか1遺跡		発掘作業	134,285
	松本 JCT 建設	松本市 南栗遺跡	国交省長野国道事務所 ネクスコ中日本	発掘作業	119,426	
	上今井遺水地整備	中野市 南大原遺跡	国交省北陸地整局 千曲川河川事務所	発掘作業	95,700	
	長沼地区防災整備	長野市 長沼城跡	国交省北陸地整局 千曲川河川事務所 長野市河川課	発掘作業	240,309	
	国道153号線北拡幅	飯田市 高屋遺跡ほか1遺跡	長野県 飯田建設事務所	発掘作業	88,990	
	飯田富山佐久間線	飯田市 川原遺跡		発掘作業	74,965	
	若穂スマートIC	長野市 川田条里遺跡	長野市	発掘作業	44,567	
	北沢東工場遺地開発	辰野町 沢尻東原遺跡	辰野町	整理作業	6,996	
	リニア中央新幹線	飯田市 五郎田遺跡ほか3遺跡	東海旅客鉄道株式会社	発掘作業	367,569	
技術支援	長和町教育委員会	長和町内遺跡	長和町	分布調査等	3,028	
	信州大学医学部	県内遺跡	信州大学	整理作業	5,000	
	研修等	長野県教育委員会	奈良文化財研究所 職員自己研鑽研修等			
自主事業	普及啓発	施設公開(夏休み考古学教室) 8月			4,959	
		出土品展&報告会 11月・2024年2~3月				
		遺跡説明会及び発掘体験				
		広報誌「信州の遺跡」21・22号の刊行 普及啓発用教材の作成「まが玉カード」ほか				
	その他	出前授業・地域普及啓発事業への協力			46	
	インターンシップの受入				—	

Ⅸ 調査研究ノート

- (1) 信濃国更級郡六ヶ郷用水の開削について
—坂城町上五明条里水田址の発掘調査成果から—
調査研究員 小出晟生
- (2) 松本市真光寺遺跡で検出した石列の検討
調査研究員 酒井実姫
- (3) 接合した礫石経が語ること（予察）
—下諏訪町ふじ塚遺跡の整理作業から—
調査指導員 河西克造
- (4) 長野市長沼城跡にみる中世城館内での鍛冶活動
学芸員 熊木奈美
- (5) 近年の長野県埋蔵文化財センターの応急的保存処理の現状と課題
調査研究員 水科汐華
- (6) 長野県埋蔵文化財センター調査の新技術導入について
調査第二課長 柳澤 亮
- (7) 長野県内遺跡出土動物骨集成について
獨協医科大学医学部解剖学講座献体事務室事務長 櫻井秀雄
京都大学名誉教授 茂原信生
総合研究大学院大学統合進化科学研究センター准教授 本郷一美
調査部長 川崎 保

(1) 信濃国更級郡六ヶ郷用水の開削について

一坂城町上五明条里水田址の発掘調査成果から一

小出晟生

1 はじめに

長野県埋蔵文化財センターでは、国道18号線バイパス改築工事に伴い坂城町上五明条里水田址(以下、上五明と表記)の発掘調査を令和3年度から実施している。これまでの調査で、上五明の土地利用・集落形態は現在の景観と大きく異なることが明らかになった¹⁾。奈良時代の水田は千曲川が形成した旧河道の窪地地形内に造成され、その上層では平安時代中期の散居集落が検出されている。

千曲川左岸には「六ヶ郷用水」と呼称された全長約8.7キロの農業用水が存在する。現在、上五明及び力石条里遺跡を灌漑しているのはこの用水である。用水は上田市半過で千曲川から取水され、左岸に位置する網掛・上平・五明・力石・新山・

上山田の水田域を灌漑している。

用水の開削は『倭名抄』に記載された古代の村上郷まで遡るといわれる(坂城町1981)。しかし、六ヶ郷用水と比定できる用水路の存在は発掘調査で確認されていない。さらに、窪地地形の古代水田は西側谷の沢水を灌漑に利用していたことがわかっている²⁾。また、水田層を被覆する砂層も沢から供給されたとみられる。そもそも平安中期集落は六ヶ郷用水が灌漑する水田域の下層に広がる。以上のことから六ヶ郷用水は古代に存在しなかった。

本稿では、発掘調査成果に基づいて六ヶ郷用水の開削について検討する。また、中世に水田開発を主導した領主層の動向についても触れたい。



図1 本年度調査における土地利用の変遷



図2 土層断面の内耳鍋

2 旧地形の変遷と用水形態

西側谷の出浦沢・福沢川が土砂を押し出す力は強く、奈良時代の水田や窪地地形は沢の堆積によって埋もれた。沢の堆積の激しさは、本年度調査区の最深部にあたる調査4面が現地表面から約3メートルの位置にあることから明確である(図1)。

平安中期には地形が平坦化して調査1面の散居集落が成立した。集落の廃絶後、上層の水田耕作土で中世後期とみられる内耳鍋が出土した(図

2)。遅くとも中世後期には再び集落域が水田化され、水田は現在まで踏襲されている。こうした沢の堆積土によって、中世以降には氾濫原の地形は南東から北東に傾斜していった。

現在、千曲川左岸の水田域を灌漑する六ヶ郷用水は、沢の堆積が形成した扇状地と千曲川氾濫原の間を縫うように開削されている。この状況から、用水は地形が南東から北東へ傾斜する地形になった後、平坦になった千曲川氾濫原を水田開発するため開削されたことがわかる(図3)。

小穴喜一氏は用水路の形態から、縦水系の沢水・小河川による灌漑を「単線型水路」、横水系の大中河川による灌漑を「横断型水路」と定義し、前者の開発が後者に先行することを明らかにした(小穴1987)。これに従えば、西側谷の沢は単線型水路、六ヶ郷用水は横断型水路に位置づけられる。

現在、西側谷を流れる沢と六ヶ郷用水は立体交差しており、合流していない(図4)。これは、用水の開削及び水利権が別個に成立したことを示している。さらに、年代が古いはずの西側谷の沢



図3 六ヶ郷用水と現地形(地理院タイルに加筆)



図4 六ヶ郷用水・福沢川の立体交差地点



図5 天井川化した出浦沢

は六ヶ郷用水の上部で通過している。それは土砂の押し出しによって天井川化したことが原因であり、沢の下を用水が流れているからといって六ヶ郷用水の開削が沢の灌漑に先行するわけではない(図5)。

3 中世の開発勢力

中世の上五明を含む千曲川左岸には、伊勢社領「村上御厨」が置かれていた。中世信濃の用水開発について、村上御厨と同じ千曲川流域に位置する信濃国大田荘の水利調査を行った福嶋紀子の研究成果がある。氏は、沢水を水源とする谷田開発が先行し、後に横断型水路による沖積地の大規模開発が行われたことを指摘した(福嶋1994)。これは上五明の発掘調査で明らかになった開発プロセスと共通する。大田荘において、沖積地を灌漑する横断型水路の開発は、荘内郷村の地頭職を有

する金沢称名寺や島津氏が主導したとみられる。

一方、村上御厨の開発を在地で主導したのは村上御厨を本拠地とした信濃村上氏であったと考えられる。村上氏一門の中には、出浦沢・福沢川の流れる西側谷の扇状地を名字の地とした出浦氏・小野沢氏がいる(花岡2013)⁴⁾。出浦氏は承久の乱の勲功によって若狭国に名主職を得ており、西遷した一族もいた。また、小野沢氏は得宗被官としての活動が確認されている。出浦氏・小野沢氏は村上氏の傍流である故、得宗北条氏に接近することによって勢力を保った。西側谷を本拠地とするこれらの勢力が、千曲川氾濫原の開発を進め水田域を拡大させていったと想定したい。

4 文献史料上の六ヶ郷用水

六ヶ郷用水の史料上の初出と考えられるのは、永禄10年(1567)11月19日付の武田信玄朱印状である⁴⁾。「村上庄内其方知行分之堰役・上役、合四拾三俵御救免候畢」とあり、信玄は家臣の大須賀久兵衛尉に対して村上庄内の「堰役」四三俵を免除した。村上御厨は16世紀に「村上庄」と呼ばれていたことがわかる。中世後期における村上御厨の伝来は不明であるが、「村上庄」という表記は16世紀には伊勢社領としての実態を失っていたことを示している。天正19年(1591)の上杉景勝による村上庄内新山村検地でも「四拾仁表壺斗三俵 堰役」と記されていることから、新山村に対して「堰役」四二俵の負担が定められている⁵⁾。

ところで、『信濃史料』は天正19年の文書に記された「堰役」を「端役」と翻刻しているが、本稿では『坂城町誌』『日本歴史地名大系』に従い「堰役」と解釈したい⁶⁾。また、文書に花押を据えている「賢祐」の詳細は先行研究で明らかにされていない⁷⁾。本文書の詳細な検討は今後の課題である。

近世に入ると用水を管理する「六ヶ村組合」が成立する。近世文書から、網掛・上平・五明・力石・新山・上山田の六ヶ村による用水の共同管理が行われた様子を窺うことができる(坂城町1981)。

5 おわりに

これまでの発掘調査によって、千曲川左岸における土地利用の変遷を捉えることが出来た。六ヶ郷用水の開削は古代まで遡らない。千曲川左岸の水田は、西側谷の沢水を取水源とした開発が先行していた。中世以降、地形の平坦化に伴って氾濫原の水田化という土地利用上の転換が進んだ。水田開発を推進した勢力として信濃村上氏の存在を想定した。しかし、史料上で六ヶ郷用水の存在を確認出来るのは16世紀末であり、用水の開削と領主層の関わりを具体的に明らかにすることは難しい。また千曲川のような大河を取水源とする用水路の形態はそれほど古いものではないだろう。本稿では課題の提示に終始してしまったが今後の発掘調査成果が更なる実態解明の手掛かりになることを期待したい。

筆者の力量不足でまとまりのない文章になってしまった。想像の域を出ない記述も多く、史料や報告書の誤読・誤解もあるのではないかと思う。ご批判を仰ぎたい。

註

- 1) 調査の概要は本誌掲載の市川隆之「上五明条里水田址」を参照。
- 2) 市川隆之氏の教示による。
- 3) 出浦・小野沢は坂城町上平の小学名として残る。
- 4) 『信濃史料』第13巻192頁。武蔵国に出自を持つ大須賀氏は、村上氏に従い明応年間ごろ村上御野(村上庄)に住み始めた。武田晴信による村上義清攻略の際に武田方となった。
- 5) 某黒印状『信濃史料』第17巻442頁。
- 6) 本来であれば原文書を調査する必要がある。時間の都合上困難であった。
- 7) 賢祐は上杉家中の人物と考えられるが、豊臣期に上杉景勝が信濃国更級郡で行った検地は先行研究で文禄4年(1595)の事例しか取り上げられていない(平井2014)。

参考文献

- 『日本歴史地名大系』第20巻長野県の地名、平凡社、1979年
『坂城町誌』中巻歴史編1、1981年
『長野県史』歴史編第3巻中世2、1987年
小穴喜一「土と水から歴史を探る—古代・中世の用水路を軸として—」信毎書籍出版センター、1987年
『角川日本地名大辞典』第20巻長野県、角川書店、1990年

- 『長野県姓氏歴史人物大辞典』角川書店、1996年
福嶋紀子「信濃国太田荘石村郷の歴史的景観と水利」同著
『中世後期の在地社会と荘園制』同成社、2011年、初出1994年
『主要地方道長野上田線力石バイパス建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書2—坂城町内—上五明条里水田址』長野県埋蔵文化財センター、2011年
花園康隆「鎌倉期信濃村上氏についての基礎的考察」『法政史学』第79巻、2013年
平井上総「豊臣期検地一覧(稿)」『北海道大学文学研究科紀要』第144巻、2014年

(2) 松本市真光寺遺跡で検出した石列の検討

酒井実姫

1 はじめに

真光寺遺跡は松本市波田に所在し、梓川右岸に形成された河岸段丘上に立地する遺跡である。松本波田道路改築工事に伴い、長野県埋蔵文化財センターが令和3年度から発掘調査を実施している。

本遺跡内には、1557（弘治3）年に再興されたと伝わる真光寺が所在し、遺跡の東方には、7世紀後半以降の築造と推定される安塚古墳群と秋葉原古墳群が分布する。

これまでの調査では、古墳時代終末期の古墳や中世の火葬施設跡、土坑墓群などがみつかったが、本年度の調査で新たにし字状にのびる溝跡と、溝跡の内側でこれに並列する石列がみつかった（図1）。また、この石列は、圃場整備などに

より上部が削平され部分的にしか残っていないが、埋土の状況などから中世以降に構築されたことを想定している。本稿では、この石列に着目して本遺跡における石列の性格について考察し、さらにその上部の様相についても検討していきたい。

2 真光寺遺跡の石列

(1) 検出の状況

石列は、本遺跡内に所在する現在の真光寺の北側、地表面からおよそ0.6mの地点においてし字状に延びる溝跡に沿う状態で検出した。

石列の上端幅は、場所により異なるが1.5～1.8mで上端から下端までの高さは0.4mである。石列は現真光寺側の一角でみつかっており、その全



図1 真光寺遺跡 空撮



図2 石列の検出状況



図4 並べられた礫



図3 石列の断面

長はおよそ6mである。これより北側では検出できなかったが、溝跡の底面で大型の礫がみつかったため、溝跡と並行して北側へと続くと考えられる(図2・6・8)。

石列は外側に2列大きな石を平行に並べ、内側に小さな礫が充填されていた。石列の2列に並べられた大きな礫は、直径およそ40cmのものがほとんどであり、特に大きい礫は直径60cmで厚さは25~30cmにもなる。かなりの重さとなるが、大人1人程度でも持ち上がる大きさである。一方、その間に詰められた小さな礫は、主に10cm前後で、角が丸い垂円礫であるものが多い。大・小礫ともに石材は安山岩や花崗岩等で、当遺跡から600m圏内に流れる梓川等の河川から容易に採取できるものと考えられる。

(2) 構造

ここでは、石列の構築について概説する。土層

の様子から考えられるのは、まず、中世以降において地山に整地をするための盛り土をし、その後、溝跡や石列などをはじめとする、遺構を造り上げた可能性である(図3)。

石列は土石混合の中世以降に形成されたと考えられる整地層の直上で形成されており、この整地層にはわずかに硬い面はあるものの、両刃で土層断面を削るとポロポロと崩れ落ちてしまう。叩き固められた様子を確認することはできなかった。

また、2列で平行に並べられた大きな礫は一段のみ残存しており、この礫を除いた面に、溝跡や杭などの痕跡は見当たらず、十分な固定がされていない(図4)。礫の間に詰められた小礫は、2~3個程度重なって敷き詰められていた。礫を除くと中世以降に形成された整地層に、礫の形状が残っている(図5)。礫の重さによって沈下したようにも見えることから、石列の上部にはある程度の高さのある構築物の存在が推測され、その重さを礫が受けたことによって土壌が生じた可能性が考えられよう。このことから、本遺跡の石列は溝跡に沿って造られた土塁などの下部構造の可能性を指摘したい。

3 類似事例

本遺跡の石列には先述したように、2列で平行に並べられた大きな礫を配することと、その間に小礫が詰められているという特徴がある。

石列と共通する類似例として新府城跡の本丸跡からみつかった石積(報告書では「石築地」と呼



図5 礎を取り除いた状況

称。以下、この呼称を使用)を挙げ、その構造について比較、検討していく。

新府城跡は山梨県韭崎市に所在する。天正9(1581)年に武田勝頼によって築城され、翌天正10(1582)年に廃城となったとされている(山下ほか2017)。

石築地は、土塁と建物をつなぐ通路としての役割があったと想定されており、石築地の石は両面とも平らで、大きな面を外側へむけて設置されている。さらにその内部には0.1m前後の石が多数、裏込めされていた(図7・山下ほか2002)。

以上に挙げた新府城跡の石築地と本遺跡の石列の構造は、2列で平行に並べられた大きな礫を配



図6 北東より撮影

することと、その間に小礫が込められているという、石材利用の特徴を同様持っていることから、印象は異なるもののその構造はおおよそ共通するものと考えられる。さらにどちらの遺構も近世の城郭の石垣とは異なり、平行に2列で並べられた石列は、どちらか一列の片面だけを見せようと意識して造られたわけではないことを推定している。

類似する造りをもつ両遺構により、中世以降の城郭・集落において、石を集積し構築する遺構があった可能性を指摘できるのではと考えている。

4 まとめ

ここまで本遺跡でみつかった、石列の発掘調査状況を整理し、新府城跡の遺構と比較してきた。

結果として、本遺跡の石列は土塁のような遺構の基礎としての役割を持っていたのではないだろうかと考えている。また、それと並行する溝跡は

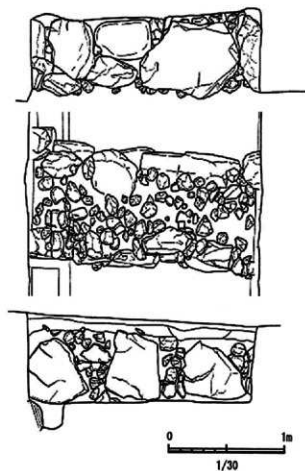


図7 石築地平・断面図

居住域を囲う堀跡であろうか。溝跡が石列とおそらく同時期に形成されたと考えられること、その溝跡に沿うように石列が存在することは、堀と土塁の構築と類似する。それも石列が土塁の基礎と考える根拠の一つであるが、さらに中世以降の整地層に礫がその形状の圧痕を残している点は注目すべきであろう。かなり圧力がかかるような、高さのある構造物が構築されていたと推定している。

一方で、礫の下部にはそれを支えるための構造物や遺物が確認できなかった。本遺跡の石列では、基底部に横木などを設置せず、石を積み上げるだけの構造であったのだろうか。

また、大きな礫が平行に並べられた間に小礫が裏込めとして込められるという石の構造は、類例の新府城跡で見つかっている石築地と共通する要素として重要なものだろうと考える。一方で松本地域において、本遺跡の石列と同じ構造を示す中世以降に構築された例は見つけることができな

かったため、さらなる類例調査が必要であろう。

まだまだ不明点は多いため、他の用途をもつ遺構であることも考えられるが、本年度の発掘調査により、溝跡に開まれていた空間があったこと、そこには少なくとも一部において、土塁のような遺構が存在していたことが今後の本遺跡における土地利用を検討していく上で重要であると考えられる。本遺跡の調査は来年度も継続して行う予定である。遺跡内にはどんな構築物があったのか、松本地域においてどんな存在であったのかについて、今後も検討していきたい。

参考・引用文献

- 伊藤蔵之介ほか 2020『長野県松本市殿村遺跡（第1・9次・総括）・虚空蔵山城跡岩屋社周辺測量調査報告書』松本市教育委員会
- 山下孝司ほか 2002『史跡 新府城跡—環境整備に伴う発掘調査報告書Ⅳ—』荊崎市教育委員会
- 山下孝司ほか 2017『史跡 新府城跡—環境整備に伴う発掘調査報告書Ⅴ—』荊崎市教育委員会



図8 石列 南西より撮影

(3) 接合した礫石経が語ること（予察）

一下諏訪町ふじ塚遺跡の整理作業から一

河西克造

1 はじめに

長野県埋蔵文化財センターは、2020・21年に一般国道20号（下諏訪岡谷バイパス）改築工事に伴い、諏訪郡下諏訪町に所在するふじ塚遺跡の発掘調査を実施した。2020年度の調査では、遺跡内にある「ふじ塚古墳」が中近世の「塚」と判明し（図1）、塚の下層からは6万点に及ぶ礫石経で構成された「礫石経塚」が確認された（図3）。

2021年度からは礫石経の整理作業を開始し、2023年度に礫石経塚の調査事例を探したところ、武田勝頼墓（山梨県甲州市）に埋納された礫石経に接合した礫石経があることがわかった（飯高2010）。かかる事象を念頭に置きふじ塚遺跡の礫石経を調べたところ、経文等の文字や梵字が判読できたものだけでも約100個体の礫石経が接合していることがわかった。

本稿は、ふじ塚遺跡に接合した礫石経がある事例報告と、それが存在する意味を検討したものである。今後の整理作業の役に立てば幸いである。

2 ふじ塚遺跡の「塚」と「礫石経塚」

信仰の「塚」と判明した墳丘は土石混合で構築されており、人頭大をはるかに超え、人力では持ち上げられない礫が多量に用いられていた（図2）。塚は硬化した構築土が重層的に堆積し、最下層の構築土は硬化の度が著しく、強固にかなり叩き締められていた。そして、この最下層の構築土下層から6万点に及ぶ礫石経が集積する「礫石経塚」が発見された（図3）。16世紀に構築された礫石経塚と16世紀に構築されて19世紀まで存続した塚が重なっていたのである（河西2021）。礫石経塚と塚が重なる事例として、物見処遺跡（東京都三宅島）の経塚（報告書では「積石遺構」と呼称。國學院大學文学部考古学研究室1992）があり、物見処遺跡とふじ塚遺跡は貴重な事例と言える¹⁾。さらに、礫石経塚の特徴としては、礫石

経に旧石器時代のブロックを想起するブロック状の塊があり、ブロックの間には随所に隙間がみられたことがある（図4）。このブロックは、礫石経を埋納する際の単位を示すものと考えられる（河西2021）。このような事例は、近世になるが河原市経塚（石川県金沢市）でも確認されている（橋本ほか1974）。このブロックが埋納の単位を示



図1 土石混合で構築された塚の全景



図2 塚の構築に用いられた礫



図3 礫石経塚の全景

す仮定で考えると、ふじ塚遺跡の礫石経は、1点ずつ埋納するのではなく、袋状容器もしくは木質容器に入れて運搬し、そこから出して単位がわかる状態で埋納したと考えられる²⁾。

3 礫石経にみられた「異常」

上述した武田勝頼墓出土礫石経に触発されてふじ塚遺跡の礫石経を調べたところ、割れている礫石経と亀裂がある礫石経が数多くあり、前者には接合する礫石経が確認された(図5・7)。

ふじ塚遺跡における文字の書写割合は、7割とかなり多い。墨跡がないものは河原などからの採取時にすでに割れていた可能性があるため、書写後に割れたと判断される礫石経(116点)を対象としてその接合状況を検討する。

出土地点ごとの内訳は図6の通りである。大半が礫石経塚出土の礫石経が占めるが、それは礫石経塚からの出土数が多いことに起因しよう。接合した礫石経の礫石経塚における平面分布は、礫石経塚のほぼ全域で確認でき、基本的にブロック内

で接合する。ただし、ブロック間で接合したものが2点確認された。接合した礫石経は、特定の石材に偏る傾向はない。石の中央に文字等が書写されているものは、字が中央で分断されている。ま

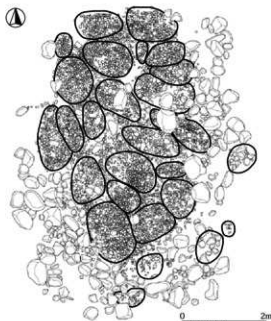


図4 礫石経塚 ブロック認識図(河西2021)



図5 接合した礫石経

た、接合箇所は石の中央部や石の側面付近など多様である。接合箇所に打点は確認されていないため、石器製作のように、一ヶ所に打撃が加わったことで割れたものではないことを示す。

4 石が割れる原因

石が割れる要因は、石材の違いや石材利用の違いなど様々なものがあるが、①人為的要因、②自然的要因に大別される。②には、気候条件がある。文禄年間に豊臣系大名の日根野氏が諏訪湖沿いに築城した高島城は、寒冷地のため屋根に瓦を使用せず柿葺きにしたと言われている（浅川ほか1995）が、諏訪地域で出土した殿村・東照寺址遺跡（下諏訪町）³⁾と湯川経塚（茅野市）⁴⁾の礫石経には、書文字が断ち割られたような礫石経が数多く存在する状況はない。ふじ塚遺跡の礫石経には、殿村・東照寺址遺跡と湯川経塚にはない人為的要因が加わった可能性があると理解する。なお、礫石経塚と礫石経に被痕痕跡がないことから、『善信聖人親鸞伝絵』（小松ほか1994）に描かれている火葬のように、屋外で焚いた熱の影響を受けていない。では、どうして割れたのであろうか。

5 割れた原因を遺跡から考える

次に発掘調査段階で、ふじ塚遺跡の礫石経に「圧力」が加わった痕跡が確認できたか否かを検証してみたい。

塚の調査では、塚の構築土をすべて除去した。最下層の構築土は、硬化の度合いが著しく、手作業での掘り下げが容易ではなかった。よくここまで叩き締めたと感じるほどであった。最下層に堆積する構築土が最も硬化しており、この構築土の下面と礫石経塚の最上層の礫石経が接する状況も確認された。さらに、塚の構築には、人力では持ち上げることが困難な頭大の礫が多量に用いられており、この礫が礫石経塚の直上に存在するものもあった。これらの礫を除去するために人力で動かした際、礫石経が姿を現し、その中には石の中央部で割れている礫石経が存在していたのである（図8）⁵⁾。

上記の状況から、ふじ塚遺跡で礫石経が割れた

原因は、礫石経塚上での塚の構築が深く関連していることがわかった。塚を構築する際、構築土を叩き締めて硬化させたことや、塚の構築に夥しい礫を用い、かなり重量のある礫が礫石経塚の最上部まで及んだことによるものと考えられる。礫石経塚がある程度の厚さを持つ盛土で覆われていた

	出土地点	出土数	文字判読数	接合数
1	礫石経塚	61,895点	27,042点	114点
2	塚	1,415点	436点	2点
3	塚の周囲	30点	2点	0点
合計		63,340点	27,480点	116点

図6 礫石経出土数と接合資料数（R5.12月時点）



図7 礫石経の接合面



図8 塚の下から出土した礫石経（矢印：割れた礫石経）（河西2021）

ら、礫石経が割れるようなことはなかったと思われる。

6 ふじ塚遺跡における作善業

ふじ塚遺跡で行われた一連の作善業^{せぜんぎょう}を推測したものが図9で、ここから礫石経がいつ割れたのかを推測してみたい。

116点の接合資料は、礫石経塚に伴うものと、塚に伴うものがあり、前者は、書写後から塚が構築される前に割れたと推測される(図9③~⑥)。また、塚に伴うものは、書写後から塚の構築時もしくは構築後の間に割れたと推測される(図9⑤~⑦)。このように、礫石経が割れる原因は、書写後の仮置き(集積)と礫石経の運搬、埋納時、埋納後の上部からの加圧により生じたと解釈できる。

さらに、礫石経にはヒビが入ったものや表面がぼろぼろになったものが多数確認された。加えてブロック間で接合したものがあることから、ふじ塚遺跡の礫石経は、書写後經典(特に紙本経)のように丁寧に扱われていなかったと考えられる。また、前述のように埋納後には、上層に塚が構築され、その構築方法で礫石経に圧力が加わった。このようなことから、ふじ塚遺跡の礫石経を観察した筆者は、武田勝頼墓の報告書に記載されている飯島泉の一文「(礫石経は)丁寧に埋納ではなく、まとめてドサッと入れ込んだような印象があり、」(飯島2010)には共感するものがある。

経文の文字を多数書写した多字一石経は、經典の意味をなすが、経文の1字もしくは2~3字書写した一字一石経は、經典の意味をなさないとの時枝務氏の指摘(時枝2019)が、本稿で扱った考古資料に表れているように思える。ふじ塚遺跡における一連の作善業のなかでは、「写経」にもっともウエイトが置かれていたと思われる。

今後、解明しなければいけない課題は多々あるが、本稿では問題提示をさせていただく。

7 おわりに

本稿は、礫石経を観察するなかで、礫石経が割れて文字が欠けているものや、墨跡はないが割れているものがあつたことから、礫石経が接合した

	経文等の書写から礫石経塚・塚の構築
①	紙川等の河原から石を採取する
②	寺院・堂宇もしくは屋外で経文等を書写する
③	書写した礫石経を容器等に入れて保管するか、屋外に集積する
④	礫石経を運搬してふじ塚遺跡に礫石経塚を構築する(礫石経の埋納)する
⑤	塚の構築時に礫石経を書写し、塚の構築場所に運搬する
⑥	礫石経塚の上に土石混合で塚を構築する
⑦	塚の構築時もしくは構築後に礫石経を埋納する

図9 作善業の流れ

意味を検討したものである。

今後は考古資料としての礫石経の分析を深め、遺構(礫石経塚、塚)との関連性を導き出すことで、「礫石経が割れる原因」が解明できると考えられる。本稿はその長い道のりのほんの一步である。

註

- 1) 立正大学文学部 時枝務教授からも同様な指摘があつた。
- 2) ブロックが示す意味は、今後の整理作業で解明すべき大きな課題である。
- 3) 下諏訪町立諏訪湖博物館・赤砂記念館で遺物を実見した。
- 4) 茅野市八ヶ岳総合博物館で遺物を実見した。
- 5) 塚の調査時においては、硬化した構築土の土圧と人頭大を超える礫の重量が、礫石経塚に与えた影響を捉える視点が十分になく、礫石経が接合する認識がなかった。調査担当者として認識が欠けていたことを接合した礫石経は教えてくれた。

引用・参考文献

- 浅川清榮ほか 1995 『図説高島城と諏訪の城』郷土出版社
 飯島 泉 2010 『山梨県指定史跡 武田勝頼の墓—経石出土に伴う総合調査報告書—』甲州市教育委員会
 河西克造 2021 『下諏訪町ふじ塚遺跡の礫石経塚 その構造と特徴』長野県埋蔵文化財センター年報 38
 國學院大学文学部考古学研究室1992 『物見処遺跡1992』
 小松茂美ほか1994 『善信聖人親覽伝』『続々日本絵巻大成』(1)伝記・縁起篇
 坂詰秀一ほか 2003 『仏教考古学事典』雄山閣
 橋本澄夫ほか 1974 『金沢市河原市道跡 一字一石経塚の発掘』石川県教育委員会
 時枝務 2019 『礫石経とは』第13回特別展『礫石経』立正大学博物館
 立正大学文学部考古学研究室 1994 『礫石経の世界』紙全舎

(4) 長野市長沼城跡にみる中世城館内での鍛冶活動

熊本奈美

1 はじめに

長沼城跡は長野市穂保地区に所在する遺跡で、2021年度から発掘調査が行われている。2023年度の調査では二の丸および三の丸推定地の遺構分布や、土塁・堀の位置が明らかになり、「幻の城」とされてきた長沼城の姿が少しずつペールを脱ぎ始めている。

本稿では、長沼城跡において本年度にみつかった鍛冶炉と推定される遺構と、出土した鍛冶関連遺物の内容およびその分布について紹介する。

2 長沼城跡の鍛冶炉および鍛冶関連遺物

鍛冶炉と推定される遺構(SF21)は長沼城跡二の丸推定地でみつかった。平面形は長軸約100cm、短軸約50cmのひょうたん型を呈する土坑で、底部に長軸約14cm、短軸約10cmの焼土範囲を持つ(図1)。掘り込みは4cm程度と浅く、覆土に多量の炭化物を含んでいる。

焼土を検出した時点で鍛冶炉である可能性を考慮し、覆土3.900gを採取した。5mm、1mm、0.5mmメッシュおよび磁石による選別を行ったところ、鍛造剥片および粒状滓3g(図2)、炭化物18g、着磁遺物21g、そして埴塼片3点や銅滓を得ることができた。鍛造剥片と粒状滓は鉄製品を作る工程(小鍛冶)において、熱した鉄を叩くことによって生成されるものであり、このことからSF21が小鍛冶を行った鍛冶炉であると判断した。

2021年から2023年度の発掘調査において、鍛冶炉と推定されている遺構はSF21のみであるが、長沼城跡ではそのほかにも鉄滓、銅滓、羽口、埴塼など小鍛冶を含む鍛冶活動に関連する遺物が多数出土している。鉄滓には炉壁、椀形滓、分類不能のものがあり、累計で322点に及ぶ。また鉄滓との判別が難しいが、銅滓も出土している。羽口は2021年度に1点出土している。

特筆したいのは埴塼の出土である。小さい破片も含めると合わせて15点が出土しており、そのう

ち6点に銅滓が付着している。埴塼の元となる土器には、手づくねとカワラケの転用の両方が確認できる。このことから、長沼城内で小鍛冶だけでなく銅製品の加工も行われていたことがうかがえる。

鉄滓等の鍛冶関連遺物は調査区内に普遍的に分布しているわけではなく、二の丸の掘立柱建物等の周辺に集中して出土している(図3)。特に二の丸北郭部分(図3左側)での出土が多い。

3 県内中世城館跡の鍛冶関連遺物・遺構

ここまで、長沼城跡出土の鍛冶関連遺構及び遺物を紹介した。本項では長野県内中世城館跡の鍛冶関連遺物・遺構について類例を挙げ、長沼城跡との比較を試みたい。

長野県内の中世城館跡のうち、鍛冶関連遺構お



図1 SF21 焼土検出状況

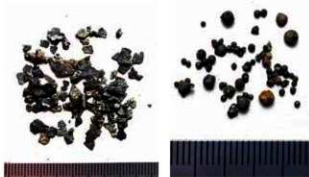


図2 SF21出土鍛造剥片(左)と粒状滓(右)(一目盛り1mm)

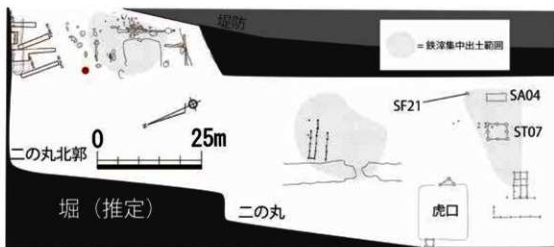


図3 遺構位置及び鉄滓分布概略図

よび遺物の出土が確認できたのは8遺跡(表1)だが、紙幅の都合上紹介するのは本稿で触れる遺跡に留めたい。また、浅学のため見落としている遺跡もあると思われる。

・金井城跡 佐久市大字小田井

金井城跡では1987～1988年に行われた発掘調査において603棟の堅穴建物がみつまっている。そのうち第63号堅穴建物址は床中央に地床炉と下床が被熱した張り出し部を備えており、多量の鉄滓も出土しているほか、271号堅穴建物址からは鉄滓と羽口が出土している。また、鍛冶遺構と考えられる土坑もみつまっている。出土陶磁器の年代や文献から、金井城の主な使用期間は16世紀中であると考えられる(佐久市教育委員会1991)。また、河西克造によると縄張りの特徴から武田氏的人格が抽出できるという(河西1991)。

・鍛村遺跡 松本市大字会田

鍛冶と直接関連する遺構は検出されていないが、堅穴建物および整地土から埴塼が5点出土している。時期は15世紀後半～末と推定され、埴塼に緑青等が付着していたことから、銅鍛冶がおこなわれるような工房空間があったと考えられる(松本市教育委員会2018)。

・大草城跡 中川村大草

1985年に行われた発掘調査において、二の丸の北郭が鍛冶場として使用されていたことが判明した。年代は出土遺物から14～16世紀と考えられる(中川村教育委員会1990)。

遺跡名	所在地	年代	鍛冶遺構	鍛冶関連遺構
長沼城跡	長野市徳保	16世紀	1	鉄滓、羽口、埴塼
栗田城跡	長野市栗田	14～15世紀		鉄滓
塩田城跡	上田市前山	16世紀	2	鉄滓、羽口、埴塼
金井城跡	佐久市小田井	16世紀	2	鉄滓、羽口
鍛村遺跡	松本市会田	15世紀後半		埴塼
堀の土居館跡	辰野町沢底	15世紀前半	1	鉄滓、鉄製鉄製品
大草城跡	中川村大草	14～16世紀	1	鉄滓、羽口、埴塼、錐型
北本城々跡	飯田市極光寺	断片不明		鉄滓、羽口

表1 長野県内城館遺跡の鍛冶関連遺物・遺構

・表町遺跡 上水内郡飯綱町牟礼

矢筒城の城下町遺跡として知られている。城館遺跡ではないが、遺跡のある牟礼地区は長沼地区と同じく太田荘に属しており、1221年に地頭となった島津氏の支配下にあった(牟礼村1997)ため、長沼城跡との比較に適していると考え紹介する。

表町遺跡では、2009年に行われた飯綱町の調査において複数の炉床を伴う掘立柱建物跡(SB05・06)が検出されている。建物の周辺から鉄滓・羽口が複数出土していることから、SB05・06は鍛冶工房跡と考えられる。工房の存続時期は15世紀後半～16世紀と推定されている(笹澤2014)。また、2005～2008年にかけて行われた長野県埋蔵文化財センターの調査でも、鍛冶関連遺物が多数出土しており、その時期は16世紀前半と考えられている(長野県埋蔵文化財センター2009)。

概観すると14～16世紀、つまり室町から戦国時代にかけて城館内やその付近で鍛冶が行われる

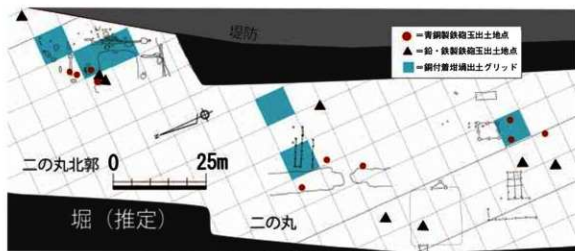


図4 銅付着増埜及び鉄砲玉出土地点概略図

ケースがあったことがわかる。また、16世紀に鍛冶工房が運用されていたと考えられる金井城跡や大草城跡は武田氏の影響が強い土地だが、近い時期に烏津氏の支配下にあった表町遺跡では城下町に鍛冶工房があったことを考えると、支配者もしくは城の機能により鍛冶職人の活動場所が異なっていたことも考えられる。

4 長沼城跡鍛冶痕跡についての考察

長沼城跡出土鍛冶炉の位置と機能

初めに、長沼城跡でみつかった鍛冶炉が城内でどのような位置にあったか考えたい。鍛冶炉(SF21)は16世紀の柱穴列(SA04)および掘立柱建物跡(ST07)の北東に位置し、すぐ東側には内堀があったと考えられる(図3)。SF21からは年代のわかる遺物が出土していないため、柱穴列や掘立柱建物と同時期のものかははっきりしないが、SF21は建物に伴った鍛冶炉である可能性がある。また、鍛錬鍛冶遺物と増埜という铸造関連遺物が同時に出土していることから、小鍛冶も铸造も同じ炉で行っていたことがわかる。

(2) 銅滓が付着した増埜について

先述のように長沼城跡では増埜が出土しているが、城内で銅の铸造が行われていたことにはどのような意味があるのだろうか。同じく銅滓が付着した増埜が出土しているのは松本市殿村遺跡であるが、铸造の場所や目的はわかっていない。遺構と伴う例については、他県になるが山梨県甲州市勝沼氏館跡の工房跡がある。そこでは館の内郭部

から水路と水溜を伴う礎石建物跡(SB20)がみつき、水溜の中から多量の増埜(報告書では溶着物付着土器)が出土している。この増埜の中には金が付着しているものもあり、金を加工する工房が内郭部にあったと考えられている(甲州市教育委員会生涯学習課2010)。また青森県浪岡町浪岡城跡では増埜のほか鐸や切羽の鋳型が出土している(浪岡町教育委員会1985)。浪岡城跡の例から考えると、長沼城でも武器に使用する銅製品が作られていた可能性があるが、令和5年度までの調査では鋳型の類が出土しておらず、出土する銅製品は建具の装飾と考えられるものが多い。考えられるとすれば鉄砲玉の铸造であろうか。長沼城跡では現在18点の鉄砲玉が出土しているが、そのうちの半分には青銅が含まれている。鉄砲玉は一般的に比重の重い鉛を主成分としているが、山梨県上野原町(現上野原市)長峰峠跡の発掘調査で青銅製の鉄砲玉が出土した例が存在する。山梨県教育委員会がこの鉄砲玉の成分を調べたところ、青銅古銭の配合比に近いものであるという結果が得られている。山梨県埋蔵文化財センターの出月洋文はこの結果を受け、富士御室浅間神社の文書に鉄砲玉の铸造材料として悪銭を納めるよう指示する内容があることから、悪銭を鉄砲玉の材料にすることが一般的に行われていたのではないかと推測している(山梨県埋蔵文化財センター2000)。

翻って、長沼城跡における青銅製鉄砲玉につい

て考えたい。埴塙と青銅製鉄砲玉の出土地点(図4)を見てみると、鉛・鉄製の鉄砲玉に比べ、青銅製の鉄砲玉が埴塙出土区域付近に偏って出土していることがわかる。鑄型が出土していないため断定することはできないが、長沼城内で何らかの銅製品が作られていたことは確実であり、その中に鉄砲玉が含まれていた可能性もあるのではないだろうか。

5 まとめ(今後の課題)

ここまで、長沼城跡でみつかった鍛冶炉について類例を交えて紹介した。最後に今後の課題を列挙してまとめとする。

・ほかの鍛冶関連遺構の有無

今回はSF21のみを対象としたが、これまで調査した遺構の中にも鍛冶関連遺構が存在すると思われる。特に埴塙や鉄砲玉が多く出土する二の丸北郭の内容には注視したい。

・SF21の役割

SF21とはかの遺構の位置関係等については先述したが、この遺構でどのような鉄製品を製作していたのかはわからなかった。SF21が建物の内部ではなく外側でみつかったことや、炉床と掘り込み以外に石囲い等の構築物がないことを考えると、本格的な工房というよりは仮作業場の印象を受ける。古鉄の修理や普請のための釘づくり等が考えられるが、長沼城跡で出土した鉄製品を分析すればよりはっきりしたことがわかるだろう。

・鍛冶活動の主体者と時期

笹本正治は、武田氏が佐久の龍雲寺に宛てた文書から武田氏と職人の関係について考察している。この文書は龍雲寺が再建のために小県郡の番匠(木工職人)の派遣を依頼、それに武田側が応じ、長沼城に在城しているものに断って派遣を許すという内容のものである(笹本2021)。氏はこれについて「武田氏は小県郡や佐久郡の番匠全体を掌握」(笹本1990)し、「おそらく龍雲寺が番匠を使おうとしたとき、武田氏が長沼城の築城に動員していたため、雇うことができなかった」(笹本2021)と考察している。つまり長沼城の築城のために遠隔地から職人を連れてきているというこ

とになり、その動員された中に鍛冶職人も存在した可能性がある。今回みつかった鍛冶炉が武田の時代のものであれば、遠隔地から連れてこられた職人が使用したのかもしれない。しかし、先述した通り鍛冶炉から年代のわかる遺物は出土しておらず、武田氏以降、もしくは廃城後のものであることも十分考えられる。現段階では単なる憶測にすぎないため、年代や遺構同士の時期差などの検討が必要である。

以上、憶測と課題が多い考察となってしまったが、今後は発掘調査成果の整理や類例の検討などを行い、より詳細な鍛冶活動の実態をとらえたい。

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1992『北本城跡』
飯綱町教育委員会 2014『表町遺跡』
上田市教育委員会 1978『塩田城跡 第3次発掘調査概報』
甲州市教育委員会生涯学習課 2010『史跡藤沼氏館跡』甲州市文化財調査報告書5
佐久市教育委員会 1991『金井城跡第1分冊 遺構編』佐久市埋蔵文化財調査報告書1
辰野町教育委員会 2000『堀の内居館跡1』
中川村教育委員会 1990『大草城跡』
長野県埋蔵文化財センター 2009『西四ツ屋遺跡 表町遺跡』
長野市教育委員会 1994『栗田城跡(2)』長野市の埋蔵文化財61
浪岡町教育委員会 1985『浪岡城跡Ⅶ』
松本市教育委員会 2018『長野県松本市殿村遺跡第8次発掘調査報告書・虚空蔵山城跡第2・3・4次発掘調査報告書』松本市文化財調査報告書231
牟礼村 1997『牟礼村誌』
山梨県埋蔵文化財センター 2000『長峰砦跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書168
河西克造 1991『縄張りからみた金井城の構成と特徴』『金井城跡第2分冊 遺物・考察・写真図版編』佐久市埋蔵文化財調査報告書1 pp.707-713
神崎勝 2006『冶金考古学概論』雄山閣
窪田蔵郎 1987『改定 鉄の考古学』考古学選書9 雄山閣
笹本正治 1990『戦国大名と職人』吉川弘文館
笹本正治 2021『県立歴史館の武田氏印判状を読む—長沼城と龍雲寺—』『長野県立歴史館研究紀要』第27号 pp.1-19

(5) 近年の長野県埋蔵文化財センターの応急的保存処理の現状と課題

水科沙華

はじめに

長野県埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）では、1982年の設立以来、様々な体制によって応急的保存処理を実施してきた。応急的保存処理の対象物は、主に金属製品や木製品であり、開発事業に伴う埋蔵文化財の記録保存を目的としている。2021年度以降は、県有行政財産（長野県立歴史館保存処理室）を借用して直営での応急的保存処理を行う体制に移行した。

本稿では、現在の保存処理体制に至った経緯や、筆者が2021年度から応急的保存処理を担当した中でみてきた課題を提起する。はじめに、過年度までの応急的保存処理の経過をまとめ、次に2021年度以降の応急的保存処理の概要を報告する。以上を踏まえて、センターが抱える応急的保存処理の諸問題を整理し、今後の課題を検討する。

1 センターの保存処理業務の経緯

1982年の設立当時、長野自動車道発掘調査の拠点となった岡谷調査事務所では、職員が奈良国立文化財研究所にて保存処理研修を受講し、金属製品や木製品の保存処理を独自に実施した。

1991年に長野事務所に整理棟が設置され、木製品や金属製品の保存処理が本格化した。保存処理担当者は、整理棟において出土した遺物の保存処理を行うほか、各調査現場に赴き脆弱遺物の取り上げを行った。

1994年に長野県立歴史館（以下「歴史館」という。）が開館すると、保存処理の拠点は歴史館に移された。以降、両機関は発掘した資料を後世へ繋げるという大きな共通目的のもとに其々の使命を全うし、お互いに補い合ってきた。長年にわたる両機関の歩みと強い結びつきは、両機関の刊行物などでうかがい知れる。

2 現在の保存処理業務システム

現在の保存処理業務は、年度毎に調査部長が任命した保存処理担当者が、発掘調査や整理作業の業務と併行する形で実施している。主な業務は、「県有行政財産（歴史館保存処理室）での応急的保存処理」と「現地対応」である。

「県有行政財産（歴史館保存処理室）での応急的保存処理」は、保存処理を行う前年度に作業計画を立案し、歴史館との協議のうえ実施している。作業計画は、対象遺物に合わせた保存処理工程や必要期間を見積もり、保存処理担当者の本務の状況を鑑みて立案される。対象遺物は、前年度までに出土した脆弱遺物のなかから記録のために保存処理が必要と判断された金属製品が主である。2021年度から本年度までの業務は以下の表の通りである（表1）。

「現地対応」は、各発掘調査現場において特に脆弱な遺物が出土した際に、調査部長から連絡を受けた保存処理担当者が現地に赴き、遺物の取り上げや調査事務所への搬送などを行う（図1）。2021年度から本年度までの業務は以下の表の通りである（表2）。

また、保存処理担当者を含めセンター職員は、歴史館職員による保存処理業務研修や、奈良文化財研究所が主催する文化財担当者研修などを受講し、保存処理技術の向上を図っている。



図1 松本市真光寺遺跡から出土した銭繻の取り上げ

表1 県有行政財産（長野県立歴史館保存修復室）での応急的保存処理

2021（令和3）年度	長野市石川条里遺跡 鉄製品14点 長野市塩崎遺跡群 鉄製品、青銅製品21点
2022（令和4）年度	長野市長沼城跡 鉄製品50点（X線透過撮影のみ） 坂城町上五明条里水田址 鉄製品50点（X線透過撮影のみ） 下諏訪町ふじ塚遺跡 青銅製品（銭貨）93点
2023（令和5）年度	下諏訪町ふじ塚遺跡 青銅製品（和鏡）1点 飯田市西浦遺跡 青銅製品（和鏡）1点

表2 現地対応及びその後の保存処理

2021（令和3）年度	飯田市座光寺遺跡 耳環の現状観察
2022（令和4）年度	松本市真光寺遺跡 発泡ウレタンを用いた銭摺の取り上げ 飯田市西浦遺跡 和鏡の構造調査
2023（令和5）年度	長野市川田条里遺跡 木製品の取り上げ 飯田市五郎田遺跡 鉄剣の搬出及び構造調査

3 課題と対応策

発掘調査現場で出土する遺物は多岐にわたるが、特に金属製品や木製品などの脆弱な遺物については出土後早急に適切な応急処置を施す必要がある。金属製品の場合、一般に、発掘されて空気に触れることで急速に劣化や崩壊を引き起こすといわれている。更に、発掘調査現場からセンターに搬入した後も保存処理の実行までに数年を要し、その間に著しく劣化が進行するケースもみられる。このような劣化を最小限にとどめるために、現場担当者は発掘調査期間及び整理期間に応急処置を講ずるが、なかには適切な処置が行われないまま劣化が進むケースもみられる。その原因は、発掘調査現場で遺物が出土してから保存処理を実行するまでの、いわゆる“保存処理以前”の遺物の扱い方に関する共通理解が、実はあまり浸透していないことにあるのではなかろうか。発掘調査現場に応急処置に必要な薬剤や道具の用意がないことも、早急な応急処置を妨げる要因となっているように思われた。

この課題に対して、どの現場でも一律の応急処置を講ずることができるように考案したシステムが、「脆弱遺物救急箱 おたすけくん」（以下「おたすけくん」という。）である（図2）。

テンパコには、応急処置に必要な薬剤や道具と、出土から一時保管までの手引きを収納してい

る。

共通の物品を各現場に常備することで、どの現場でも一律の応急処置を講ずることができ、出土脆弱遺物の劣化を最小限に抑えることが目的である。

このシステムの特徴は大きく分けて2つある。1つは、「現場に常備する」ことである。金属製品の主な劣化要因は水分・塩素・酸素であるというのが通説であるが、発掘調査現場にはこれらの要素が揃っているため、できるだけ早くその環境から引き離さなければならない。出土してから応急処置までの時間を最小限に抑えるために、「おたすけくん」は1現場に1つ常備することを基本としている。

一方で、現場の状況に応じて、長野本所と飯田支所に常備している「おたすけくん」を活用した



図2 脆弱遺物救急箱「おたすけくん」（現場搬出時は蓋付き）

事例もある。いかなる手段を用いても、「おたすけくん」の有用性は、必要な時にすぐに使える即時性にあるかと考える。

もう1つは、「誰でも使える」ことである。「おたすけくん」の薬剤や道具は、ホームセンターなどで入手できるようなものを基本としている(表3)。身近で扱いやすく、一般的に広く使用されているものを使うことで、使用者の負担を軽減し、持続可能な応急処置を実現することを期待している。

出土から一時保管までの手引きは、発掘調査現場の特性を鑑みて、A4両面印刷の上でパウチし耐水性・耐汚性を備えた。金属製品の出土は、①出土状況の記録ができるレベルで出土した場合、②土器などに混じって取り上げていた場合、③土器洗浄中に金属製品と判明した場合の3パターンを想定して作成した。いかなる場合も、基本となる応急処置は、水分・塩素・酸素を除去することである。すなわち出土後はエタノールを用いて速やかな洗浄・脱水を行い、乾燥後は脱酸素環境に保管することが記されている。この手引きを見れば、経験の浅い職員や作業員も一様の応急を講ず

ることができる。これが、「おたすけくん」のもうひとつの有用性である(図3)。

現場担当者からは、「常備してあるため金属製品の出土に際して時間のロスなく調査を進められた」、「出土状況の記録の際に、記録の妨げとなる土砂がある程度まで洗浄するので、取り上げ後の洗浄が楽だった」、「道具が一纏めになっているので作業員に用意の指示しやすかった」、「作業員でも扱いやすく、手引きを見ながら問題なく取り扱っていた」という声を頂いている。発掘調査現場



図3 脆弱遺物救急箱「おたすけくん」手引き(金属製品バージョン)

表3 脆弱遺物救急箱「おたすけくん」に収納する物品リストの例(金属製品バージョン)

品名	メーカーと規格の例	用途	備考
テンバコ	第一合成 P-36	収納箱	
テンバコ蓋	第一合成 P ロックフタ	収納箱	
合成紙荷札	第一合成 耐水性のエボ紙 小・大	取り上げ	
マジックペン(黒)	耐水性のもの	取り上げ	
紙箱	裏紙・新聞紙で手作り	取り上げ	
エタノール	林純業工業 500ml	洗浄	
ゴム手袋	ニトリル 使い捨てゴム手袋 粉無し	洗浄	
マスク	キャッチマスク CM-LC50 50枚入	洗浄	
スポンジ	片手に収まる程度のもの	洗浄	
筆	大塚刷毛製造 ミニ平筆 サイズ各種	洗浄	
不織布	幅40cm 長さ40cm程度のもの	洗浄	
密閉容器(サイズ各種)	エンテック ハイバック PP	洗浄	2つで1セット
紙ワイパー	クレシア キムワイブ M-150	洗浄・乾燥	
タオル	幅35cm 長さ130cm程度のもの	洗浄・乾燥	
密閉容器(サイズ各種)	エンテックエンテック ハイバック PP	保管	
ポリチャック袋	ユニバック チャック付ポリ袋0.08厚	保管	
シリカゲル	トーヤク シリカゲル青白混合A型	保管	



図4 発掘調査現場での「おたすけくん」の活用
(写真撮影のための金属製品の洗浄作業)



図5 発掘調査プレハブでの「おたすけくん」の活用
(エタノールで洗浄、収納作業)

の円滑な運営という面でも、「おたすけくん」は有用であるといえる(図4・5)。

現在、「おたすけくん」木製品バージョンを立案している。今後も土器や骨角器など、多種多様な出土遺物に対応できるよう運用していきたい。また、本年度は市町村から応急的保存処理に関するお問い合わせを頂き「おたすけくん」を紹介する機会に恵まれた。現状センターでは、市町村からの保存処理事業に応ずる体制にないが、今後は種々の相談にも柔軟に対応していきたい。

おわりに

ここまで、筆者が保存処理担当者として務めた3年間の業務内容を中心に、センターでの応急的保存処理をめぐる現状と課題についてみてきた。

本稿を纏めるにあたり、長年埋蔵文化財保護に努めてこられた諸先輩方によって連絡と受け継がれた記録保存の理念や技術を学ぶことができた。文化財保護に携わる方々の弛まぬ努力に尊敬の念を抱くとともに、日々様々な経験や挑戦をさせていただいていることに改めて感謝したい。

浅学寡聞の身であるが、諸先輩の想いを引き継ぎ次世代へ繋げていかれるよう力を尽くす所存である。

主要参考文献

- 岡田文男 2002「文化財のための保存科学入門」京都造形芸術大学
- 小林至 1984「保存処理の基礎課程及び応用課程」『長野県埋蔵文化財ニュース』№9 長野県埋蔵文化財センター
- 小林望 1986「出土鉄器保存処理方法について」『長野県埋蔵文化財ニュース』№16 長野県埋蔵文化財センター
- 白沢勝彦 1982「保存処理の現状と課題」『長野県埋蔵文化財ニュース』№33 長野県埋蔵文化財センター
- 沢田正昭 1997「文化財保存科学ノート」
- 長野県教育委員会文化課 1983「科学的保存処理を必要とする出土文化財の実態調査結果について」『長野県埋蔵文化財ニュース』№2.3 長野県埋蔵文化財センター
- 長野県埋蔵文化財センター 1986年報3
- 長野県埋蔵文化財センター 1991年報8
- 長野県埋蔵文化財センター 2022『信州発掘奮戦録』
- 長野県立歴史館 1998年報2
- 長野県立歴史館 2004「信濃の風土と歴史@ふるさとの文化財を守る」

(6) 長野県埋蔵文化財センター調査の新技術導入について

柳澤 亮

1 はじめに

2022年で創立40年を迎えた長野県埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）は、県内の社会基盤整備等に伴う発掘調査に従事してきた。社会情勢に連動した急務な事業が多く、市町村域を超えた大規模かつ濃密な遺構や遺物の分布、あるいは希少な考古学的な発見に対しても、高精度で効率的な調査推進が求められる。そのため、常に測量などの調査技術について専門研究機関や専門業者の協力を得て研鑽を重ね、最新技術の導入も柔軟に進めてきた（村井2022）。

ここでは、近年加速度的に進化するデジタル技術を中心に、センターにおける新技術の導入状況を整理し、その可能性と課題を整理しておきたい。

(表1)。

2 発掘現場におけるデジタル技術等の実践

センターがコンピュータを本格的に導入したのは、1980年代後半からである。佐久市下茂内遺跡の旧石器時代石槍製作跡では、3万点に及ぶ石器の水平・垂直分布図、接合関係図の作成に初めてコンピュータシステムを導入し、旧地形の復元と製作跡の検討を可能とした。しかしながら、現地測量は機械化されておらず、座標値入力は全て手作業で行われていた（小林・近藤1990）。

1990年代には信濃町貫ノ木遺跡などの旧石器時代遺跡において、トータルステーションとコンピュータプログラムを組み合わせた三次元測量・解

表1 埋蔵文化財センターにおけるデジタル技術等の導入・実践状況

年 度	遺跡名	調査法等	発掘	整理
1989～1992	佐久市下茂内遺跡	コンピュータプログラムへの座標値・属性入力による遺物分布図作成（旧石器ブロックの垂直・水平分布・接合石器分布）		○
1993～1995	信濃町貫ノ木遺跡ほか	トータルステーションとコンピュータプログラムによる旧石器ブロックの調査及び属性分析	○	○
2000	茅野市長峯遺跡	RCヘリ・デジタルカメラによる正射投影画像作成 CADソフトによる遺構トレース	○	○
2002・2003	茅野市聖石遺跡・長峯遺跡	200mm望遠レンズ装着デジタル一眼レフカメラによる土器実測用画像作成（縄文時代中期土器700点の実測用）		○
2005～	中野市千田遺跡ほか	トータルステーションを用いた単点測量による遺構測量を本格的に開始	○	
2007	佐久市西近津遺跡群	つるべ式ボールとデジタルカメラによる正射投影画像作成 CADソフトによる遺構トレース	○	○
2007～2011	中野市柳沢遺跡	三次元レーザ測量（弥生時代青銅器埋納坑）、三次元写真測量（青銅製品）、X線CT分析（青銅製品）	○	○
2011～	佐久市西近津遺跡群ほか	土器実測用に磁気三次元位置測定装置の導入		○
2011～2020	長野市浅川原状地遺跡群、埴崎遺跡群ほか	電子平板測量の導入（追尾型トータルステーションと屋外対応PC・専用ソフトによる遺構測量システム）	○	○
2014～	全調査遺跡を対象	発掘調査記録用にフルサイズデジタル一眼レフカメラを本格導入	○	
2017	長野市小島・柳原遺跡群	X線CT分析（金銅製仏具の塔型鍍金台）		○
2020～	中野市南大原遺跡、辰野町沢尻東原遺跡	フォトグラメトリ（SCM-MVS）技術を応用した弥生土器・縄文土器の図化		○
2020	中野市南大原遺跡	X線CT分析（弥生時代中期の鉄製品）		○
2022	下諏訪町ふじ塚遺跡	三次元写真測量を応用した和鏡の正射投影画像・電子拓本画像作成		○
2022	松本市安塚古墳群、長野市長沼城跡	地中レーダー探査（埋没古墳、城館跡に伴う石列の事前把握）	○	
2022～	長野市長沼城跡、川田桑里遺跡、中野市南大原遺跡	地層抜き取り調査（ジオスライサー調査）、ボーリング調査（長沼城跡・南大原遺跡）、抜き取り試料・ボーリングコアのX線スキャナー・4K画像化、三次元レーザ測量（トレンチ壁面）		○
2023～	中野市南大原遺跡	UAV三次元レーザ測量、UAV三次元写真測量、LiDAR実装タブレットによる計測、測量データ及びオープンデータの閲覧用WEBサイト構築	○	○

析システムを本格的に運用した。これにより現場の単点（単独標高点）測量データに整理段階で得られた遺物種、石材、接合関係などの情報を追加して属性単位での分布状況の検討を可能にした。

2000年代になると、上述の単点測量は、遺構測量にも反映させて、測量した翌日に1/20縮尺で紙出力した測点群を図面上で結線する方式で、中野市千田遺跡等の遺構密度が高い大規模集落遺跡の図化記録の効率化を図ることができ、現在もこの手法は一般的に使用している。

また2000年代中頃にはデジタルカメラによる写真測量が試行されるようになる。佐久市西近津遺跡群では縄文時代中期から中世までの遺構群が濃密に重複する状況で、つるべ式ポールで吊り下げたデジタルカメラによる遺構単位の写真測量を実施し、掘削作業と測量作業を並行して進めることを可能とした（図1）。また報告書作成を見越して正射投影画像のデジタルトレースもCAD上で行った。一方、2010年代には電子平板測量を採用し、市街地で小規模な分割調査を余儀なくされた

長野市浅川扇状地遺跡群や、広大な調査区を複数職員が分割担当して調査を進めた同市塩崎遺跡群において、測量データの統一的な管理、線種などのレイヤー（画層）分けなどの機能を活かして、現場作業から室内作業、報告書作成までのデータ編集をスムーズに行うことが可能となり、整理期間の短縮化を実現した。

3 遺物実測や分析へのデジタル技術の導入

2000年代には、膨大な縄文土器が出土した茅野市聖石遺跡・長峯遺跡の整理作業で、デジタル一眼レフカメラと200mm望遠レンズ、安定性の高いカメラ台を準備し、レンズ取差を軽減できるように土器から約8m離れた距離から撮影し、Adobe Photoshop ソフトによる形状修正と色調補正編集を経た画像データを等倍に紙出力して実測図のベースに用いた。これにより装飾性の高い縄文時代中期土器の完形品700点を実測し、期限内に報



図1 つるべ式ポール・デジタルカメラを用いた写真測量（2007年・西近津遺跡群）



図2 フォトグラメトリ（SIM-MVS）手法を用いた弥生土器の図化（上：3D-PDFデータ、下：文様を鮮鋭地理した図）（2020年・南大原遺跡）

告書に掲載することができた。

また2011年からは土器実測に磁気三次元位置測定装置を導入している。土器の外形や文様に加え、ミガキやケズリ、ナデといった調整をペン型計測器で器面にタッチする方式で、簡便かつ感覚的な操作で高精度な計測が可能となり、佐久市西近津遺跡群や長野市塩崎遺跡群等の数千点に及ぶ土器実測作業で効率化を実現した。

2020・2021年には、急速に技術開発と実用化が進んだフォトグラメトリ（SfM-MVS）手法による弥生土器と縄文土器の図化を行った。整理室で1個体あたり200カット程度撮影したデジタル画像データを専門業者に転送し、特許技術によって土器文様などが鮮鋭化された図化データが返送される方法である（図2下）。データのやり取りだけで土器の図化作業が可能となったことで、土器自体の移動を必要とせず、破損リスクが大幅に軽減されたことも大きな利点といえよう。

X線CT装置を用いた分析調査は、2007年の中野市柳沢遺跡出土の弥生時代青銅製品を皮切りに、主に金属製品を対象として実施した。取得された断面画像データの分析によって、金属製品内面や断面の詳細な観察が可能となって、往時の製作技術復元などに関する調査研究が進展した。

4 事前把握調査への新技術の活用

2019年10月、いわゆる令和元年東日本台風で発生した線状降水帯の集中豪雨によって長野市の千曲川が決壊し、流域一帯に大きな被害をもたらした。大規模な水害を受け、国は翌年に「信濃川水系緊急治水対策プロジェクト」を立ち上げ、流域一帯の整備事業を計画した。それにより決壊地点の長沼城跡は河川防災ステーション建設、下流に位置する中野市南大原遺跡は大規模な遊水地整備事業の計画地に指定されることとなる。

河川防災事業の特性として、場所が限定されること、事業面積が大きいこと、事業進捗が極めて早いことがあげられる。先行する埋蔵文化財調査も広大な対象地を短期間で実施することが事業者や地域住民からも求められている。なかでも南大

原遺跡は事業面積72haのうち、調査対象面積が38haという空前の規模で、発掘調査に充てられた期間も極めて短いものであった。2023年から調査を受託したセンターは、当初から県教育委員会や地元市教育委員会、事業者と協議を重ね、初年度は事前把握を目的とした全域の詳細測量と効率的に確認調査を行い、調査成果を次年度以降の調査計画に反映させる方策を提案し、承認された。

調査には様々な最新技術を用いた。調査区全域の微地形はUAV測量（レーザー・写真併用）で把握し、確認調査では地層抜き取り調査（図3）¹⁾、ボーリング調査²⁾、トレンチ調査（図5・6）を実施した。地層抜き取り調査とボーリング調査は、近世水田が分布するとされる範囲に直線330mの測線を設定し、26本の地層抜き取り及び



図3 地層抜き取り調査（ジオスライサー調査）
（2023年・長沼城跡の中堀確認調査）



図4 地層抜き取り試料の4K画像・X線画像撮影作業
（2023年・南大原遺跡）



図5 LiDAR 実装タブレットによるトレンチの計測作業
(2023年・南大原遺跡)

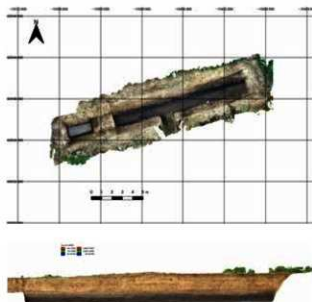


図6 LiDAR 測量データを編集加工したトレンチの平面画像
(上)と断面画像(下) (2023年・南大原遺跡)

2地点のボーリング調査を実施した。採取した地層試料はデジタル4K画像及びX線画像撮影を現地で併行して行い、堆積状況や含有物の有無などを即時に確認した(図4)。

調査成果は現地作業終了のおよそ1カ月後の工程会議で画像データを編集・整理した速報値を示した(図8)。古千曲川の河床礫を確認し、旧地形の傾斜方向と近世水田が棚田状に造成されていることを把握した。また同時に進めたトレンチ調査の成果も踏まえ、調査対象地の地形や想定される遺構分布によるゾーニングと次年度以降の調査計画案を提示できた(上田2024)。

5 デジタルデータの多様性

センターはこれまで、発掘調査の成果を発掘調査報告書として印刷刊行し、研究機関や図書館等に配布してきた。デジタル三次元データも、最終的には印刷仕様に再加工して二次元化することで目的を果たしたことになる。ただ、自明のことが三次元データの持つ情報量は膨大で、利用方法や活用方法も多様性に富む。

不可逆性が宿命ともいえる埋蔵文化財の発掘調査において、調査時点の状況を再現し、検証できることも三次元データの大きな特徴である。

2023年の長沼城跡や川田条里遺跡の調査では、深さ6mを超える城の堀跡の断面や水田跡が重層するトレンチ壁面、水田畦畔芯材の図化計測にレーザー測量を用いた。また南大原遺跡ではトレンチ調査の計測にLiDAR測量機能を実装したタブレットを用い、室内で平面・断面の正射投影画像を作成した(図5・6)。

地下水位の高い沖積地の調査や、広大な対象地の確認調査の場合、よりよい条件下で効率的に図化記録をとる必要がある。その点上記二者の方法は、短時間に大量のデータ取得が可能であり、有効であった。また取得した三次元データはカラー情報を持っているため、後日PCモニター上で堆積状況の確認や、出土芯材の観察といった現地調査を補完する作業を可能とした。

遺物のデータ化という点、発掘調査報告書『南大原遺跡2』(2021年)では先述したフォトグラメトリ(SfM-MVS)手法により作成した弥生土器の三次元画像データを、無料閲覧ソフトAcrobatReaderで自在に回転させて閲覧できる形式(3D-PDFファイル)で添付DVDに収納している(図2上)。

2017年には三次元データ³¹に基づいて柳沢遺跡出土の銅戈複製品を現代の鋳造技術で製作し、ハンズオン教材として出前授業などで活用している。

このほか、2022年の川田条里遺跡の調査では、隣接する上信越道建設時の調査(1989・1990年)と堆積環境や基本層序などを対比する際、当時の

記録類を保管管理する長野県立歴史館が近年進めている写真フィルムのデジタル化事業で、報告書非掲載のカラーリバーサルフィルムが画像データ化されていたことで、容易に閲覧することができた。

6 今後の方向性と課題

河川防災事業の緊急調査を進めている南大原遺跡では、調査情報の閲覧用にWEBサイトを立ち上げている(図7)⁴⁾。サイト内は様々なデータをレイヤーごとに整理している。現在は現地調査データや既存情報(正射投影画像化した古地図・データ処理した航空レーザ測量データ)、オープンデータ(国土地理院公開データなど)を掲載している。今後は調査進捗図や工事関係図などの情報を追加することも可能で、事業者など関係機関との情報共有や調査方法などの検討をPC上で行うことも想定している。

振り返ると、埋文センターは大量の遺構や遺物

の出土や貴重な発見があった時、事後の対応としてデジタル技術などを導入してきた。しかし、南大原遺跡の調査を通して、迅速性・多様性が特徴のデジタル技術などの新技術は「調査計画」立案前の事前把握から導入することが、保護措置の決定や本調査の適切かつ効率的な実施に繋がることを改めて確認することができた⁵⁾。

今後、調査者は計画段階で対象とする遺跡に最適な調査法や調査技術を選択する能力が、より一

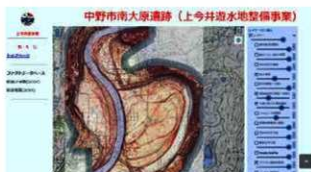


図7 測量データやオープンデータなどをレイヤー分けに表示したWEBページ(2023年・南大原遺跡)

上今井ジオスライサー調査速報(2023/10/28)

※地層境界の判定は変更の可能性あり

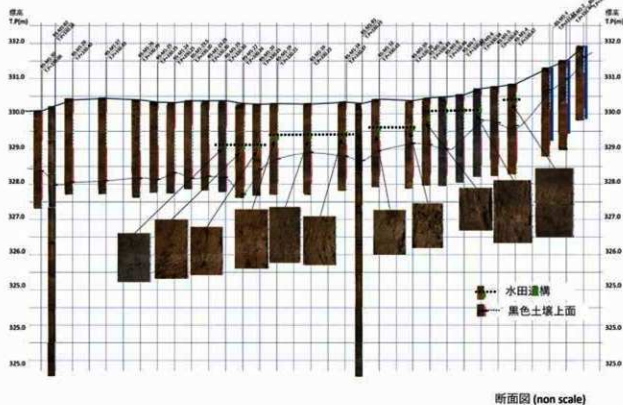


図8 地層抜き取り試料・ボーリングコアのデジタル画像を用いて遺跡の旧地形や近世水田跡の検討用に作成した断面図(2023年・南大原遺跡)

層求められていくだろう。その際、他分野で開発された新技術についても柔軟に対応し、調査への活用を検討していくべき段階にきていると強く感じる。

ただ、それらはいくまでも調査目的を達成するための手法の一つに過ぎず、考古学などの専門的な知見に基づき調査成果を評価できる、調査者自身の力量や視点が最も大切であることは今も昔も変わらない。そしてセンターでこれまで培われて、蓄積されてきた調査者の視点を、組織として次世代に継承していくことが最重要課題であると認識している。

本稿執筆にあたり、2022・2023年度にセンターに派遣された広田良成氏（北海道埋蔵文化財センター）には測量技術における多くのご教示を得るとともに掲載図作成にご協力いただいた。また原口強氏（東北大学特任教授）、高田圭太氏（復建調査設計）には調査技術の実践や調査成果の公開方法について多くのご教示を得た。記して感謝申し上げる。

註

- 1) ジオスライサー調査。地表面下の地層断面を定方向で切り出して、採取できる地層採取法。トレンチ調査に比べて掘削による影響面積が百分の程度に抑えることが可能で、短期間に複数地点の調査を安全に実施可能。センターでは2022年の長沼城跡（岡村2023）、川田条里遺跡（綿田2023）で初めて実施し、それぞれの調査目的を果たす成果を得た。長沼城跡では2023年も堀跡調査で採用した（図3）。
- 2) 南大原遺跡では地表面下8mまで掘削可能なやぐら組みのボーリング調査を採用した。長沼城跡では新潟大学災害・復興科学研究所卜部厚志教授の指導のもと、小型クローラータイプのパイプロドリルを用いた無水式ボーリング法を採用し、城館跡の堀跡や郭跡の痕跡を確認している。
- 3) 三次元データは2012年に愛媛大学吉田広教授と元興寺文化財研究所の塚本敏夫氏（当時）が計測したデータを使用。
- 4) 現在は関係機関のみ閲覧可能なクローズドサイトとしている。
- 5) 埋蔵文化財の事前把握を進めるため、三次元レーザ測量などの技術導入を図ることは、昨今の埋蔵文化財保護行政を取り巻く社会情勢上、国が早急に取り組むべき事

項の一つにも示されている（芝2023）。

引用・参考文献

- 上田典男 2024「Ⅱ発掘作業の概要（Ⅱ）南大原遺跡」[長野県埋蔵文化財センター年報] 40
- 岡村秀雄 2023「Ⅱ発掘作業の概要（Ⅰ）長沼城跡」[長野県埋蔵文化財センター年報] 39
- 川崎保・河西克造・長谷川桂子 2022「Ⅹ調査研究ノート（4）」下諏訪町ふじ塚遺跡の和鏡」[長野県埋蔵文化財センター年報] 38
- 小林秀行・近藤尚義 1990「遺跡の整理におけるコンピューター利用について—下茂内遺跡での実践例から—」[長野県埋蔵文化財センター紀要] 3
- 芝康次郎 2023「なぜ今、新技術か—埋蔵文化財行政をめぐる課題解決に向けて—」[月刊文化財] 令和5年8月号（719号）
- 文化庁監修 2023「特集 発掘調査の新技術」[月刊文化財] 令和5年8月号（719号）
- 村井大海 2022「埋文センター調査法の探求史」[信州発掘奮戦録]
- 村上龍 2023「文化財の未来図—（ものつくり文化）をつなぐ」岩波新書
- 綿田弘実 2023「Ⅱ発掘作業の概要（2）川田条里遺跡」[長野県埋蔵文化財センター年報] 39

本稿で取上げた報告書

- 長野県埋蔵文化財センター 1992「下茂内遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書11
- 長野県埋蔵文化財センター 2000「眞ノ木遺跡・西岡A遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書15
- 長野県埋蔵文化財センター 2005「聖石遺跡・長峯遺跡・別沢遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書69
- 長野県埋蔵文化財センター 2012「中野市柳沢遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100
- 長野県埋蔵文化財センター 2013「中野市千田遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書98
- 長野県埋蔵文化財センター 2021「西沢津遺跡群」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書104
- 長野県埋蔵文化財センター 2020「小島・柳原遺跡群」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書127
- 長野県埋蔵文化財センター 2021「浅川扇状地遺跡群」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書130
- 長野県埋蔵文化財センター 2021「南大原遺跡2」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書131
- 長野県埋蔵文化財センター 2024「沢尻東原遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書132
- 長野県埋蔵文化財センター 2024「石川条里遺跡 長谷鶴前遺跡群」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書134

(7) 長野県内遺跡出土動物骨集成について

櫻井秀雄・茂原信生・本郷一美・川崎 保

はじめに

長野県内では人骨と同様に遺跡出土獣骨についても多くの報告がされている。これらの研究はおもに信州大学医学部解剖学教室によって行われてきた。この蓄積は長野県内の多くの遺跡で行われており、私たちは古代の人びとがさまざまな動物を利用して生活していたことを知ることが出来る。

この資料を元にその後の研究結果を総合、集成することで時代的地域的な分布を知ることができ、長野県内の動物相の変遷を検証することができるようになる。また、古代人がどのように動物を利用して生活していたのかの実態が明らかにされてくる。動物考古学的知見も含め出土獣骨へのさらなる関心が高まることを期待したい。基礎資料として大いに活用されればと願うものである。

北信地域
中野市

出土動物骨一覧表

	遺跡名	鑑定(著者)	主な時代	出土動物名ほか
1	笠倉遺跡 栄村	吉原佳市	中近世	ニホンジカ、ウマ歯
2	ひんご遺跡 長野地域 長野市	パレオ・ラボ	縄文後期	ニホンジカ、イノシシ、イヌ?、トリ

	遺跡名	鑑定(著者)	主な時代	出土動物名ほか
3	浅川扇状地遺跡群	本郷一美・櫻井秀雄 茂原信生	古墳・古代・平安 ・中世	ウマ、ウシ、ヤギ、イヌ、イネコ、ニホンザル、イノシシ、ノウサギ、ニワトリ
4	浅川扇状地遺跡群・三才遺跡	茂原信生	縄文中期後半 ～中近世	ウマ(古墳前期、8C前葉、16C)、ウシ(時代不明)、ニホンジカ、イノシシ(縄文中期後半、弥生後期)、イヌ(時代不明)
5	石川条里遺跡	茂原信生	弥生	イヌ、ウマ、ニホンジカ、イノシシ
6	大清水遺跡	宮尾雄雄	縄文後晩期?	ニホンジカ、イノシシ、タヌキ、ウサギ、トリ
7	川田条里遺跡	鶴田典昭(茂原信生)	中世	ウマ、ウシ、イノシシ
8	柳原宮北遺跡	青木和明	古墳後期	ウマ歯
9	小島・柳原遺跡群	茂原信生・本郷一美 ・櫻井秀雄・五十嵐 百合子	平安	ニホンジカ、イノシシ、ウマ、ウシ、トリ
10	篠ノ井遺跡群(7)	バリノ・サーヴェイ	平安	ウマ(2個体)
11	篠ノ井遺跡群(6)	石丸敦史	弥生後期 ～平安後期	ウマ(平安後期)、ニホンジカ(古墳後期:歯、奈良～平安:鹿角)
13	平林東沖遺跡	金子浩昌	古墳～平安	ウマ、ウシ、ブタ、イヌ、ニホンジカ、ガン類の上腕骨骨体1
14		バリノ・サーヴェイ	平安	ウマorウシ、ニホンジカ
15	松代城下町埋橋遺構	高山幸司	幕末～明治	ニワトリ、タマネズミ、魚・貝類、幼児骨
16	松原遺跡	茂原信生	弥生中期	イノシシ、シカ、骨角牙製品。鹿角を含む。
17	宮崎遺跡	西澤寿見	縄文	イノシシ、ニホンジカ、カモシカ
18	村東山手遺跡	櫻井秀雄・茂原信生	縄文時代が大平	ウマ(古墳と平安時代)、ニホンジカ、イノシシ
19	ロープ岩洞穴遺跡	宮下健司	弥生	ノウサギ、キジorヤマドリ
須坂市				
20	井上・幸高遺跡群	茂原信生	古墳～中世	ウマ、ニホンジカ、キツネ、オオカミ(イヌ)
21	東村石小屋洞窟	水峯光一	縄文～弥生	ニホンジカ、イノシシ
千曲市				
22	丹丸房遺跡	西澤寿見	縄文	イノシシ、ニホンジカ
23	大穴遺跡	茂原信生	古墳	ウマ、ウシ
24	更埴条里遺跡・原代遺跡群	寺内隆夫・櫻井秀雄 岸澤雅夫	縄文・古墳～古代	イノシシ、ニホンジカ、ウマ、ウシ、イヌ
25		茂原信生	弥生・古墳	ウマ、ウシ、ニホンジカ、イノシシ、トリ
26	原代遺跡群	縄文 松井 章	縄文	サケ、マス(水洗選別法による)
27		西本豊弘	古墳	ニホンジカ、ウシ、ウマ、イノシシ、イヌ、ブタが出土(奈良～平安?)、サル、カモシカ、ヤギ・ヒツジ、タマ、ウサギ、ニワトリ、キジ類、総数1000点
28		高橋 理・水沢教子 岡村秀雄	縄文	イノシシ(イノシシの年齢について)
29	原代遺跡群 大塚遺跡VI	佐藤信之	中世	ウマ

30	力石条里遺跡群	茂原信生	弥生前期末 ～中期後葉	ニホンジカ、イノシシ、骨角器(シカ角) シカ歯 イノシシ歯(M3)
31	生仁遺跡	西洋寿晃	古墳前期	イヌ
32	生仁遺跡	森本	古墳	ニホンジカ(1号祭壇遺構)
33	生仁遺跡Ⅲ	中村由克	古墳	ニホンジカ(81点)、イノシシ(10点)、ウマ(17点+1頭分)、イヌ(14点+2頭分)、鳥類(9点)
34	生仁遺跡Ⅳ	小野紀男	5C前・中葉	ニホンジカ(鹿角)(3号住居跡)
35	東條遺跡	櫻井秀雄	中世	ウマ、ニホンジカ、イノシシ、イヌ
36	屋地遺跡	西洋寿晃	平安	シカ8頭、イノシシ2頭、ウシ1頭、ウマ2頭、イヌ2頭、テン、イタチ

坂城町

37	上五明条里水田址	茂原信生	5C～10C	ニホンジカ、イノシシ
38	込山D遺跡	田中和彦	時期不明	イノシシ? (ウシでは櫻井)
39	保地遺跡	茂原信生	縄文	イノシシ、ニホンジカ、ツキノワグマ、ムササビ、オオカミ(かなりおおきなオスの可能性大)

高山村

40	四ツ屋遺跡群 八幡添遺跡	小宮 孟	縄文	ニホンジカ、イノシシ(焼骨)
----	-----------------	------	----	----------------

坂網町

41	宇川氏船跡	笹澤 浩	15C末～16C前半か	ウシ下肢骨(SK-11埋土)
----	-------	------	-------------	----------------

上田地域

上田市

	遺跡名	鑑定(著者)	主な時代	出土動物名ほか
42	上田城跡 (中屋敷跡・作業場跡)	和根崎剛	近代	ウマ、ウシ(歯フラスコ)
43	上田原遺跡	西洋寿晃	縄文～平安	ウマ(1-34号土壌:古墳前期、墓内のウマとしてはかなり古い)
44	陣の岩岩除遺跡	綿田弘実	縄文 弥生	イノシシ、ニホンジカ、カモシカ、ヒキガエル
45	大目ノ木遺跡・宮平遺跡	茂原信生	7C～中世	ニホンジカ、ウシ、イノシシ、ウマ(大目ノ木は骨片、古墳前期と6C末～7C前葉)
46	北上田遺跡	直良信夫	?	ニホンジカ、イノシシ
47	埴田遺跡・西田遺跡	金子浩昌	古墳	ウマ歯
48	八幡美遺跡Ⅱ	西洋寿晃	縄文中期後葉 ～後期中葉	ニホンジカ、イノシシ、ウマ
49	深町遺跡	西洋寿晃	縄文	イノシシ、ニホンジカ、ツキノワグマ、タヌキ、テン、ニホンザル、鳥類
50	四日市遺跡Ⅱ	金子浩昌	古墳	ニホンジカ、イノシシ
51	四日市遺跡Ⅲ	?	平安	鹿骨、ニホンジカ(鹿角)

東御市

52	鍛冶屋遺跡	堀田雄二	中世以降	ウマ、ウシ、イヌ
53	瀧野大屋間遺跡	鈴木興他		ニホンジカ、ウマ
54	下金山遺跡	西洋寿晃	平安	ニホンジカ(SB03・SK02:平安、SK16古代)
55	真行寺遺跡	茂原信生	縄文	ニホンジカ、イノシシ
56	江田遺跡	西洋寿晃	縄文	ニホンジカ(焼骨、ほとんどがシカの角の断片)
57	不動坂遺跡	西洋寿晃	縄文か?	ツキノワグマ、イヌ、イノシシ、ニホンジカ、ウマ、アナグマ
58	望月牧野馬跡大原地点	福島邦男・杉田正男	時代不明	イノシシの可能性が高い骨(野馬上手の時代とされる)

佐久地域

小諸市

	遺跡名	鑑定(著者)	主な時代	出土動物名ほか
59	石神遺跡	金子浩昌	縄文	イノシシ、ニホンジカ、オオカミ、キジ
60	鑄物師原遺跡	バリノ・サーヴェイ	古墳後期	ニホンジカ
61	水遺跡	樋泉浩二	平安	イノシシ、ニホンジカ、ウマ
62	関口A・関口B・下柏原	宮崎重雄	古墳	ニホンジカ、イノシシ、カモシカ、ウマ、キジ科のトリ
63	関口B遺跡	宮崎重雄	平安	イノシシ、ニホンジカ、ウマ、キジ
64	郷土遺跡	金子浩昌・茂原信生	縄文中期後葉	ニホンジカ、イノシシ、ノウサギ、キジ(茂原鑑定分:ニホンジカ、イノシシ)
65	竹花・大塚原遺跡	金子浩昌	古墳～奈良・平安	ウマ、ウシ、イノシシ、ニホンジカ
66	野大附遺跡	茂原信生	幕末 (ウマ年代測定)	ウマ(右腕尺骨・右脛骨)
67	東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原	金子浩昌	古墳後期～平安	ウマ、ウシ、ニホンジカ、イノシシ、カジキマダロ椎骨

佐久市

68	芦内岩除遺跡	樋口昇一・藤沢平治	縄文前期か?	ニホンジカ、イノシシ
69	家浦遺跡Ⅱ	小林良寿	平安	ウマ、ニホンジカ
70	池畑遺跡	宮崎重雄	平安	ウマ、ウシ
71	市道遺跡	林幸彦	古墳後期	ニホンジカ(シカ角加工品)
72	市道遺跡Ⅲ	黒澤一男 (パレオ・ラボ)	古墳～中世	ウマ、大型陸獣
73	上の城遺跡Ⅱ	植月 学	古墳後期～平安	ウマ、ウシ、ニホンジカ、イノシシ
74	円正坊遺跡Ⅱ	佐久市教委	弥生後期	ニホンジカ、イノシシ、トブ

75	円正坊道跡Ⅸ	林 幸彦・佐々木宗昭	6C中～7C初	獣骨(馬?)
76	六井城跡	宮崎重雄	中世	ウマ、ウシ、ニホンジカ、ブタ、ヤギ
77	大岩六洞窟遺跡・芦内岩跡遺跡	島田恵子	大岩穴：平安、芦内：縄文・弥生	ニホンジカ/イノシシ
78	大奈良遺跡	バリノ・サーヴェイ	縄文中期	イノシシ、ニホンジカ、鳥類(ワシ類)
79	金井城跡	宮崎重雄	中世	イヌ、イノシシ、ニホンジカ、ヤギ、ウシ、ウマ
80	上曾根遺跡	宮崎重雄	平安	ウマ：中手骨211.5、推定体高129.28、中型馬(林田)
81	上聖道遺跡	須藤隆司	平安	不明獣骨、シカ骨片
82	上吹上遺跡	福島邦男	中近世?	ウマ、馬歯4点
83	川原遺跡	宮崎重雄	弥生中期～古墳後期	ニホンジカ、ノウサギ(左腕骨近位半：古墳時代2号壜穴住居址)
84	観音堂遺跡	宮崎重雄	中世	イヌ、ウマ、ウシ、ネズミ、タイ、ニホンジカ(角釘)
85	北一本柳遺跡Ⅲ	バリノ・サーヴェイ(金井慎司)	弥生・古墳・中世	イノシシ?、ウシ、ウマ、トリ類
86	北裏遺跡群	本郷一美・櫻井秀雄	弥生・古墳前期・平安以降	ウマ：平安以降、ニホンジカ：弥生、イノシシ：古墳前期
87	北西の久保遺跡	林幸彦	弥生・古墳	ウマ
88	五里田遺跡	宮崎重雄	古墳	ウマ(ウマ一側体分 13-14歳牡馬 在来馬相当の大きさ)(縄文から平安の複合遺跡)
89	芝宮遺跡群・中原遺跡群	藤原直人	古墳～古代	コイ、ニシン、カエル、イノシシ、マイワシ、海産貝、ほかに県内26道跡の獣骨、縄文～中世に関する事例紹介。
90	下穴虫遺跡Ⅰ	宮崎重雄	平安末期	ニホンジカ(シカ頭骨、角坐骨、角片)
91	下川原・光明寺遺跡	宮崎重雄	平安中葉(10C前半)	ニホンジカ(幼獣)
92	下信濃石遺跡	黒澤一男(バレオ・ラボ)	弥生前期・中世	ウマ、イノシシ、ニホンジカ、ウシ
93	下曾根遺跡	宮崎重雄	古墳～平安	ウマ、ウシ、ニホンジカ、キジ?、トリ：上腕骨片
94	下聖道遺跡	宮崎重雄	古墳	ニホンジカ、イノシシ、カモシカ、ウマ。ウマは平安～中世、頭部のみ出土2～2.5歳程度の若駒
95	白岩城跡遺跡Ⅲ	森泉かよ子	耕作土より出土	ウマカウシの骨と歯
96	周防畑遺跡群	茂原信生・本郷一美・櫻井秀雄	弥生後期、11C	ウマ、イノシシ、ニホンジカ
97	大豆田遺跡Ⅰ・Ⅱ	林幸彦	古墳～平安	不明獣骨、馬歯(写真から)
98	高山遺跡Ⅰ・Ⅱ	宮崎重雄	平安	ウマ、ニホンジカ、イノシシ
99	地家遺跡	茂原信生・櫻井秀雄・本郷一美	中世	ウマ、ニホンジカ、イノシシ
100	寺送遺跡	宮崎重雄	古墳	ウマ、イノシシ、イヌ、ニホンジカ、トリ
101	中道遺跡Ⅲ	バリノ・サーヴェイ	弥生?	大型獣類四肢骨1点
102	長峯古墳	宮崎重雄	古墳	ウマ(歯の萌出状況から1歳数カ月の幼駒馬と判断。性別不明。)
103	中宿遺跡	宮崎重雄	中世～近世	ウマ、イノシシ、イヌ
104	梨の木遺跡	小山岳夫	弥生中期	ヒト? (第1号溝状遺構)
105	西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ	宮崎重雄	弥生～平安	ウシ(平安)、ニホンジカ、イノシシ、ウマ(奈良)
106	西一本柳遺跡Ⅴ	黒澤一男(バレオ・ラボ)	弥生時代中期～中世	ウマ、ニホンジカ
107	西一本柳遺跡Ⅹ	古環境研究所	弥生中期～平安	イヌ、ウシ
108	西一本柳遺跡ⅩⅣ	バリノ・サーヴェイ(金井慎司)	弥生・古墳・奈良	ウシ、ウマ
109	西表・竹田峯遺跡	宮崎重雄(高村博文)	縄文～近現代	ウマ、ウシ
110	西近津遺跡群	櫻井秀雄	中世	イノシシ(18点)、ニホンジカ(108点)、イヌ(1点)、タヌキ・モグラほか(9点)
111	西近津遺跡群	本郷一美	中世	ウシ(95点)、ウマ(140点)
112	西近津遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ	バリノ・サーヴェイ	古墳～平安	ウマ、ウシ、ニホンジカ、イノシシ
113	西近津遺跡Ⅵ	林幸彦	縄文・弥生	ウマ?
114	西近津遺跡Ⅶ	上原 学	平安	ウシ(状態の良い下顎骨、四肢骨：写真から)
115	西村アケ遺跡	宮崎重雄(高村博文)	近・現代	ウマ(馬の墓坑)
116	西八日町遺跡Ⅲ(東大門先、西一本柳、北一本柳)	バリノ・サーヴェイ(金井慎司)	古墳・奈良・中世	ウマ、イノシシ、ニホンジカ、ウシ、トリ(ニワトリ?)、東大門先遺跡(ウマ、不明獣骨 古墳～奈良)西一本柳遺跡(ウマ、ウシ 古墳～中世)、北一本柳遺跡(ウマ、ウシ、イノシシ? 中世か)
117	野沢館跡Ⅶ・Ⅷ・Ⅹ	森泉かよ子	中世・近世	牛馬の歯
118	野馬窪遺跡Ⅱ・Ⅲ	小林政寿	中世前期	ウマ
119	野馬窪遺跡Ⅳ	出澤 力	縄文・中世	ウマ(臼歯、大髌骨と思われる足の骨)
120	権名平遺跡	宮崎重雄	中世・近世	ウマ
121	香取前遺跡Ⅰ・Ⅱ	林 幸彦	時期不明	ウマ(馬一頭分出土)
122	東大門・菅田Ⅳ・中金井Ⅱ	宮崎重雄	中世末	ウマ(獣骨3点、詳細は金井城跡報告書に記載)
123	聖原遺跡(第5分層)	バリノ・サーヴェイ	古代	ウマ、ウシ、ニホンジカ、イヌ
124	聖原遺跡	バリノ・サーヴェイ	奈良	ウマ(40体)、ウシ(12体)、イノシシ(7体)、ニホンジカ(12体)、イヌ(1体)
125	聖原遺跡	小林政寿	平安	ウマ(写真から)

126	藤塚古墳	森本岩太郎	古墳	イヌ(複数個体分)
127	前田遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	宮崎重雄	古墳	ウマ、ウシ、ニホンジカ、ニホンザル(不明小動物骨焼骨四肢骨片6)
128	前藤部遺跡	宮崎重雄	平安 中世	ウマ、ニホンジカ、ウシ(一部上腕骨? シカ or ヤギ、一部椎骨についてウマあるいはウシの記載)
129	宮添遺跡	宮崎重雄	古墳・奈良・平安	イノシシ(肩甲骨)
130	宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ	アーキジオ	平安 中世	ウマ、ウシ、ニホンジカ、イノシシ、イヌ、ネズミ類(第1分冊)
131	宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	植月 学	古墳後期~古代 中世	ウマ、ウシ、イノシシ、ニホンジカ、イヌ、フタ(第2分冊)
132	森下遺跡	高村・三石・助川	時代不明	ウマ(骨と歯)
133	森中・寄塚・今井西原・今井宮の前	茂原信生・本郷一美 櫻井秀雄	弥生中期・古代	ウマ、イノシシ、ニホンジカ
134	森平遺跡・大田田遺跡Ⅲ	樋原泉二・孔 智賢	古墳?/古代	ウマ/ウマ、ニホンジカ

南牧村				
135	志なの入道跡	高田恵子・鈴木 誠	縄文・中世	ニホンジカ、ホンドテン、骨角器(信大医学部蔵)
136		藤田 敬		ニホンジカ、テン、ヒキガエル、鳥類

南相木村				
137	大師遺跡	中村賢太郎 (バレオ・ラボ)	縄文前期後葉	ニホンジカ(中手骨焼骨)

北相木村				
138	膝下洞窟	井出喜信他	時代不明	ウマ(密殺料理)
139	柳原岩陰遺跡	西洋寿見	縄文早期	ニホンザル
140	柳原岩陰遺跡	宮尾康雄・西洋寿見 鈴木茂忠	縄文	ノウサギ、ツキノワグマ、イヌ、タヌキ、キツネ、テン、オオカミ、イタチ、アナグマ、カワウソウ、ジネズミ、モグラ、ニホンザル、リス、ムササビ、カゲネズミ、ハタネズミ、アカネズミ、ヒメネズミ19種
141	柳原岩陰遺跡・天狗岩岩陰	藤森英二	縄文	ニホンジカ、イノシシ、カモシカ
142	柳原岩陰遺跡 1 / 3	河沙健多郎	縄文早期	哺乳類
143	柳原岩陰遺跡 2 / 3	江田真紀・渡辺双葉	縄文早期	鳥類
144	柳原岩陰遺跡 3 / 3	樋原泉二	縄文早期	魚類、両生類、爬虫類

御代田町				
145	塚田遺跡	宮崎重雄	古墳 7C	ウマ(下顎骨及び下顎骨、上顎骨のみ出土。10歳±1。在来中型馬よりやや小さめ。)
146	根岸遺跡	宮崎重雄	平安	ウマ
147	野火付遺跡	大島浩二、松尾信一 森下芳臣	平安	ウマ

大北地域

大町市				
	遺跡名	鑑定(著者)	主な時代	出土動物名ほか
148	一津遺跡	西洋寿見	縄文	ニホンジカ、イノシシ、小型動物
149	借馬遺跡Ⅱ	西洋寿見	古墳後期	ニホンジカ、イノシシ、トリ骨片
150	栄見原遺跡Ⅱ	森義直	平安	ニホンジカ、トリ(足の骨)

松本地域

松本市				
	遺跡名	鑑定(著者)	主な時代	出土動物名ほか
151	荒海渡遺跡	森義直	縄文中期後半 ~後期初	ニホンジカ、トリ(キジ)
152	今井北耕地遺跡Ⅱ	西洋寿見	近現代	ウマ
153	牛の川遺跡	西洋寿見	平安	ニホンジカ?(焼骨)
154	内田南畑遺跡	西洋寿見	縄文	ニホンジカ(焼骨あり。やや小型動物の長骨あり)
155	ニリ穴遺跡	吉井 理	縄文後晩期	シカ、鳥、イノシシ(鹿角を含む)、焼骨)
156	三の宮遺跡	西洋寿見	古墳	ウマ(2頭分出土。ウマの埋葬墓を窺わせる)
157	高宮遺跡Ⅲ	西洋寿見	古墳	シカ?
158	坪ノ内遺跡	西洋寿見	縄文中後期	ニホンジカ、イノシシ
159	中山古墳群・カニホリ東・西遺跡	西洋寿見	古墳	シカ骨
160	仁王門遺跡	山田理徳・森 義直	平安~中世	トリ(報告書写真のみとるとりではない?)
161	林山腰遺跡Ⅱ	澤柳秀利・直井雅尚	近代	ウマ、ウシ、ヤギ(幼獣ほぼ1頭分)
162	松本城	西洋寿見	時代不明	ニホンジカ(17点)、イノシシ(12点)、ニホンザル(3点)、イヌ(7点)、ノウサギ(2点)、ネコ(2点)、ドブネズミ(2点)、ウマ(2点)、トリ類55点固定、サカナ
163	松本城下町跡東町	小山貴広	近世(戦国~江戸)	イノシシ、ニホンジカ(角4)、ウマ、イヌ(上顎骨1)
164	松本城三の丸小幡町	吉井 理	近世	ニホンジカ、イヌ
165	丸の内遺跡	藤沢宗平	縄文中後期	ニホンジカ
166	三間沢川左岸遺跡	文化財科学研究所センター	平安	ウマ、ウシ、ニホンジカ、イノシシ、イヌ、ネコ、テン、ニホンジカ、ニワトリ
塩尻市				
167	平出遺跡	直良貞夫	弥生(~平安?)	ウシ、ニワトリ、ウマ

安曇野市

168	瀬神明宮前遺跡	大澤・山本・関	古墳	ウマ
169	北村遺跡	櫻井秀雄・茂原信生	縄文	イノシシ(313点)、ニホンジカ(197点)、ツキノワグマ、タヌキ、カモシカ
170	雁山遺跡	藤沢宗平	縄文	ニホンジカ、トリ?
171	穂高古墳群	岡野	近世以降	ウシ
172		浪形	近世以降	ウマ、豚獣
173		今藤	10~11C	ウマ、動物骨(西暦980~1024:AMS年代測定)
174		藤原直人	古墳~古代	ウマ

山形村

175	三夜塚遺跡	西澤寿晃	時期不明	ウマ、ウシ
176	中町立道西遺跡	バリノ・サーヴェイ	中世	ウマ

木曾地域

	遺跡名	鑑定(著者)	主な時代	出土動物名ほか
177	マツバリ遺跡	西澤寿晃	縄文	ニホンジカ、イヌ、ニホンザル、イノシシ、ツキノワグマ、キジ、ヤマドリ(最小個体数:シカ2、イノシシ4、クマ1、イヌ1)
178	大明神遺跡	西澤寿晃	縄文	ニホンジカ、イノシシカモシカ、ニホンザル、イヌ(人骨伴出)

諏訪地域

岡谷市

	遺跡名	鑑定(著者)	主な時代	出土動物名ほか
179	架久保遺跡	西澤寿晃	縄文	種不明骨片、鹿角片
180	曾根遺跡	中村龍雄	縄文か	ニホンジカ、イノシシ、クマ
181	古岩窪岩除遺跡	執筆者不明	古墳	ニホンジカ
182	柳社宮司遺跡	河西克造	中世後半~近世	ウマ or ウシ、歯片(SDX3)

下諏訪町

183	西土前田遺跡	宮坂清	中世	ニホンジカ、ネズミ類
184	柳柱尾根遺跡	小松隆史	近・現代	ウマ(左半身の一部)

上伊那地域

	遺跡名	鑑定(著者)	主な時代	出土動物名ほか
185	的場・門前遺跡	西澤寿晃・林 茂樹	縄文中期	ニホンジカ
186	樋口五反田遺跡	西澤寿晃・直良信夫 鈴木 誠	縄文晩期、弥生後期	ニホンジカ、イノシシ、カモシカ、シバイヌ

飯伊地域

	遺跡名	鑑定(著者)	主な時代	出土動物名ほか
187	新井原遺跡	小林正春	古墳	ウマ
188	石子原遺跡	遠藤麻呂	時代不明か	ウマ(田石器~弥生後期中心の遺跡)
189	石子原遺跡	茂原信生・崎崎智子	江戸	ウマ
190	鬼釜遺跡	河西克造(茂原信生)	古墳	ウマ
191	風張遺跡	茂原信生	中世	トリ(キジ:中足骨)
192	上山遺跡群	坂井勇雄	古墳	ウマ歯
193	相川遺跡群	馬場保之・渋谷恵美子	奈良	ウマ臼歯
194	中村中平遺跡	茂原信生	縄文後晩期	ニホンジカ、イノシシ、クマ、イヌ
195	宮垣外遺跡	宮崎重雄	古墳・中世	ウマ

まとめにかえて

紙幅の関係上、動物の種類や時代が不明なものは、今回省いてある。また、報告書を中心とした引用参考文献も割愛した。

この一覧表のもとになったデータには、いずれも遺跡出土古人骨情報同様に、文献と紐付けされた紙ベース及び電子情報として広く一般に公開する予定である。

この資料の取りまとめにあたり、多くの方々か

らの助言やご助力を賜った。長野県埋蔵文化財センター図書室資料の検索、整理には坂田恵美子さんに多大なご協力をいただいた。データ整理に際しては獨協医科大学技術員筒井 蓮氏に尽力いただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

本出土動物骨一覧は、櫻井秀雄氏の基礎研究をもとに、川崎が情報を収集しまとめたものである。なお、本集成には令和5年度長野県科学研究助成金の成果を含む。

長野県埋蔵文化財センター年報40 2023年度

発行日 2024（令和6）年3月22日

編集発行 （一財）長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4

電話：026-293-5926 FAX：026-293-8157

E-mail：maibun@naganobunka.or.jp

印刷 信毎書籍印刷株式会社